佐々氏

新撰國語讀本註解

自一至六合巻

全

特
274
130

始

特100
716

佐々政一氏

新撰
國語讀本註解

一巻ヨリ六巻マデ

合巻

大正
2. 5. 28
内交

新撰國語讀本詳解 目次

卷一

一、我が帝國 一
二、國花 一
三、美しき自然 二
四、田舍より 三
五、千本松原(上) 三
六、千本松原(下) 四
七、太宰府詣 四
八、櫻井の里 六
九、競 馬 六
一〇、日本海の海戰(上) 八
一一、日本海の海戰(中) 九
一二、日本海の海戰(下) 二
一三、心のゆがみ 一三
一四、動物の保護色(上) 一三
一五、動物の保護色(下) 一四
一六、征衣上途 一五
一七、座右の銘 一六
一八、一燈錢 一七
一九、吾輩は猫である 一八

二〇、四季の月　一八
二一、我が故郷　一九
二二、鎌倉の夏　二〇
二三、夕立　二一
二四、蟻　二二
二五、土蜘蛛　二三
二六、大海原　二四
二七、水兵とその母　二五
二八、國民の義務　二六
二九、飯待つ間　二六
三〇、冒險小僮　二八

卷二

一、比叡山上の眺望　一
二、朝と夕　二
三、社會の組織　三
四、世界は共通なり　四
五、鷹山公と平洲　五
六、姉弟　六
七、大海の日出　六
八、俵藤太秀郷　七
九、金が崎　八
一〇、四羽の小鳥　九
一一、我が幼時　一〇
一二、時間　一一
一三、軍旗　一二
一四、弦月旗　一三
一五、兎狩　一四
一六、土地と植物　一五
一七、根室の冬　一六
一八、歳の暮　一六
一九、雪　一六
二〇、海豹島　一八

二一、山の幸海の幸(上)　一九
二二、山の幸海の幸(下)　一九
二三、維新の三傑　二〇
二四、義士泉岳寺へ引揚ぐ　二一
二五、善は易くして惡は難し　二三
二六、安宅　二四
二七、犬ころ(上)　二四
二八、犬ころ(下)　二五
二九、家郷に贈る　二五
三〇、峠の茶屋　二六
三一、自然の音樂　二七
三二、初春の歌　二七

卷三

一、明治天皇御製　一
二、畝傍の山陵　一
三、西國花便り　二
四、錦の直垂(上)　三
五、錦の直垂(下)　四
六、捕鯨記(上)　五
七、捕鯨記(下)　六
八、箱根　八
九、東京　九
一〇、年中行事　一〇
一一、トラファルガルの海戰(上)　一一
一二、トラファルガルの海戰(下)　一三
一三、初夏の感　一三
一四、桶峽　一四
一五、南洲遺訓　一五
一六、門生に諭す　一五

一七、職業の選擇　一六
一八、風と露　一七
一九、豐太閤の逸語　一八
二〇、筆の歌　一九
二一、蜀山人の盆燈籠　一九
二二、讀書　二〇
二三、洋學の由來　二一
二四、樺太談判(上)　二二
二五、樺太談判(下)　二三
二六、バクテリヤ　二五
二七、太古の洪水(上)　二六
二八、太古の洪水(下)　二七

卷四

一、紅葉の名所　一
二、碓氷の汽車　二
三、麥藁帽子の傳　二
四、朝の村　三
五、家の紋　四
六、歐米人の氣風　四
七、晩秋　六
八、九重の山水　七
九、瀬戸内海　一〇
一〇、道話一則　一一
一一、鼠の淨土　一二
一二、眞田大助　一三
一三、蘇武　一四
一四、氷の諏訪湖　一五
一五、アルプ山越(上)　一六
一六、アルプ山越(中)　一七
一七、アルプ山越(下)　一八
一八、學藝に志すものの誠　一八
一九、辛抱くらべ　一九
二〇、鬼作左(上)　二〇

二一、鬼作左(下)　二一
二二、水の力　二一
二三、水岩を作る　二二
二四、森林の功用　二三
二五、公子の躾け方を申し遺す　二三
二六、運命(上)　二四
二七、運命(下)　二六

卷五

一、春の曲　一
二、月雪花　二
三、誠　四
四、三種の神器　四
五、人臣の道　五
六、源實朝の歌　六
七、浮島原の對面　七
八、うれしさ　七
九、巨船の沈沒　八
一〇、文字　九
一一、俳句評釋　一〇
一二、十國峠の眺望　一一
一三、阿新殿の事(上)　一二
一四、阿新殿の事(下)　一三
一五、寺門政次郎に答ふ　一三
一六、讀書の選擇　一五
一七、馬琴日記鈔　一六
一八、徳川家康遺訓　一七
一九、佐渡が島　一七
二〇、思ひ出　一九
二一、揚子江溯航　一九
二二、禁庭の野分　二〇
二三、笠置山　二二
二四、近江路　二三
二五、岩倉公の逸事

（上） 二四
二六、岩倉公の逸事（下） 二七
二七、一萬と箱王 二九

巻六

一、朝見式勅語 一
二、奉答文 二
三、韓國併合詔書 三
四、伊藤公を誄ぶ 三
五、秋の歌 五
六、秋の夜 五
七、西郷隆盛に與ふ 六
八、城山の曲 八
九、伊太利の海岸 九
一〇、果物 一〇
一一、鎭守の森 一〇
一二、白河殿の夜討 一二
一三、白峯の陵 一三
一四、我が家の富 一六
一五、練馬の一夜（上） 一六
一六、練馬の一夜（下） 一六
一七、修辭上の轉義 一七
一八、今様と朗詠 一八
一九、俚諺論 二〇
二〇、「ヴェニスの商人」法廷の場（上） 二一
二一、「ヴェニスの商人」法廷の場（中） 二二
二二、「ヴェニスの商人」法廷の場（下） 二三
二三、風雅論 二三

二四、芭蕉と蕪村の句 二五
二五、成敗と是非 二五
二六、如意輪堂 二六
二七、日蓮上人 二七

新撰國語讀本詳解 目次 終

勸學詩

朱熹

少年易レ老學難レ成。一寸光陰不レ可レ輕。

未レ覺池塘春草夢。階前梧葉已秋聲。

新撰國語讀本詳解巻一

一　我が帝國

○概して　おしならして　○中和　ほどよきこと　○梢　木の枝先　○四季　春夏秋冬　○波打際

○新鮮　あたらしい　○八百屋　青物を賣る家　○松蕈　○秀麗　すぐれてうるはしい　○國土　國の土地

○豐饒　五穀などゆたかにみのること　○天惠　天のめぐみ　○淳美　風俗のてあつくうつくしきこと　○慈愛　いつくしみ愛すること

○比類　たぐひ　○愛撫　よく愛しいたはる　○帝室　天皇の御家　○畢竟　つまり

二　國花

○爛漫 花の咲き亂れたるさま　○特有の美景 特別にもとからもつて居る美しき景色　○美しい　○日本

○趣味 日本のおもむき。あぢはひ　○香氣 かをり。匂よき香　○薔薇 しようび ばら　○風情 土地の風俗、氣候、地味

○深山 おくやま。又、山のことにのみいふ　○都市 みやこ。まち　○二十日草 牡丹の異名　○雪と 雪の如く

○光景 ありさま　○花瓣 花びら　○賞翫 ほめもてあそぶ　○愛でる 愛する

○春風四月 春風の吹く四月をいふ

三　美しき自然

○綾ごろも あやを織り出したる美しき着物。櫻のうつくしきを綾衣にみたてていへるなり　○唐錦 唐錦。やまと錦に對していふ。支那より渡來し、又は、韓人の製作に成れる錦

○薄墨ひける 遠き山をいふ。山の遠きものは、薄墨をひける如くなるよりいへるなり　○四方

○横霞 横にたなびく霞　○青天井　○建築 たてもの

四　田舍より

○起居 たちゐ。轉じて様子をいふ　○昨秋 昨年の秋　○水彩畫 洋畫の一種。油畫に對す　○蒲公英

○蓮華草　○土筆　○陽炎 かげろひ、又、いという(絲遊)ともいふ　○雲雀　○逆落し 逆におつること

○囀り 鳥の鳴くをいふ　○消息 たより。音信　○春色 春の景色　○近況 近頃の様子

五　千本松原（上）

○萱葺　○解り　○首級冢碑　○髑髏 されかうべ　○露出 あらはれる　○首級

くび屋

○閑雅 しとやか ○清淨 きよらか ○壯快 さかんにして心よきこと ○巨大 おほきい ○明

○透明 すきとほること ○調和 ほどよくあはすること

六 千本松原（下）

○道端 ○親爺 ○篤實 正直にして親切なること ○生首 ○往復 ゆきき ○損はれ

○偶然 思もよらぬこと ○觀察 心を留めてよくみきはむること

七 太宰府詣

○砂遠白き間 砂の遠く白くつづける間 ○鎭座 神靈のしづまりましますこと ○煙波渺茫 煙の如く見ゆる波

の廣く充ち渡りたるさま ○濛濛と煙る雨 濛々は極めてこまかき雨の降るさま。微雨の降るは、煙のたなびけるが如し ○梅大路云々 梅大路を見て、其の昔菅公の梅を愛せしことを聯想し、更に菅公の此地に流されてうれひに沈みつゝ薨じ給へるを聯想して古をおもへるなり ○晝餉 ひるめし

○丹碧 丹は赤、碧は青。壁又は屋根瓦の色などにいふ ○素樸 質素にして飾りけなきこと ○星霜 年月。星は一年に天を一周し、霜は毎年に降る故に、一年を一星霜といふ ○神さぶ 何となく神神しきこと ○神池 神社の境内に在る池 ○景致 おもむき。風流のおもむきに富めること ○霏霏 雨雪などのはげしくふるさま ○廻廊 わたり廊下 ○捨石 庭のあちこちに飛び飛びおく石

○小祠 小さきほこら ○瀑布 たき ○興 おもしろみ ○糢糊 ぼんやりとして、物の明かに見えぬさま ○天拜山 菅公、太宰府にありし時、此山に登りて天に訴ふる處ありしといふより此の名ありとぞ ○櫨の木 又、ハゼともいふ

○遺澤 古人の殘したる恩澤 ○栽植 うつし植ゑる ○培養 つちかひ養ふこと ○栽培 植ゑそだてる ○卒塔婆 木又は石にて地、水、火、風、空の五層の長きものを作りて佛に供ふるもの ○塚の上 はかの上 ○心を存す 心をとめる

○殊勝(しゆしよう)　けなげ。殊にすぐれてあること

八　櫻井(さくらゐ)の里(さと)

○一旦(たん)　一時。ちよつと　○忠烈(ちうれつ)　すぐれて忠義なること。忠義の極めてあつきこと　○降人(かうじん)　降参人　○家子郎等(いへのこらうとう)　けらい　○石壁(せきへき)　きりぎし　○畏くも(かしこ)　おそれおほくも　○菊作の刀(きくづくりのかたな)　後鳥羽皇の御みづから鍛冶して作らせ給ひたる刀。銘に一輪の菊花をうちあり　○仰言(おほせごと)　○蔑(ないがしろ)　○詫言(わびごと)　○銚子(てうし)　○幽かに(かす)　○名のる(な)　みづから、我が名を告げいふ

九　競馬(けいば)

○是非(ぜひ)　○參拜者(さんぱいしや)　さんけいにん　○殘雪(ざんせつ)　馬の名。以下皆同じ　○宮野(みやの)　野は城の誤字　○鯨波(げいは)　○羣雀(ぐんじやく)　○金石(きんせき)　○起點(きてん)　はじまりの場所　○馬匹(ばひつ)　うま　○逸物(いつぶつ)　すぐれもの　○駿足(しゆんそく)　足はやき、すぐれたる馬　○副馬(ふくば)　そへ馬　○三春(みはる)　東北地方にある良馬の産地にして最も名高く、三春駒の名高し　○身幹(しんかん)　身のたけ　○紅鹿毛(べにかげ)　鹿毛とは鹿の毛色をいふ。茶褐なる馬の毛の色。紅鹿毛とは紅色をふくみたる鹿毛なり　○特徴(とくちよう)　殊にすぐれたること　○完美(くわんび)　完く備はりて美しきこと　○新月形の星額(しんげつがたのほしびたひ)　新月は新に見初めし月影のこと。額に白毛ありて新月の形を成すを云ふ。星とは紅鹿毛の中に白毛を點ずるをいふ　○牙齒(がし)　きば　○障害物(しやうがいぶつ)　○祕訣(ひけつ)　おくの手　○癖馬(くせば)　くせのある馬　○寧ろ(むし)　○鬣(たてがみ)　○前肢(ぜんし)　前足　○空を叩き(くう　たた)　○後脚(あとあし)　○正駐立の姿勢(せいちうりつのしせい)　兵語。正直にとゞまり立ちたる姿勢　○競馬係(けいばがかり)　○雁行(がんかう)　はすかひにならび行くこと　○拍車(はくしや)　靴の後方につけたる歯車にて馬を拍ち勵ますもの　○逞しく(たくま)　○歩程(ほてい)　あゆみのほどあひ　○喝采(かつさい)　ほめごゑ　○態と(わざ)　○拳(けん)　こぶし　○騎座(きざ)

馬に乗れる座　○亂打　めつたうち　○電光石火　電氣の光と、燧石の火とにて、其の閃くや忽ち消滅して通過すること極めてはやきをいふ

○驀進　まつしぐらにすゝむ　○快速　すばやきこと　○一陣の疾風　一としきりさつと吹き來る疾き風　○駐止　とゞまること　○手練　てなみ　○祕術　おくの手

一〇　日本海の海戰（上）

○曉天　よあけのそら　○哨艦　見張りの軍艦　○假裝巡洋艦　假に巡洋艦に仕立てたる軍艦　○東水道　九州と對馬との間の水道　○行動　やうす　○偵知　さぐり知る　○精銳　すぐれてするどきもの　○集中　あつめる　○踴躍　をどり立つ　○針路　舟の進行する路　○旗艦　司令長官の乗居る軍艦　○接觸を保ち　より近づいて其行動を見失はぬこと　○時時刻刻　時刻を追て次第に　○動靜　やうす　○進航　船をすゝむること

○濛氣　もや　○黑白　あやめ　○報告　しらせ　○海里　一海里は我國の約十七町に當る　○戰鬪配列に就く　戰爭するため順序よくならぶこと　○巡視　めぐり見る　○鼾の聲　○膽勇　膽力と勇氣

○嘆稱　感心したたへる　○右翼列　中軍の右の方にある列　○壯觀　さかんなるながめ　○戰機已に熟しぬ　戰爭の時機が十分になつた　○檣頭　ほばしらの頂き　○颯と翻る　○號音　ひゞき　○興廢　興ると亡びると　○奮勵努力　ふるひつとめる　○ネルソン　英國の海軍司令長官　○トラファルガルの海戰　トラファルガルはジブラルタル海峽の入口に在り。ネルソン、佛蘭西艦隊と激戰して大捷を得、名譽の戰死をなせり　○要求す　切に求める　○傳誦　いひ傳へる

一一　日本海の海戰（中）

○直率 自分から率ゐること
○吉例 よきためし
○單縱陣 一本筋にたてに並ぶ陣形
○大鵬の雲に翰つて おほとりの雲に飛びかけるにて、勢の盛んなるにたとふ
○巨鯤 大魚
○驀地に いつさんに
○遶りて
○應砲 敵の砲に應じて砲を撃つこと
○漲る いつぱいになる
○四顧冥冥 四方のくらきさま
○物凄し
○言ふばかりなし いふことが出來ぬ程である
○優越 こえまさる
○百發百中 發して中らずといふことなきこと
○火災を起す 火事を起す
○應戰 敵の攻撃に應じて戰ふこと
○武者ぶり 武人としてのふるまひ
○長湫
○回頭 先を向ける
○猛射 はげしく砲をうつこと
○血路 圍みたる敵をきり開きて逃ぐる一方の道
○白晝 ひるひなか
○壯烈 勇しく盛んにして猛きこと
○決行 きめつけて行ふ
○夕陽 日
○豫て 前以て
○朝來 朝から
○烈風激浪 はげしき風はげしき浪
○千歳一遇 千年に一度といふ程稀なることに出逢ふこと
○爭でか
○擬議 あやぶみためらふ
○蝟集 蝟はハリネズミなり。蝟の毛の如く物のあつまりあふこと
○肉薄 近く敵に迫ること
○應接 あしらひ
○俯角 下に向くる角度
○照準 ねらひ。めあて

二 日本海の海戰（下）

○霽れ
○鷗
○豫定 前以て定むる
○黎明 夜明け
○奔る
○敗餘 敗北したる後
○抵抗 はりあふ
○砲火を開く 砲をうち出す
○降意 降參の心
○快速力 最も早き速力
○勸告 すすめる
○漣・陽炎
○極力 力のあらん限りをつくすこと
○信號 あひづ
○臨檢 其の場所に臨みて檢査すること
○豈料らんや
○幕僚 司令官等に直接に屬して、參謀事務に從事する將校
○重傷 おもで
○懇請 ねんごろなるねがひ
○收容 一定の場所にとりをさむること
○横暴 我儘にして亂暴
○捕虜 とりこ
○捕獲 とる
○抑留 おさへとめる
○武裝を解除す 戰鬪の仕度をとり除く
○無

慮（りよ）　おほよそ

○注す（ちう）　かき上げる

○支障（ししやう）　さしつかへること

○大捷（たいせう）　大勝に同じ

○鏖戰（あうせん）　みなごろしにする戰。全力をつくして決戰すること

○有史以來（いうしいらい）　歴史ありてよりこの方

○大差（たいさ）　おほちがひ

○捷書（せうしよ）　かちたるしらせ

○宸聽（しんそう）　天皇の御耳

○忠烈（ちうれつ）　忠義心の極めてあつきこと

○祖宗（そそう）　皇祖皇宗の約。皇祖は天照大神を申し、皇宗は天皇御代々の御先祖を申す

○懌ぶ（よろこ）

○豫期（よき）　みこみ

○成果（せいくわ）　成就したるよき結果

○御稜威（みいつ）　尊嚴なる御威光

○普及（ふきふ）　あまねく行きわたること

○歴代（れきだい）　代々

○加護（かご）　神佛のかげに居りて力を添へまもること

○人爲（じんゐ）　人の力

○平和克復（へいわこくふく）　戰爭の止みて、復び平和の世となること

○富豪（ふがう）　かねもち

○未曾有（みぞう）　未だ曾て有らざりしこと

○經營（けいえい）　をさめいとなむこと

○渡來（とらい）　外國より渡り來ること

○夫人（ふじん）　身分ある人の妻をいふ

○稱揚（しようやう）　たたへほめる

○自重（じちよう）　自分から自分を重んずること

一三　心（こゝろ）のゆがみ

○不承不承（ふしようぶしよう）　不承知ながら止むを得ず。いや／＼ながら

○硯蓋（すゞりぶた）　口取肴など盛るひろぶた

○蒲鉾（かまぼこ）

○飯蛸（いひだこ）　たこ科に屬する海産動物

○座禪（ざぜん）　靜座すること。其法は、座して脊梁骨を起立し體軀を眞直にし、右手を左蹠の上に、左手を右蹠の上に安置し、拇指と拇指とを相接せしめ、目を半眼に開きて行ふ

○靨（ゑくぼ）

○笑顔（ゑがほ）

○本腹（ほんぷく）　もと通りになほること

○配劑（はいざい）　調合藥

○會得（ゑとく）　心に合點すること

○身贔屓（みびいき）

○兩替屋（りやうがへや）　金をとりかへるところ

○肝要（かんえう）　肝は肝臟、要は腰。大切なるをいふ

○小者（こもの）　めしつかひ

○生涯（しやうがい）　一生

○半季（はんき）　半年

○素人（しろうと）　其の道にたづさはらぬ人

○見損ぜぬ（みそん）　みそこなはぬ

一四　動物（どうぶつ）の保護色（はごしよく）（上）

○等しく ○蚜蟲 ○嫩芽 ○單に ただ ○斑紋 ぶち ○雨蛙 一名エダガハヅ

○蝗 いなむしばつた、いなごの類 ○駱駝 ○羚羊 反芻偶蹄類に屬す ○鳥類にても 駝鳥は其の例なり ○蟲類にても 沙漠中に棲む蟲類は明かならず ○紀行 旅行日記 ○北極地方 眞の北極は未だ探検せられず、故に北極に近き地方をいふなり ○白鼬 ○鰈 ○比目魚 ○背面 背のおもて ○水族館 水産動物を活かしおきて衆人に觀する所 ○海月 ○鰕 ○初心 うぶ。其の心得なきもの ○類似 似る ○識別 みわけ

○尺蠖 ○南洋諸島 南太平洋の中央部なるフイリツピン、ボルネオ、スマトラ、木曜等の諸島をいふ ○觸角 昆蟲の觸官にして通常復眼の上に一對あり

一五 動物の保護色（下）

○彩色 いろどり ○本能 天職の性能 ○疲勞 つかれ ○誤認 みそこなひ ○土瓶云々 エダシヤクトリの一名を土瓶割といふは、この失敗より名づけられたるものなりといふ意 ○塒 ○徐徐 そろそろ ○酷似 よく似ること

○周邊 あたり。まはり ○縱令 ○蟻と寸分違はぬ形 通常、蟻蜘蛛といふ ○六本の足 蟻のみならず、昆蟲みな斯くの如し ○土人 其の土地に住む人

一六 征衣上途

○征衣 出征の軍服 ○上途 途に上る。出發すること ○動員令 在郷軍人を召集して、戰時の編制をなす命令 ○生涯 一生 ○整列 正しくならぶ ○熱望 熱心に希望すること ○本懐 本望 ○暗涙 しのぶなみだ

○戀戀 戀ひしたひて思ひきること能はざるさま ○今生 此世 ○悲愁 かなしみうれひ ○紅涙 あつき涙 ○襟

○潤す（うるほす）　○整頓（せいとん）　かたづけること　○まどろむ　うと〱とねむる　○すは　驚くさま　○宣戰（せんせん）の大詔（たいせう）　外國に對して交戰する由をのべ給ふ詔　○大君（おほぎみ）　天皇陛下　○未練（みれん）　心のこり　○家門（かもん）　一家　○悲壯（ひさう）　歎き悲みて意氣の奮ひ起ること　○莊重（さうちよう）　いかめしくおもおもしきこと　○吹奏（すゐそう）　ふきならすこと　○沈痛（ちんつう）　言ふこと、爲すことの深く急所に當りて、痛切をおぼゆること　○故國（ここく）　古郷　○朗讀（らうどく）　聲高く讀みあげること　○血湧き肉躍る（ちわきにくをどる）　勇みたつさま　○熱心誠意（ねつしんせいい）　まごころ　○ほどばしり出で（いで）　勢よく突き出ること　○喇叭（らつぱ）　○とどろかす　ひびかせる　○感慨（かんがい）　感じてなげく　○敵壘（てきるゐ）　敵のとりで　○背後（はいご）　うしろ　○喊聲（かんせい）　ときのこゑ　○巨彈（きよだん）　大なる彈丸　○かすめる　かする　○嚴寒（げんかん）　きびしき寒さ　○露營（ろえい）　野宿

一七　座右の銘（ざいうのめい）

○銘（めい）　いましめ　○いとほしむ　愛す　○老（らう）　老人　○無能（むのう）　はたらきなきもの　○忽（ゆるかせ）　おろそか　○辭（じ）は中（あた）るべくして　平生の言語は、空なことは言はず、道理にかなふことをいふ　○厚（あつ）からんこと　情厚きこと　○法（はふ）　のり。のつとりてすべき道　○怒（いかり）に難（なん）を思（おも）へ　怒らんとするときに怒れば、後に難儀の來ることを思へ　○樵夫（せうふ）　きこり　○他山（たさん）の石（いし）は玉（たま）を磨（みが）くべし　石を小人に比し、玉を君子に比す。石にても立派な玉をこすりて光を出すと同じく、小人の言も時に君子の一助となることあり　○憂（うれ）ふる　心配する　○忠言（ちうげん）　人をいさめるよきことば

一八　一燈錢（いつとうせん）

○瑣細（ささい）　○儲（まう）け　○拂底（ふつてい）　底を拂ひてもなきこと。殘りなきこと　○差閊（さしつか）ふ　○飢渇（きかつ）　飲食の缺乏　○至誠（しせい）　まごころ　○膏（あぶら）　○長者（ちやうじや）　かねもち　○同斷（どうだん）　相同じきこと

一九 吾輩（わがはい）は猫（ねこ）である

○不人望（ふじんばう） 人望なきこと ○珍重（ちんちよう） もてはやされること ○經驗（けいけん） 實際に行ひたるためし ○物指（ものさし） ○斷言（だんげん） いひきり ○同衾（どうきん） 一つのふすまの中にねること ○言語同斷（ごんごだうだん） 言葉にてのべいふことの出來ぬをいふ ○抛り出し（はふりだし） ○迫害（はくがい） くるしめなやますこと ○勦滅（さうめつ） たやし亡ぼす ○憤慨（ふんがい） いきどほりなげく ○鯔の臍（ぼらのへそ） ○規約（きやく） きめ。規則 ○掠奪（りやくだつ） かすめうばふ ○樂天（らくてん） 自己の境遇に安んずること

二〇 四季（しき）の月（つき）

○一刻千金（こくきん） 少しの時間にてもたふとき意 ○空（そら）さりげなき 其の様子もなき ○金波萬里（きんぱばんり）の光（ひかり） 月光のひろき海の波にうつること。金波は月光のうつりて、黃金色をなせるをいふ ○宵（よひ）ながら 宵の中でありながら ○月（つき）やどる
らん 月を宿をかりてとゞまるならん ○夜（よ）すがら 一晚中 ○羽（はね）うちかはし 互に羽をならぶること ○冬木立（ふゆこだち） 冬のさびしげなる木立。森 ○寒月（かんげつ） 冬の月

二一 我（わ）が故鄕（こきやう）

○もつさう 物相、又盛相とかく。飯を盛りて人別に供する器。其土地の中びくなるを、其底にたとへていへるなり ○搖籃（えうらん） こどもをねかすゆりかご。生れたる處の意にいふ ○雜木山（ざふきやま） さまざまの雜木に生えたる山 ○孤立（こりつ） ひとりだつ ○天邊（てつぺん） 頂上。高き處 ○氣象臺（きしやうだい） 天のもやうをみわける臺 ○一撮（ひとつか）み ○鮨米（すしまい） 鮨に用ふる米。第一等のものを用ふ ○都人士（とじんし） みやこ人。都に住める人 ○早乙女（さをとめ） こむすめ ○畦（あぜ） ○炎天（えんてん） 日の照りわたる時 ○滿天（まんてん）の浸（し）み 天一ぱいにしみわたり ○太郎作（たらうさく） 百姓の名。農家の悴といふほどの意 ○簾越（すだれご）し 簾をへだてて物を見るさま ○萎（な）えしをれ

て　しなびよわつて　○一瞬の間（しゆんのあひだ）　一まばたきの間。極めて僅かの間。　○鰌（どぢやう）　○時雨（しぐれ）　秋の終りより冬の初めにかけてふる雨　○晩く（おそく）　○籾ずり（もみずり）　○米俵（こめだはら）　○納屋（なや）　ものおき小屋　○舌鼓（したづつみ）　○二つの川（かは）　前に見ゆる大川小川の二流なり　○潺潺淙淙（せんせんそうそう）　谷川などの音をたてて流るゝさま　○道傍（みちばた）　○小溝（こみぞ）　○一入（ひとしほ）　ひときは

二二　鎌倉の夏（かまくらのなつ）

○明暮（あけくれ）　○材木座（ざいもくざ）　鎌倉町の大字に亂棧（ランバシ）といふ所あり。この亂橋の南なる海濱を材木座といふ。由比ケ濱の東南端に當る　○光明寺（くわうみやうじ）　材木座の東南方にあり。良忠上人の開基なり。　○鎌倉の海（かまくらのうみ）　相模灘　○靈山が崎（りやうざんがさき）　稲村ケ崎の北東に連なる　○長谷（はせ）　鎌倉町の大字。坂之下より北、民戸頗る多し。寺名は、新長谷寺。觀音堂の建立に因みて命ぜられたるものなり　○由比（ゆひ）　由井にも作る。常に由比ケ濱と稱せらる。通常稲瀬川の東なる砂丘より、滑川の西なる砂河をいふ　○渚（なぎさ）　水うちぎは　○日月貝（じつげつがひ）　左右の殻同形にして一半は紅色、一半は白色なれば此名あり　○すまふ　爭ふに同じ　○和ぎたる（なぎたる）　風止みて波穏やかなること　○騰り（のぼり）　○物の具（もののぐ）　道具　○大擧（たいきよ）　多人數こぞりて向ふこと　○俎（まないた）　○片帆（かたほ）　帆を一方に傾けて、風をふくまするること　○淡く（あはく）　うすく　○黃金の盃（こがねのさかづき）　月をたとへていふ　○鏤む（ちりばむ）　きざみつける　○あざやかに　はつきり

二三　夕立（ゆふだち）

○風鈴（ふうりん）　○あわただしげに　あわてたるさま　○蟬（せみ）　○蜘蛛（くも）　○激しく閃き（はげしくひらめき）　○盥（たらひ）　○かしましく　やかましく

二四 蟻

○修繕 とりつくろひ ○工夫 仕事をする人夫 ○土くれ 土のかたまり ○油汗 ○ぬき足、さし足 音を立てぬやうに、足を上げて歩み、足をつまだてゝ地を履むこと ○適宜 ほどよきこと ○揉んで ○につくい奴め ○失敗 しくじり ○懲りて ○警戒 注意して氣をつけること ○窺ふ ○武器 いくさ道具 ○滿身 からだ一ぱい ○彈く ○慥かに ○命中 きつかり當る ○相撲 ○したたか ひどく ○痛手 重き負傷 ○死力 必死の力 ○最期 死にぎは ○噂 ○飯粒と麩 ○分配 はけくばる ○精進 肉類ならぬ食物 ○開鑿 ほりわり ○熱中 一心になること ○內部の連絡 內がはのつながり ○直徑 さしわたし ○矢庭 たちどころ ○這入つて ○先登 一番さきがけ ○祝賀會 いはひの會 ○活潑 ○一大奇觀 一つの大なる珍しきみもの ○草むら 草の生ひ茂れる所 ○胡瓜

二五 土蜘蛛

○療養 病氣の保養 ○典藥頭 典藥寮(古、宮內省の被官にして宮中の醫藥に關することを掌りしところ)の長官 ○侍臣 そばづきの家來 ○容態 病氣の樣子 ○かこち 思ひわびてなげく ○最期 死 ○短慮 氣みじか ○快かり ○朦朧 ぼんやり ○我がせこ 我兄子。女より男を親しみて呼ぶ語 ○ささがに 蜘蛛 ○衣通姬 ○謎 ○五體 頭と兩手と兩足。全身の稱 ○枕許 ○宿直 ○郎黨 家來 ○威德 おごそかにして德高きこと ○奇瑞 めでたきしるし ○妖怪 ばけもの ○天魔 人を惱亂して諸の障碍をなし、智慧善根を喪失せしむるもの ○下知 命令。さしづ ○精 かみ ○兵 ○皇德 天皇の御德 ○晃晃 かがやく貌

○斬斃す ○凱歌 かちどき

二六 大海原

○夜もすがら 夜ぢう ○いづこに打たぬ浪を見ん どこに浪のうたぬを見やう ○とこしへ ながくかはらぬこと ○瑠璃の色 紺色をいふ。瑠璃は七寶の一にして紺色なるものなり ○長閑けき様 空晴れて、天氣のおだやかなるさま ○風なぎはてし 風のおだやかにしづまつてしまつた ○あらぶる心もなぎぬべし あらあらしき心もやはらぐであらう ○朝ぼらけ あけがた ○蓬萊山 支那の傳説に、海中に在りて仙人の住むといふ神山 ○凄じさ ものすごさ ○はた 又、におなじ ○二季 二度 ○はやて 疾風。急に吹きおこるはげしき風 ○木の葉と漂ふ 木の葉の如くにたゞよふ ○大高潮のさかまけば おほなみが水底から巻きあがれば

○興亡 盛んになると衰へると ○陸 ○開闢 天地の開けはじめ ○轟

二七 水兵とその母

○藥劑室 くすりを取扱ふ室 ○愁然 うれふる貌 ○佇みて ○女女しき 柔弱にして女らしき ○未練者 心のこりてをゝしからぬもの ○軍籍 軍隊の籍 ○千載一遇 千年に一度といふ程稀なることに出あふこと ○本懷 かねてのこころ。本望 ○軍 ○御子息 人の子の敬稱 ○鎭守の神 其の土地を鎭め守る神 ○天晴 ○肺腑 肺臟。心のおくそこにいふ ○同胞 同一國民 ○報效 國に報いて效をいたすこと ○壯烈 志氣の雄大にして、行爲の中正なること ○由緒 いはれ ○恕せよ ゆるせよ ○母堂 母の敬稱 ○感激 感じて意氣のふるひ起ること ○慰撫 なぐさめること ○武夫 軍人 ○具に ことこまかに ○唯唯 ハイハイとうなづく貌

○欣然 よろこぶ貌

二八 國民の義務

一 兵役

○布きて あまねく及ぼして ○防衞 ふせぎまもり ○任ずる あたる ○徵集 めし集める ○壯丁
二十歳以上の血氣さかんなる男子 ○養成 やしなひそだてる ○特設の機關 目的を達するために特別に設けたるもの ○期
間 きげんのあひだ ○武門 武士の家すぢ。武家 ○階級 等級。くらゐ ○敕諭 天皇陛下の親しくさとしつげたまふこと
○大元帥 國家の兵權の全體を統ぶる君主 ○股肱 股はモモ、肱はヒヂなり。ももとひじとは、身體中の要用の部分なるを以て、輔佐の意とす。たよ
り ○上天 天 ○應じ こたへ ○祖宗 皇祖皇宗 ○稜威 みいつ。天子の御威光 ○我武、

維揚 我國の强きことが名高くなる ○偕に ○服膺 かたく胸につけてよくまもる ○忠節 ちゆうぎのみさを
○尙ぶ 重んずる ○信義 信をまもり、義を行ふこと。いつはりあざむかざること ○忽に おろそかに ○誠心
まごころ ○嘉言 よきことば ○裝飾 かざり ○人倫の常經 人の行ふべきつねのみち ○精鋭
すぐれてするどい ○忠良 忠義にして善良なること

二 納税

○出づるを量りて入るを制す つかひはらひを見積つて取りたてをほどよくする ○財源 財貨の本源。かねので場所
○自治體 府、縣、郡、市、町、村の如き、團體の公共事務を自身にて處理すること ○分擔 わけてひきうける ○種目 種類の項
目。種類の名目 ○國庫 國家の收入支出をつかさどるもと ○地租 地價によつてとりたつる租税 ○所得税 一ケ年の所得
額を標準としたる一種の直接國税 ○海關税 税關にて、海路による輸出入品に課する税 ○消費者 つかひて ○地方官

廳(ちやう) 行政區劃の一地方内の行政事務を司る役所、即ち府縣廳、郡役所等　○賦課(ふくわ) わりつけること　○休戚(きうせき) 休は喜、戚は悲の意。喜憂安危

○徵收(ちようしう) とりたてること　○苛税(かぜい) むごき税　○負擔(ふたん) ひきうけること　○產業(さんげふ) 生産の事業。なりはひ

○廢頽(はいたい) すたれくづれる　○協贊(けふさん) 帝國議會が、法律案又は豫算案につき議決すること

二九　飯待つ間(めしまつあひだ)

○午砲(どん) 正午の號砲　○野分(のわき) 秋の末より冬の初めにかけて吹く暴風　○雁來紅(がんらいこう) 葉雞頭に同じ　○大毛蓼(おほけたで)

○化ける(ばける)　○鶉(うづら)　○丑寅の方(うしとらのはう) 北と東との間の方　○芥溜箱(ごみためばこ)

三〇　冒險小僮(ばうけんせうどう)

○冒險(ばうけん) 危險をおかしてなすこと　○小僮(せうどう) 幼きしもべ　○拳匪の亂(けんぴのらん)　○宣教師(せんけうし) 耶蘇教を布教する人

○逐出され(おひだされ)　○包圍攻擊(はうゐこうげき) 四方よりかこみて攻めうつこと　○危急(ききふ) 危險の切迫せること　○應援(おうえん) 加勢

○密使(みつし) ないしやうのつかひ　○ひきあけがた 夜のあけんとする時　○必定(ひつぢやう) きつと　○襤褸(らんる) ぼろ

○桐油紙(とうゆがみ)　○情(なさけ)　○飢渴(きかつ) うゑと、のどのかわきと　○呻吟き(うめき)　○慳貪(けんどん) じやけん　○銃丸(じうぐわん) 鐵砲のたま

○領事(りやうじ) 條約國に駐在して、專ら自國民の通商貿易を保護奬勵し、又其の地に在る自國民の保護取締をなす官　○攀登る(よぢのぼる) 手足にて登る

○歡待(くわんたい) よろこびもてなす　○驕る(おごる) 心のたかぶる　○忠實(ちうじつ) まめやか　○事へ(つかへ)　○鳥居强右衞門(とりゐすねゑもん)

立志

なせばなるなさねばならず成るわざを
ならずにすつる人のはかなさ

平田篤胤

新撰國語讀本詳解 巻一 終

新撰國語讀本詳解 巻二

一 比叡山上（ひえいさんじやう）の眺望（てうばう）

○眺望（てうばう） ながめ　○往年（わうねん） 過ぎし年　○夜氣（やき） 夜のけはひ　○まどか 圓滿　○拂曉（ふつげう） 夜のあけがた

○夜來（やらい） 夜になりてより　○密雲（みつうん） 重なれる雲　○淡（あは）く うすく　○天空（てんくう） そら　○東谿（とうけい） 東方の谷

○老杉（らうさん）　○蕭颯（せうさつ） 物さびしき貌。ものすごき貌　○罩（こ）め　○彼方（かなた）　○村落（そんらく） むらさと　○田圃（でんぽ） 田畑

○乍（たちま）ち　○刻一刻（こくいつこく） 時刻を追ひて。一刻ごとに　○藏（をさ）むる　○旭光（きよくくわう） 朝日の光　○輝輝（きき） かゞやく貌

○了（をは）れば　○壯觀（さうくわん） さかんなるながめ　○朝餐（てうさん） 朝めし　○湖光（こくわう） 湖水のけしき　○爽涼（さうりやう） さはやかにすゞし

○指顧（しこ） 前面に在る物を指しながらふりむくこと　○一巨木（きよぼく） 一つの大木　○矮小（わいせう） 丈ひくく小さい

○灌木（くわんぼく） 大きく成育する樹 ○峨峨（がが） かど／＼しく聳ゆる貌 ○峻阪（しゆんぱん） けはしき阪 ○攀（よ）ぢて 手足にてのぼること

○下瞰（かかん） みおろす ○隈隈（くまぐま） ○指點（してん） 指さし示す ○眸（め） ○勝（しよう） けしきよきこと ○江（かう）・城（じやう）二州（しう） 近江山城二國

○超然（てうぜん） ぬき出づる貌 ○一眸（ばう） ひと目 ○洛中（らくちう） 京都の中。洛は支那の古の都洛陽の洛の字を用ひて都の意とせるなり

○蜿蜒（ゑんえん） うねる貌 ○峻峯（しゆんぽう） けはしき山 ○重疊（ちようでふ） かさなりあふこと ○陵夷（りようい） 陵は丘、夷は平地。丘陵の次第にひく〵なりて、平地と等しくなること

○湖畔（こはん） 湖水のほとり ○淡靄（たんあい） うすもや ○旭光（きよくくわう） 朝日 ○宛然（ゑんぜん） さも似たる貌

○恍（くわう）として うつとりとして ○長嘯（ちやうせう） 長くうそぶく ○脚底（きやくてい） あしもと

二 朝（あさ）と夕（ゆふ）

○えも言（い）はず いふに言はれず ○乙女（をとめ） 年わかき娘 ○さばかり それほど ○風情（ふぜい） おもむき

○夕餉（ゆふげ） 夕めし ○床几（しやうぎ） ○闇黒（あんこく） くらやみ ○圓（まど）か まん丸 ○趣（おもむき） ○浴後（よくご） ゆあみしたる後

○團扇（うちは） ○徐（おもむろ）に しづかに ○ほの見（み）え ほのかに見え

三 社會（しやくわい）の組織（そしき）

○組織（そしき） 組みたて。なりたち ○圖（はか）る ○未開（みかい）の地（ち） 野蠻國。未だ文明の開けぬ國 ○稠密（ちうみつ） しげくこみあふこと

○樵夫（せうふ） きこり ○終日（しうじつ） 一日中。朝から晩まで ○斧（をの） ○鑛山（くわうざん） 金山。鑛石を掘り出す山 ○一心（しん）不亂（ふらん） 他念なきこと

○機織（はたおり） ○丁稚（でつち） ○冗談（ぜうだん） ○浴衣（ゆかた） 湯帷子（ユカタビラ）の略。浴したる後着る單衣。今はヒトヘモノのことにいふ

○紡績（ばうせき） 絲をうみつむぐこと。こゝは紡績機械のことを云ふ ○績（つむ）ぎ ○水夫（すゐふ） かこ。船頭 ○染（せん）料（れう） そめる材料

○厄介（やくかい） せわ ○勞力（らうりよく） ほねをり

四 世界(せかい)は共通(きようつう)なり

○輸入(ゆにふ) シュニフと訓ずるを正とす。外國より物品を内國に送り込むこと ○精良(せいりやう) 物の特にすぐれてよきこと ○原料(げんれう) 物品などを作り出すもとの材料

○樅(もみ) ○木屑(もくせう) 木のはしくれ ○骨粉(こつぷん) 鳥獸等の骨をくだきたるもの。燐酸肥料 ○鳥糞(てうふん) 信天翁(アハウドリ)其の他諸鳥の糞。燐酸肥料として貴重す

○從來(じうらい) 今まで。これまで ○南洋(なんやう) 南太平洋の中央部なるフイリツピン群島等南洋諸島一帶の海面

○訛り(なまり) ○精巧(せいこう) 手わざのこま〳〵しく上手なるをいふ ○麥稈眞田(むぎわらさなだ) 麥稈を組み合せて紐の如く造りたるもの ○適例(てきれい) あてはまりたる例

○生産物(せいさんぶつ) なりはひの産物 ○壓倒(あつたう) おしたふされること。強者のために弱者のおさへつけられ、けたふさるゝこと

○萬國比鄰(ばんこくひりん)の如(ごと)く 萬國の近く相接して、隣近所の如しとの意 ○苟(いやしく)も かりそめにも ○活眼(くわつがん) いき〳〵したる眼

五 鷹山公(ようざんこう)と平洲(へいしう)

○賓師(ひんし) 客分の師匠 ○尊大(そんだい)な風習(ふうしふ) おほふうにて高慢なるならはし ○儒官(じゆくわん) 儒學をもつて、官に仕ふるもの

○退隱(たいいん) 役をのがれ隱居すること ○朝暮(てうぼ) あけくれ ○賜暇(しか) 休暇をゆるさるゝこと ○快諾(くわいだく) 心よく承知すること

○滯留(たいりう) とどまり居ること ○禮遇(れいぐう) 禮儀あつきもてなし ○態度(たいど) 其物事に對する擧動 ○郊迎(かうげい) 町はづれまで出でて迎ふること

○沙汰(さた) うはさ。ひやうばん ○儀衞(ぎゑい) 儀式をおごそかにする爲めに參列せしむる護衞の兵 ○轎(けう) かご ○雲從(うんじう) 雲の如くに多く從へること

○俯伏(ふふく) うつむくこと ○中心(ちうしん) まんなか ○愚情(ぐじやう) 拙者に同じ。己れをいやしめていふ語 ○辭讓(じじやう) 辭して人にゆづること

○足跗(そくふ) 足の甲 ○安泰(あんたい) やすらかなること ○聯歩(れんぽ) ならびて行くこと ○比肩(ひけん) 肩をならぶること

○對座(たいざ) 向ひあつてすはること ○聖經賢傳(せいけいけんでん) 聖人の言語をしるした書物、賢人の著書 ○醇粹(じゆんすゐ) もつぱらなること

○敦厚(とんこう) 人情あつきこと。正直にして親切なること ○溫情(をんじやう) あたゝかき情愛 ○道義(だうぎ) 道德上。人間の行ふべ

き義理

○活現(くわつげん) いかして實際に行ふこと

○龜鑑(きかん) 手本

六 姉弟(おとどひ)

○女郎花(をみなへし)

○桔梗(ききやう)、苅萱(かるかや)

○父(ちゝ)のみの 父に冠らする枕詞

○比べ(くら)

○母(はゝ)そばの 母に冠らする枕詞

○書(ふみ)

七 大海(おほうみ)の日出(ひので)

○憾(うご)かす

○濤聲(たうせい) なみのこゑ。濤は、大なみ

○早曉(さうげう) あけがた

○水平線(すゐへいせん) 静止せる水の平面に平行する直線

○燻(くすぶ)り

○プルシアンブルー色(いろ) 紺青色

○一痕(こん) 一つ

○弦月(げんげつ) ゆみはり月

○黄(こ)金(がね)

○挂(か)く

○左手(ゆんで) 弓手。弓を持つ方の手なればいふ

○轉廻燈(くわんてんとう) まはりどうろう

○曉風(げうふう) 夜あけの風

○冷冷(れいれい) ひやひや

○蒼白(あをじろ)き

○白銀(しろがね)

○淼淼(べうべう) 水のひろびろとしたる貌

○睫(まつげ)

○曙光(しよくわう) 明け方の光

○圏波(けんぱ) 丸く立つ波

○覺(おぼ)しき おもはれる

○金色(こんじき)

○忽然(こつぜん) たちまち

○猩紅(しやうこう) まつかなること

○擎(さゝ)ぐる

○紅點(こうてん) べに色の點

○金蹄(きんてい) 金色したるひづめ

○一搖(えう) ひとゆらぎ

○名(な)殘(ごり)

○萬斛(ばんこく) 一斛は十斗。多量なるにいふ

○一瞬(しゆん) ひとまばたき

○忽焉(こつえん) たちまち

八 俵藤太秀郷(たはらとうだひでさと)

○藤原房前(ふぢはらふさゝき)

○百官(ひやくくわん) もろもろのつかさ

○萬(よろづ)のこと すべてのこと

○兩(ふた)つ

○牙(きば)、刃(やいば)の如(ごと)く

○火焰(くわえん) ほのほ

○狀(じやう) 有様

○訪來(とひきた)り

○寇(あだ)

○諾(うべな)ひ 承知し

○迅(はや)き

○珠玉(しゆぎよく) たま　○喚入れ(よびいれ)　○珍味(ちんみ) 珍しき味の食物　○饗す(きやうす) 馳走する　○電光閃く(でんくわうひらめく) 稻光りがひらめく　○松明(たいまつ)　○蜈蚣(むかで)　○鏃(やじり)　○眉間(みけん)

九　金が崎(かながさき)

○瓜生判官保(うりふはうぐわんたもつ)　○杣山(そまやま)　○大中黒の旗(おほなかぐろのはた) 大中黒は紋どころの名にて、中黒の中央の線の太きものをいふ。中黒とは、丸の中央に、横に太き一線を引きたるもの。新田氏の定紋　○後攻(ごぜめ) しんがり　○激戰して(げきせんして) はげしく戰ひて　○討死(うちじに)　○矢(や)猛に(たけに) いやましに進みて　○俎上(そじやう) まな板の上　○餓死(がし) うゑじに　○いらだちて あせりて　○斷食(だんじき)　○大手(おほて) 城の表門　○搦手(からめて) 城の裏門　○木戶(きど) 城の門　○春宮(とうぐう) 皇太子。恒良親王　○氣比(けひ)大宮司(だいぐうじ)　○跪き(ひざまづき)　○暴戾(ばうれい) 殘酷にして道理にもとること　○主上(しゆじやう) 天皇　○還幸(くわんかう) 主上の行幸先よりかへり給ふこと。

○元首(げんしゆ) 萬民のかしら。君主　○股肱(ここう) 股はもゝ、肱はひぢ。たのみとする意に用ふ　○白刃(はくじん) やいば　○黃泉の下(くわうせんのもと) よみぢ　○蕪木の浦(かぶきのうら)　○浦人(うらびと) 浦のほとりに住む人

一〇　四羽の小鳥(しはのことり)

○留學(りうがく) 他國に在留して學問すること　○儉素(けんそ) 儉約質素　○晚餐(ばんさん) ゆふめし　○一陶(たう) 一つのやきもの　○濁醪(どぶろく) もろみざけ　○百舌(もず)　○犧牲(ぎせい) 或る目的のために投出して用ふる物事　○綴絲(つゞりいと)　○萬葉集(まんにようしふ) 二十卷。我國最古の歌集　○舖(みせ)　○源氏物語(げんじものがたり) 五十四帖。紫式部の著したる小說　○遺憾(ゐかん) うらみ(憾)のこること。殘念　○竭さる(つくさる)　○勿體なさ(もつたいなさ)　○廉い(やすい)　○亡き父(なきちゝ)　○涕(なみだ)　○獻身(けんしん) 一身をさゝげること　○鄕黨(きやうたう) 村のなかま　○家道(かだう) くらしむき　○弱年(じやくねん) 年わか　○扶持(ふち) たすけること　○既倒に挽回(きたうにばんくわい)

した 已に倒れたるをもりかへした ○遑 ○唯一

二　我が幼時

○上松 ○文字などあり 學問があり ○七言絶句の詩 一句七字より成れる詩にて、絶句は詩の一體なり ○一首 首は、詩の數へことば ○意 わけ ○誦 そらよみ ○講ず はなす ○文才 學問のはたらき ○かの人 上松を指す ○頑 頑固 ○利根 かしこきたち ○氣根 まけぬ氣 ○黄金 かね ○學匠 がくしや。ものしり ○戸部 ○御いつくしみ 御ちやうあい ○側を離れ參らせず おそばやくをつとむるをいふ ○ほこらせ 自慢し ○八歳の秋 ○上總國に往きたまひし 江戸への參勤終りて、封國即ち上總の久留里に就きたるをいふ ○十二月半ば ○侍ふ事 つかへること ○明

けの年 次の年 ○課 その日のきまり ○行草の字 行書、草書の字 ○竹緣 竹ばりのえんがは ○ねむけの催して ねむけがさして來て ○密に 人知れずに ○いたく 甚しく ○おほやう 大方 ○かたの如くに 十分とはゆかねど、きまりどほりにだけは ○庭訓往來 舊幕時代寺小屋の手紙の文にて必要なる文字と智識とを敎ふるを目的とす ○淨寫 せいしよ ○冊 本にとぢたるもの ○褒め ○大方ならず 一と通りではない ○贈答 やりとり ○太刀打ちのわざ 劍術 ○わぬし おまへ ○さこそ さやうで ○太刀 大きなかたな ○脇差 小さき腰刀 ○不用の事にや 不用のことでござらう ○のたまふ所 おほせ ○然なり もつともである ○興に入りて おもしろがつて

三　時間

來ること

○比類(ひるゐ) たぐひ ○敗北(はいぼく) まけ ○嗤(わら)つて あざわらつて ○部將(ぶしやう) 一方の大將 ○遲參(ちさん) おくれて

○一敗地(いちばいち)に塗(まみ)れ了(をは)んぬ 全く敗北して、再び起つ能はざる意 ○祕訣(ひけつ) おくの手 ○名言(めいげん) すぐれたる言葉

○進捗(しんちよく) すゝみはかどり ○索然(さくぜん) 物の盡くる貌 ○苦痛(くつう) くるしみ ○即時(そくじ)に着手(ちやくしゆ)す すぐその場ではじめる

○郵書(いうしよ) 郵便 ○沐浴(もくよく) ゆあみ ○茫然自失(ばうぜんじしつ) ぼんやりとして己れを忘れること ○分陰(ふんいん) 少しのいとま

○機會(きくわい) をり ○斷(だん)じて おしきつて ○辯疏(べんそ) いひわけ ○辯解(べんかい) いひわけ ○方(まさ) 丁度に

○所以(ゆゑん) いはれ

一三 軍旗(ぐんき)

○至尊(しそん) 天皇陛下 ○榮辱(えいじよく) 名譽と恥辱 ○面前(めんぜん) まのあたり ○帝都(ていと) みやこ。東京を指す ○旗手(きしゆ) はたもち

○護衞下士(ごゑいかし) まもる下士、下士は下士官の略。陸海軍の下級の士官、即ち陸軍にては曹長、軍曹及び伍長をいひ、海軍にては上等兵曹及び兵曹をいふ

○一旒(りう) 一本 ○協力同心(けふりよくどうしん) 力をあはせ、心を同じくすること ○威武(ゐぶ) たけき武力 ○宣揚(せんやう) のべあらはす

○死力(しりよく) 必死の力 ○一見(けん) ちよつと見る ○擁護(ようご) かゝへまもる ○水平(すゐへい) まつたいら ○分列式(ぶんれつしき) 觀兵式にて、貴顯の前を通過する時、規定の敬禮をなして通過し、其の親閲に供ふること ○目擊(もくげき) たしかに目にて見る ○全線突擊(ぜんせんとつげき) 全隊がつき進みてうつこと

○潔(いさぎよ)く ○屠腹(とふく) 切腹に同じ ○煤色(すゝいろ) ○褪(さ)め ○幾多(いくた) おほくの

一四 弦月旗(げんげつき)

○肝膽(かんたん) きも ○本營(ほんえい) 本陣 ○寂(せき)として しんとして。ものしづかなる貌 ○筒(つゝ) 鐵砲 ○手兵(しゆへい) てぜい

○いざよひの月(つき) 十六夜の月 ○み空(そら) みは接頭語 ○吶喊(とつかん) ○なめり なるめり。であるら

しい ○囘復(くわいふく) なほりて、もと通りになること ○間道(かんだう) ちかみち ○憩(いこ)ひて ○手創(てきず) ○さなん そ
なに ○無念(むねん) 残念 ○果敢(はか)なく 死すること ○凱陣(かいぢん) いくさに勝ちてかへること ○すだく 群がる

一五　兎狩(うさぎがり)

○收穫(しうくわく) とり入れ ○貼札(はりふだ) ○炊事番(すゐじばん) めしたき番 ○深夜(しんや) よふけ ○けたゝまし
く あわただしく ○天明(てんめい) よあけ ○焚火(たきび) ○晃々(くわうくわう) 光り輝くさま ○勢子(せこ) かりの時、鳥獣を狩り出す人足
○落膽(らくたん)する がつかりとはりあひを落す ○淡褐色(たんかつしよく) うす茶色 ○碧玉(へきぎよく) あをき玉。石英の一種 ○鴉(からす) ○大(おほ)
胡坐(あぐら) ○蘿蔔(らふく) 大根 ○胡蘿蔔(にんじん) 人参とは異る

一六　土地(とち)と植物(しよくぶつ)

○森林(しんりん) もり ○趣(おもむき) おもしろみ ○目(め)を惹(ひ)く めにつく ○齒輪軌道(しりんきだう) アブトシキ鐵道 ○盛(せい)
夏(か)の候(こう) 夏のまつさかりの時分 ○光景(くわうけい) ありさま ○廟(べう) おたまや ○攀(よ)づ 手足でのぼる ○湖畔(こはん) 湖水のほ
とり ○樅(もみ) ○針葉樹(しんえうじゆ) 針の形をなしたる葉を持つ樹木 ○密林(みつりん) こみあひたるはやし ○暗黑(あんこく) 色の黒きにいふ
○鬱蒼(うつさう) 樹木の盛んに茂れるさま ○水蘚(みづごけ) ○固有(こいう) もとよりある ○原頭(げんとう) 頭はホトリの意。野原のほとり。のはら ○楊梅(やまもゝ)
○花苑(くわゑん) 花のその ○差異(さい) ちがひ ○奇(き) ふしぎ ○行(かう)を轉(てん)じて あとがへりして ○廣袤(くわうぼう)
○風光(ふうくわう) けしき ○ほしいまゝに きまゝに ○版圖(はんと) 戸籍、領地の義。版は名籍、圖は地圖なり
土地のひろさ。東西に廣きを廣といひ、南北に廣きを袤といふ ○陳(の)べたる

一七 根室(ねむろ)の冬(ふゆ)

○睹(み) ○好奇心(かうきしん) ものずき心 ○浪打際(なみうちぎは) ○塊(かたまり) ○逸峰(いつぽう) はなれたる山 ○蓆(むしろ) ○漁獵(ぎよれう) 魚をれふすること ○磨(すり)ガラス ○剃刀(かみそり) ○敏捷(びんせう) すばしこい ○髭(ひげ) 鼻の下のひげ

一八 歳(とし)の暮(くれ)

○たばしる とびちる ○八街(ちまた) 八方に通ずるまち ○結(むす)びもとめぬ むすびはてぬ ○時(とき)の間(ま) 僅かの時間

一九 雪(ゆき)

○玉屑紛紛(ぎよくせつふんぷん) 雪の盛んにふる貌 ○底冷(そこびえ) ○篩(ふるひ) ○一白(いつぱく) まつしろ ○常磐木(ときはぎ) ○金殿玉樓(きんでんぎよくろう) 美しき御殿や高殿 ○醜(しう) みにくさ ○昔(むかし)の詩人(しじん) 支那の詩人、白樂天を指す ○何(なに)を釣(つ)るの句 雪が降つて居る。海の沖の方に小舟が見えるこの寒い雪の日に、一體何を釣つて居るのやら、舟の上に漁夫の笠が雪でまつ白に見ゆるとの意 ○召波(せうは) 蕪村の門人 ○凡兆(ぼんてう) 加賀金澤人芭蕉門人 ○松原(まつばら)にの句 雪の降つて居る夕暮、松原の中の道を、遠く飛脚が一人急いで行くのが見えるとの意 ○一晶(いつしやう) 京都人貞德の門人 ○往還(わうくわん) ゆきかへり ○宿貸(やどか)せとの句 吹雪の中を旅したる武士が漸く家を見附けて、宿貸せ（一夜とめてくれ）と叫んで直ぐ腰の刀をほうり出したといふにて、武士が、やれ嬉しやと飛込んだるありさまをよんだ句 ○蕪村(ぶそん) 有名なる俳諧師 ○狼(おほかみ)の聲(こゑ)の句 深山の雪の夕暮、さなきだに物凄き所に、狼が吼出してこちらにもあちらにも吼ゆる聲が、一緒にそろつてするといふ意 ○丈草(ちやうさう) 尾張の人芭蕉の門人 ○北枝(ほくし) 加賀金澤の人。芭蕉の門人 ○深山(みやま) 奥山 ○荒涼(くわうりやう) 景色の荒れてものすごきこと ○雞(とり)の音(ね)のの句 雞が鳴いてゐる隣も、隣とは思へぬ程遠い所で鳴いてゐるやうに聞こゆるとの意 ○文考(しかう) 美濃の人。芭蕉の門人

二〇 海豹島

○北知床岬 片岡岬（侍從片岡利和氏の名に取る）といふ。明治四十年樺太廳、新に名を定めて北知床岬といへり ○岩礁 かくれ岩 ○隱顯 みえがくれ ○膃肭獸 ○捕鯨船 鯨を獵する船 ○爾來 それよりこの方 ○屯せしめて たむろさせて ○繁殖 ふえはびこること ○監視 みはり ○弛み ○密獵船 ひそかに規定を破りて獵する船 ○南部樺太 北緯五十度以南をいふ ○版圖 版は戸籍、圖は地圖にして、版圖と熟しては領地をいふ ○舊制 ふるきおきて ○本年 明治四十年 ○主要なる膃肭獸產出地 本島は、世界三大產地の一なり ○石檣 石のほばしら ○覘ひ ○怕る ○嚴禁 嚴重に禁ずる ○蹲る しやがむ ○諦視 審らかに視る ○牝獸 女のけもの ○嬉々 よろこびたのしむ貌 ○喧喧囂囂 甚だしくかまびすしきをいふ ○奇觀 めづらしきみもの ○無慮 ざつと數へての意 ○聾す 耳の聞えざること ○瞬時 またゝく間。極めてわづかの間 ○家鴨 ○地區 土地の區域 ○爭鬪 いさかひ ○游泳 およぎ ○缺乏 物の不足すること ○大泊 一名アニハ港。樺太第一の良港

二一 山の幸海の幸（上）

○漁業 れふのわざ ○鈎 ○祕藏 大切にしまひおくこと ○償ひ ○鹽土翁

二二 山の幸海の幸（下）

○瑠璃 ○瑪瑙 ○井筒 井戸の地上の圍ひの木又は石を圓形にかまひたるもの ○同感 感ずるところの同じきこと ○部下 てした ○詮議 とりしらべ ○逗留 ○餞別 ○八尋 尋は一尺の八倍をいふ。ひろ

○背後　○奇瑞　めでたきしるし

三　維新の三傑

○維新　國政の改革　○三傑　三人のすぐれたる人　○明治維新　明治初年の改革をいふ　○翼賛　たすけること

○公家　武家に對して公卿(くげ)をいふ　○三條岩倉の二公　三條實美(サネトミ)岩倉具視(トモミ)　○大義　大なるすぢみち

○東奔西走　色々と骨折りつくすこと　○志士　社會又は國家の爲めに、身をなげ出してつくす人　○氣運　時勢のまはり合せ

○廟堂　朝廷　○參與　あづかり共にはかること　○邦家柱石の臣　重任を負ひ國家を支配する臣

○景仰　敬ひ慕ふこと　○氣宇闊達　度量の廣く大きくして物事に滯らぬこと　○量　度量　○東下　京方より江戸に下るをいふ

○事を了し　事件を片付け　○兵火の慘害　戰爭の爲めに火事を起すわざはひ　○幾歴㆓辛酸㆒

志始堅　幾度となくつらき目に逢ひて後、志が始めて堅くなる　○丈夫玉碎愧㆓甎全㆒　男子たるものは玉となつて碎くるとも、瓦と成りて全きを愧づる。即ち國家に功勞をなして死するとも、空しく長生きするを愧づるとの意　○遺法　のこしおく規則　○不㆘

爲㆓兒孫㆒買㆗美田㆖　子孫の爲めによき田を求めてあてがひて、安閑と生活の出來るやうにはせぬとの意　○沈着　落ち著きたること

○果斷　思ひきりよく事を爲すこと　○征臺の役　臺灣征伐の戰　○辨理大臣　國家を代表して事に當る全體の權を委ねられたる大臣

○償金　つくのひの金　○單航　一人にて船に乘り行くこと　○黑煙堆裏　黑煙のうずたかき中

○篷窓　船の窓　○內務卿　今の內務大臣　○謀畫　はかりごと。もくろみ　○獻替　獻は進、替は廢なり。可を進め、否を廢するをいふ

○列藩　もろもろの藩　○封土　大名の領地　○謂へらく　おもふやう。おもふには

○積弊　積り積りたる弊害　○一掃　はらひのけること　○擧つて　殘らず　○尋いで　○版籍奉還　土地と人民とを朝廷に還し奉ること

○知藩事　今の府縣知事に當る　○元老院　明治八年に設けられ、二十三年に廢せらる。同法

律案を議論し、又は陛下の御訊問に答へ奉る等のことをなす

○首唱（しゆしやう）　云ひ出し

○逼我疆（わがきやうにせまる）　我が國境に襲ひ來る

○孤劍（こけん）　一人にて劍を横たへ行くこと

○一片依然男子腸（いつぺんいぜんたりだんしのちやう）　一つの男子の眞心は、もと通りであるとの意

○冠を掛けて（くわんをかけて）　辭職するをいふ

○刺客（せきかく）　ある目的のために、高位高官の人など刺し殺す人

○追贈（つゐぞう）　後より送ること

二四　義士（ぎし）泉岳寺（せんがくじ）へ引揚（ひきあ）ぐ

○銅鑼（どら）　カラカネにて造りたる盤狀の器

○人員（じんゐん）を點（てん）する　人數をかぞへる

○擁（えう）し　かゝへ

○隊伍（たいご）　隊の組

○住持（ぢうぢ）　住僧

○手（て）ぬかり　ておち

○膽勇（たんゆう）　膽力つよく勇あること

○發言（はつげん）　いひだし

○悠悠（いういう）　おちつきてせまらぬ貌

○態度（たいど）　みがまへ

○義烈（ぎれつ）　忠義のすぐれたること

○無雙（むさう）　ならびなきこと

○順路（じゆんろ）　本通り

○吏（り）　役人

○拜謁（はいえつ）　おめみえ

○面面（めんめん）　めいめい

○亡君（ばうくん）　なき君

○刃傷（にんじやう）　刃物にて人をきずつくること

○生害（しやうがい）　切腹

○公裁（こうさい）　おかみの裁判

○もだし難（がた）く　だまつて其のまゝにおくこと能はず

○泉下（せんか）　よみぢ

○一日三秋（いちじつさんしう）の思（おもひ）　待遠きこと

○蟷螂（たうらう）の斧（をの）を頼（たの）むの笑（わらひ）　おのれの分際をわきまへずして大敵に向ふものわらひ、蟷螂はカマキリなり

○進獻（しんけん）　進めたてまつる

○鬱憤（うつぷん）　つもり〱たるうらみ

○哀痛（あいつう）　甚しくかなしむこと

○千載（せんさい）の下（もと）　永久。千年の後

二五　善（ぜん）は易（やす）くして惡（あく）は難（かた）し

○罵（のゝし）り

○分別（ふんべつ）　思案。わきまへ

○大儀（たいぎ）　重大なること

○恐怖（きようふ）　おそれ

○慚愧（ざんき）　はぢ入ること

○勸善懲惡（くわんぜんちようあく）　善をすゝめ、惡をこらす

○教訓（けうくん）　をしへ

○發達（はつたつ）　すすめること

○寧（むし）ろ

二六　安宅(あだか)

○主從(しゆじう)　主人と從者（家來）
○先達(せんだつ)　修驗者の峯入りの時同行に先立ちて案内するもの
○窶し(やつし)
○ゆゆしき　重大　甚しき
○手段(しゆだん)　てだて
○强力(がうりき)　山伏の連れたる下男
○笈(おひ)
○勸進(くわんじん)　僧徒が佛道に關したることにつき、俗人をすすめて、寄附なさしむること
○殊勝(しゆしよう)　けなげ
○贋山伏(にせやまぶし)
○むつかし　いとはしい
○聽聞(ちやうもん)　聞くこと
○卽智(そくち)　早速のきてん
○紅(べに)
○一期(いちご)　一生涯
○仰天(ぎやうてん)　甚しくおどろくこと。びつくり
○打擲(ちやうちやく)
○疑念(ぎねん)　うたがひの心

二七　犬ころ（上）

○憶ひ(おもひ)
○單調(たんてう)　一本調子
○拍子(ひやうし)
○鼾(いびき)
○囃子(はやし)
○消壓され(けおされ)
○啼聲(なきごゑ)
○咽喉(のど)
○欠伸(あくび)
○晩い(おそい)

二八　犬ころ（下）

○擡げて(もたげて)
○餘所(よそ)
○舐める(なめる)
○乳首(ちくび)
○揉立て(もみたて)
○産毛(うぶげ)
○摑み(つかみ)
○悲鳴(ひめい)　あはれな鳴き聲
○撮まれ(つまれ)
○身慄(みぶるひ)
○尻尾(しつぽ)
○透さず(すかさず)
○人參(にんじん)
○顋(あご)
○顰めて(しかめて)

二九　家鄕に贈る(おくる)

○家鄕(かきやう)　くにもと
○懇書(こんしよ)　ねんごろなる手紙
○精讀(せいどく)　くはしくよむ
○壯康(さうかう)　達者
○頑健(ぐわんけん)　極めて丈夫

夫なること

○友愛の情(いうあいのじやう) 兄弟又は姉妹間の交りのあつき情　○衷心(ちうしん) 本心　○感激(かんげき) 感じて心のふるひ立つこと　○厚情(かうじやう) しんせつ　○同僚(どうれう) 仲間　○絶倫(ぜつりん) すぐること　○先考(せんかう) 亡き父　○激賞(げきしやう) 甚しく賞むる　○眞相(しんさう) 實際の有樣　○中止(ちうし) 中途にて止むること　○幸甚(かうじん) しあはせ　○天祐(てんいう) 天のたすけ　○確信(かくしん) かたく信ずる　○配慮(はいりよ) 心配　○自愛(じあい) 自分にて自分の身を大切にすること

三〇 峠の茶屋(たうげのちやや)

○覗く(のぞく)　○庇(ひさし)　○無斷(むだん) ことはりなし　○床几(しやうぎ)　○雄(をす)　○燻つて(くすぶつて)　○寳生(ほうしやう) 謠曲の流の名　○表情(へうじやう) 心中を外へ出しあらはすこと　○カメラ Camera寫眞機械の暗箱　○焦茶色(こげちやいろ)　○軒端(のきば)　○逡巡(しゆんじゆん) ぐづぐづ　○老嫗(らうう) 女のとしより

三一 自然の音樂(しぜんのおんがく)

○節(ふし) 歌ふ調子の高低長短　○琴(こと) 我國に古よりあるものは六絃にて、和琴(ワゴン)といひ支那より傳來せるものは十三絃にて箏(ツマゴト)といふ。今は箏を主とす　○通例(つうれい) あたりまへ　○人爲(じんゐ) 人のつくれること　○しらべ ねいろ　○百鳥(ひやくてう) もろもろの鳥すべての鳥　○沈めば(しづめば) かくれて入れば　○機織(はたおり)　○樂を奏す(がくをそうす) 音樂をならす　○笙(しやう)　○篳篥(ひちりき) 雅樂に用ふる樂器。笛に似て竪に吹く竹の管なり　○琵琶(びは) 四絃なり。仁明天皇の時支那より渡來す　○豆太鼓(まめだいこ) 小兒の玩具　○瀑布(ばくふ) たき

三二 初春の歌(はつはるのうた)

○雲雀(ひばり)

雲と風

熊澤蕃山

雲のかゝるは月のため、
風の散らすは花のため、
雲と風とのありてこそ、
月と花とはたふとけれ。

新撰國語讀本詳解 巻二終

新撰國語讀本詳解 巻三

一 明治天皇御製(めいぢてんわうぎよせい)

○ありのまにまに ありのまゝに
○言(こと)の葉(は)の誠(まこと)の道(みち) 和歌の道をいふ
○うちつけ むきだし
○大海原(おほうなばら) 大海のひろくして原のごときよりいふ
○吹(ふ)きのまにまに 吹くにつれて
○述懐(じゆつくわい) おもひを述ぶること
○高(たか)きいやしき 身分貴きといやしきと
○ほどほどに 身分相應に
○外國(とつくに)
○うなゐ 髫髪 子供のこと

二 畝傍(うねび)の山陵(さんりよう)

○卜して(ぼく)　うらなひ定めて　○瑞籬(みづがき)　神社のかき　○皇祖(くわうそ)　天皇の先祖　○額づく(ぬか)　額突く義。頭を地につけて拜禮すること　○皇基(くわうき)　天子が國家をしろしめし給ふもとゐ　○感慨(かんがい)　物事に感じてなげくこと　○歷代(れきだい)　代代　○王政(わうせい)古(いにしへ)に復(かへ)りて　明治の新政をいふ　○隴(ろう)を得(え)て蜀(しよく)を望(のぞ)む　むさぼりて足ることを知らざるをいふ。三國志の魏志に「操曰く、人足ることなきに苦しむ。既に隴を得て復た蜀を望む。」とあり　○神神(かうがう)しさ　何となく尊く感ぜらるゝこと

三　西國花便り(さいこくはなだより)

○花信(くわしん)　花のたより　○南朝天子(なんてうのてんし)　後醍醐天皇以下南朝の天子　○御魂(ぎよこん)香(かんばし)　○延元陵下(えんげんりようか)　後醍醐天皇の御陵の下　○匆匆(さうさう)　いそがはしき貌。手紙の終りにかく挨拶　○洒落(しやれ)　○兜巾(ときん)　修驗者のかぶる小さき頭巾　○鈴懸(すゞかけ)　山伏の服に上に着る衣　○堰止め(せきと)　○襖(ふすま)　からかみ　○木挽職(こびきしよく)　○一過(くわ)して　一と吹き吹いて　○彩(さい)

霞(か)　あやがすみ。櫻花をいふ　○狼藉(らうぜき)　散りみだるること。狼の草を藉(し)きて臥すれば、草の亂るゝよりいふ　○落英(らくえい)　ちる花　○吹雪(ふぶき)　風にまじりて降るこまかき雪　○繽紛(ひんぷん)　亂るる貌　○繚亂(れうらん)　ちりばり亂るゝこと　○樓臺(らうだい)　たかどの　○焦土(せうど)　こげ土　○桃源境(たうげんきやう)　支那の武陵とて、俗界を離れたる仙境　○俚謠(りえう)　さとうた。ゐなかうた　○鄕士(がうし)　村落に住する武士　○僻陬(へきすう)　片田舍　○一夫(ぷ)守(まも)れば萬夫(ばんぷ)も攻(せ)むるに難(かた)し　極めて要害堅固なるをいふ　○險岨(けんそ)　けはしい　○勝(しよう)　景色よきところ

四　錦の直垂(にしきのひたたれ)(上)

○菜摘川(なつみがは)　吉野川が大和國吉野郡國樔村菜摘地方を流るゝあたりの稱　○畔(ほとり)　○旗幟(きし)　はた、のぼり　○兵器(へいき)　いくさ道具　○戰端(せんたん)　戰爭のいとぐち　○東軍(とうぐん)　北條方の軍　○嚮導(きやうだう)　案内　○術(すべ)　○蒐(か)け　○薙拂(なぎはら)ひ

○淋漓（りんり） あふれ流るる貌
○鮮血（せんけつ） なま血
○英氣（えいき） 人にすぐれたる才氣
○勃勃（ぼつぼつ） 勇氣そゞろにおこりたつ貌
○沈痛（ちんつう） 言ふことと爲すことの深く急所に當りて、痛切を覺ゆること
○悲壯（ひさう） なげきかなしみて、意氣のふるひ起ること
○慨然（がいぜん） なげく貌
○灑ぐ（そゝぐ）
○村上義光（むらかみよしてる）
○木戸（きど） 城門
○御諱（おんいみな）
○物具（もののぐ） よろひ
○股肱（ここう） たのみとすること
○衢（ちまた）

五 錦の直垂（にしきのひたゝれ）（下）

○息喘き（いきせき）
○殉ず（じゅんず） 死者のあとをおひて自殺する
○先途（せんと） ゆくさき
○心元なし（こゝろもと） 氣がかり
○高櫓（たかやぐら）
○狹間（さま） やぐらにあるまど
○燦たる光彩（さん　くわうさい） あざやかなるひかりいろどり
○東夷（とうい） ひがしのえびす 敵をのゝしつていふ語
○寛ぐれば（くつろ）
○追手（おつて） 城の表門
○搦手（からめて） 城の裏門
○斫つて仆す（き　たふ）
○氣節（きせつ） きがい。意氣と操守と
○義烈（ぎれつ） みさをの最もかたきこと

六 捕鯨記（ほげいき）（上）

○蔚山（うるさん） 慶尚道にあり。昔加藤淸正の籠城せしを以て有名なり
○拔錨（ばつべう） 錨（いかり）を拔きて船出すること
○鬱陵島（うつりようたう） 朝鮮東岸の一島
○浬（ノット） 一浬は我が約十七町に當る
○偵察（ていさつ） 敵のやうすをひそかにうかゞふこと
○捕獲（ほくわく） ぶんどること
○噸（トン） 我國の二百七十一貫に當る
○八節（ノット）
○舳（ぢく） 船のへさき
○銛（もり） 投げ飛げして鯨を刺すもの。鐵にて造る
○嵌めて（は）
○徑（けい） さしわたし
○ウインチ Winch 巻揚機
○尋（じん） 八尺をいふ
○機關の運轉（きくわん　うんてん） きかいをまはすこと
○暗黒（あんこく） くらやみ
○潮水（しほ） 海の水
○疲れて（つか）
○夢中（むちう）
○左舷（さげん） ポートサイド Port side 左の船べり
○噴き上げて（ふ　あ）
○壯觀（さうくわん） たいしたみもの
○敷設水雷（ふせつすゐらい） 水中に沈めおく水雷
○沒して（ぼつ） しづんで
○渺（べう）

漫(まん)　はてしなくひろき貌
○大海原(おほうなばら)　原の如くひろびろした大海
○砲手(はうしゆ)　大砲のうちかた
○威諾人(ノールキじん)　歐羅巴洲のノールキ國の人
○把手(ハンドル)　とって
○機會(きくわい)　をり
○徐行(スロー)　しづかにゆくこと
○滿船(まんせん)　船中
○咳(せき)
○大喝一聲(だいかつせい)　大聲にてしかりとばすこと
○叱られた(しか)
○射距離(しやきより)　著彈距離
○行方(ゆくゑ)　ゆきがた
○檣樓(しやうろう)　帆柱のものみ臺
○船員(せんゐん)　船長以下の乘組員
○平然(へいぜん)　平氣なる貌
○巨鯨(きよけい)　おほくじら
○時(とき)である　丁度よい時である
○狼狽せず(らうばい)　あわてず
○惰力(だりよく)　惰性の力
○潜って(くゞ)
○一刹那(せつな)　極めて短かき間
○轟然(くわうぜん)　ひゞく貌
○白浪の裏(はくらう うち)　白浪の中
○報告(はうこく)　しらせ
○彼方(あつち)
○泳(およ)いて

七　捕鯨記(ほげいき)（下）

○暢氣(のんき)
○オール、ライト　宜しい。萬全などの意
○齊しく(ひと)
○荷へる(にな)
○關らず(かゝは)
○些の表情を示さず(さ へうじやう しめ)　すこしも心の中のおもひを外にあらはさず
○悠然(いうぜん)　ゆつたりとしたる貌
○船橋(せんけう)　甲板の前面に、更に一段高くしたるところ。運轉手など居て、航海の事をつかさどる
○水夫(すゐふ)　かこ
○絶叫した(ぜつけう)　しきりにさけ
だん
○回轉(くわいてん)　まはること
○迸る(ほとばし)　とびちる
○摩擦(まさつ)　すれること
○捌(さばき)
○鋼鐵索(かうてつさく)　鋼鐵にて造りたるなは
○迅速(じんそく)　てばやきこと
○肝腎(かんじん)
○傭って(やと)
○海洋(かいやう)　おほ海
○鈍らぬ(にぶ)
○一段落(だんらく)　ひときり
○大活動(だいくわつどう)　おほはたらき
○紙鳶(たこ)
○急激(きふげき)　急にはげしきこと
○疣(いぼ)
○喘ぎ(あへ)いきせくこと
○偉大(ゐだい)　すぐれて大なること
○悲慘(ひさん)　いたましきこと
○念(ねん)　かんがへ。おもひ
○とゞめの銛(もり)　殺して其の喉を刺し、息の根をとゞむるとき用ふる銛
○冒險(ばうけん)　危險をおかして事をなすこと
○短艇突擊(ボートとつげき)　ボートにてつきうつこと
○勇敢(ゆうかん)　勇ましくして、物事をおしきりてなすこと
○雄姿(ゆうし)　いさましきすがた
○反射(はんしや)　てりかへし
○鎔(よう)

岩流（かんながれ）　火山より吐き出す岩の鎔けたるものゝ流れ　○沈著（ちんちゃく）　おちつきて居ること　○救命浮標（ライフブイ）　船にて人を救ふ時用ふる、丸くして人體を入るゝ丈けに造れるもの　○尾羽（をば）　鯨の尾　○手平（てひら）　鯨のひれ　○扱いて（しごいて）　しめてこいて　○絶大（ぜつだい）なる　きはめて大きい　○渦巻（うづまき）　○櫂（かい）　○筏師（いかだし）　○礁脈（せうみゃく）　かくれ岩の脈　○奮然（ふんぜん）　勇氣をふるふ貌　○惡戰惡鬪（あくせんくたう）　困難なるたゝかひ　○反（そり）　○舷側（げんそく）　ふなべり　○碧海（へきかい）　あをうみ　○鐵鎖（てつさ）　鐵のくさり　○長鬚鯨（ながすくじら）　鯨の一種鬚の長い鯨

八　箱根（はこね）

○巖岨（いはそば）　いはのけはしきところ　○冰柱（つらゝ）　こほり　○石葦（ひとつば）　水龍科に屬する草。山中の陰地に生じ葉は深綠色にして、冬猶ほ枯れず。根莖をわがね、軒などにかけて賞翫す　○三冬（みふゆ）　冬季三ケ月の間　○嫩し（わかし）　○ひねもす　終日。一日中

九　東京（とうきやう）

○潮入（しほいり）　池沼などに海水の通ひ入ること　○茫茫（ばうばう）　ひろ〲とせるさま　○武藏八平氏（むさしへいし）　諸説あれど、要するに、世人の通稱にして、誰々と明かにはわからず。坂東八平氏ともいひ、この地方の豪族を指す　○室町幕府（むろまちばくふ）　足利氏將軍たりし時の幕府なり　○城樓（じやうろう）　城のやぐら　○白妙（しろたへ）　白色　○舊領（きうりやう）　もと領せし地　○いたく　非常に　○そぎ葺（ふき）の屋根（やね）　そぎにて葺きたるやね　○經營（けいえい）　いとなみつくる　○覇權（はけん）　はたがしらたる權利　○土一升金一升（つちしやうかねしやう）　市街の繁華にして、從つて地代も高ければ、その地の價は土一升が金一升ほどの價ありとの義　○膨脹（ばうちやう）　ふくれひろがる　○誇稱（こしよう）　ほこりて稱すること　○車駕（しやが）　天子の乘車をいふ　○大廈高屋（たいかかうをく）　大なる建物。廈は家なり　○巍然（ぎぜん）　高くそびゆる貌　○坦坦（たんたん）　たひらかなる貌　○舊觀（きうくわん）　むかしのありさま　○東宮御所（とうぐうごしよ）　皇太子殿下の御殿　○一喜一憂（いつきいちいう）　あるひは喜び、あるひはかなしむこと　○低回（ていくわい）　その邊をかへりみさまよふこと

一〇　年中行事

○式日　宮中などにて儀式のある當時。祝ひ日　○家族團欒　家のものが一つにあつまること　○祝意を表す　いはひの心をあらはす　○注連繩　○齒朶　草の名　○交讓木　樹の高さは七八尺、枝葉茂生し、形長く厚く蒂赤し。葉舊葉は春迄もあり。新葉老いて後落つ。相讓るに似たるより新年の儀式に用ひて祝ふ　○海鰕　○橙　○鏡餅　おそなへ　○靈屋　佛をまつりたる所　○一堂　一つのへや　○屠蘇の酒　屠蘇は藥の名。之を元旦に飲めば、一年中の邪氣を避け、齡を延ぶといふ　○若菜の粥　ななくさの粥をいふ　○具足開き　○奴婢　めしつかひの男女　○遊樂　あそびたのしみ　○やぶいり　藪入　○產土神　その土地の神　○氏神　氏の先祖を祭りたる神　○墳墓　はかば　○親族　しんるゐ　○祝詞　いはひのことば　○紙鳶　○童女　女の子ども　○雙六　○素袍　さむらひの禮服五つの紋あり　○烏帽子　○皷　○大紋　布製の直垂のことにして、大形の紋を五處にあらはせるもの。下に長袴を用ふ　○上巳の節

供　○艾餅　くさもち　○端午の節　○粽　あしども等に包みて、むしたる餅　○まだし　まだない　○節供　○幟　のぼり　○靈祭　たまつり　○盂蘭盆　○强飯　こはめし　○香を焚く　まつから、せんからなどをたく　○重陽　○神酒　○神饌　神にそなへる酒とたべもの　○ほど　頃　○追儺　おにやらひ　○節分　立春の節にうつりかはる時をいふ

一一　トラファルガルの海戰（上）

○將校　少尉以上の武官　○制壓　おさへつける　○睥睨　ながしめに見ること　○震懾　ふるひおそれる　○屏息　恐れ憚りてちぢまること　○孤立　ひとりだつ　○利用　いかして用ふる　○畢生　一生　○雄兵　つよき兵　○輸送　舟車の便によりて、物をおくること　○粉碎　はげしくうちくだく　○提督　司令長官　○猖

獗(けつ)　わる強きこと　○天職(てんしよく)　自身に自然にそなはりたるつとめ　○大擧(たいきよ)　多人數くり出すこと　○侵略(しんりやく)　おかし取る

○追尾(つゐび)　おひかけること　○督(とく)し　すべ率ゆる　○指揮(しき)　さしづ　○後殿艦(こうでんかん)　しんがりの軍艦　○空(くう)隙(げき)　すきま

○旗艦(きかん)　司令長官の坐乘せる軍艦　○佇立(ちよりつ)　たゞずみ立つ　○捕獲(ほくわく)　分捕　○是認(ぜにん)　よしと認める

○偉功(ゐこう)　すぐれたるてがら　○正裝(せいさう)　正しきみじたく　○燦爛(さんらん)　きらめく貌　○肅然(しゆくぜん)　つゝしむ貌　○赫(かく)赫(かく)　かゞやく貌

○塗炭(とたん)の苦(くるし)み　天下亂れて、人皆塗泥、炭火の中に在るが如きをいふ　○仁慈(じんじ)　なさけいつくしみ　○忠(ちう)誠(せい)　まごころ

○應護(おうご)　神佛の加護　○檣頭(しやうとう)　帆柱の先　○期待(きたい)　心に待つ　○莞爾(くわんじ)　につこり　○接(せつ)戰(せん)　より近づいて戰ふこと

○前驅(ぜんく)　さきがけ　○率先(そつせん)　先立つこと　○壯貌(さうばう)　さかんなるかほつき　○意氣軒昂(いきけんこう)　心ぐみの盛んにしておさへきれざること

○爽快(さうくわい)　意氣盛にしてたのしきこと　○眉宇(びう)　まゆのあたり

一二　トラファルガルの海戰(かいせん)（下）

○健帆(けんぱん)　大なる帆　○重塡(ぢうてん)　重ねてつめる　○欣然(きんぜん)　よろこぶ貌　○好丈夫(かうじやうふ)　よき男子の意　○索具(さくぐ)　なは

○斷絕(だんぜつ)　きれる　○算(さん)を亂(みだ)す　順序、列次を亂す意。戰敗れて潰走すること　○巨礮(きよはう)　大砲　○毀損(きそん)　そこなふこと

○酣(たけなは)　○檣樓(しようろう)　ほばしらのものみする處　○狙擊(そげき)　ねらひうち　○沮喪(そさう)　くじけはゞみて、勢氣うすること

○手巾(ハンケチ)　○過半(くわはん)　半分以上　○微笑(びせう)　ほゝゑみ　○投錨(とうべう)　錨(イカリ)を投じて舟どまりすること

○殘喘(ざんぜん)　ながくもあらぬ餘命　○薄暮(はくぼ)　夕方　○耳朶(じだ)　みゝたぼ　○瞑(めい)す　目をつぶつて死ぬること

一三　初夏(しよか)の感(かん)

○劈(つんざ)いて　○蘇生(そせい)　よみかへり　○生生(せいせい)　いき〳〵してあること　○潑剌(はつらつ)　勢よくとびはねること　○特(とく)

徵（ちよう） 他のものに比して、とりわけ目立ちたるしるし　○率直（そつちよく） すなほ　○素因（そいん） もと　○同化（どうくわ） 自己と異性質のものを自己と同性質のものとなすこと

一四　桶峽（をけはざま）

○篠（しの）を束（つか）ねて降（ふ）る雨（あめ） 豪雨のさまを形容していへるなり　○岨（そば）づたひ 山の側面をつたひ行くをいふ　○轡（くつわ）をつつみ 草摺をまき、物音をいましむる爲めなり　○草摺（くさずり） 鎧の腰部の前後に下れる裾　○必死（ひつし） 死力をつくすこと　○決（けつ）河（かは）破竹（ちく） 共に、勢の猛烈なるに喩ふ　○酒（さか）ほがひ さかもり　○佩（は）きつる太刀（たち） 打ち解けてとひ出でむ爲の序　○敵（かたき）　○玉（たま）の緒（を） いのち。玉は靈の義　○たのまれぬ 必ず明日ありとたのみにならぬ　○はたたがみ はたゝく雷の意。雷鳴をいふ

一五　南洲遺訓（なんしうゐくん）

○至誠（しせい） まごころ　○詐謀（さばう） いつはりのはかりごと　○策略（さくりやく） はかりごと　○迂遠（うゑん） まはり遠くして當座の用にたたぬこと　○伐（ほこ）り　○驕慢（けうまん） おごりたかぶること　○詮（せん） 甲斐。しるし　○毀（そし）る　○悅服（えつぷく） 心よりよろこんで其の人の恩德などに服すること　○僥倖（げうかう） こぼれ幸。まぐれあたりの幸福　○知己（ちき） 人の知遇を受くること

一六　門生（もんせい）に諭（さと）す

○春秋（しゆんじう）に富（と）む 年わかくしておひさきの年月に富むこと　○材力（さいりよく） 才のはたらき。智惠のちから　○懈（おこた）らず　○孜孜（しし）汲汲（きふきふ） つとめはげむ貌　○悠悠（いういう） ゆつくりとしたる貌　○齡傾（よはひかたむ）きて 年とつて　○古詩（こし） 文選二十七　○少壯ニ不努力ニ老大徒傷悲（せうさうどりよくせずらうだいいたづらにしやうひす） 若き時に勉強せずして、年老いて後悲んでもしかたなしとの意　○盛年（せいねん）

年わかきとき ○難再晨 二度朝はなし ○及時當勉勵 まなぶべき時に勉強せよ ○感懐 感じたるおもひ ○勸學 學問をすすめる ○來日 明日 ○日月逝矣、歳不我延 ○嗚呼老是矣、誰之愆 ○言簡にして ことば、てみじかにして ○打誦して 誦讀する意 ○陶侃 ○大禹聖人、乃惜寸陰 大禹は聖人なれども少しのひまもおしむ ○分陰 分陰は、寸陰よりなほ少しのひまをいふ ○佚遊荒廢 ぶら〳〵と遊びくらして、己れの職業を廢すること ○死無聞於後 ○曩祖 先祖をいふ ○急迫 きふにさしせまること ○優游涵泳 いそがずに落ちつきて深く學問の義理を味ふこと ○行役 參勤交替などの時、主君に伴して往來することを指す ○逆旅 はたごや ○道に志す 聖人の道、即ち仁義の道に志す

一七 職業の選擇

○肅啓 つゝしみて申上ぐる意。手紙の始にかく挨拶の語 ○令弟 人の弟をいふ ○虛譽心 みえをむさぼる心 ○白馬金鞍 白馬に跨り、黄金作りの鞍に乘る貴族的の少年輩を指す ○却けて ○直截 直に是非を見分けること ○敢爲 物事をおしきりて行ふこと ○些ト ○心事 心に思へること。料簡 ○高尚 氣象のけだかきをいふ ○才能 智慧のはたらき ○諾し 承知し ○發憤 ふんばつして心をふるひおこすこと ○放擲 なげやり ○先天 此世に生れ出でぬ先 ○冷靜 おちつきて靜かなること ○直言不諱 憚らずものをいふこと

一八 風と露

【一、風の音】 ○凩 木枯ともかく。秋の終りより冬にかけて吹く暴風 ○芒 ○蘆菰 ○動搖 うごきゆらぎ ○松籟 まつかぜ ○吟詠 詩歌をつくること ○梳る ○優雅 みやびやか ○壯觀 盛んなるながめ

○趣味（しゆみ） おもしろみ

〔二、露（つゆ）の玉（たま）〕 ○叢（くさむら） ○禾本科（くわほんくわ）の植物（しよくぶつ） 單子葉植物の中、竹、薄、稻、麥の類をいふ ○凝集（ぎようしふ） こり集まる

○濾（こ）し ○新鮮（しんせん） あたらしい ○萎（しを）れ

一九 豐太閤（ほうたいかふ）の逸話（えつわ）

○逸話（えつわ） 世に多く知られてあらぬ話 ○豪放（がうはう） 勇氣ありて、大まかなること ○洒脱（しやだつ） さつぱりして、俗習なきこと ○貧（ひん）賤（せん） まづしくいやし ○書翰（しよかん） 手紙 ○過半（くわはん） 半分以上 ○宛字（あてじ） ○御文書（ごもんしよ） ○祐筆（いうひつ） かきやく ○通牒（つうてふ） 書面を以てする告げ知らせ ○起草（きさう） 案文をつくること ○恐縮（きようしゆく） 恐れ入る ○失念（しつねん） 忘れること ○焦（いら）立（だ）ちて ○著（しる）き ○監者（かんじや） 番人 ○恐惶（きようくわう） おそれつつしみ ○樊籠（はんろう） 鳥のかご。自由を束縛せられて、つながれあること

○傾聴（けいちやう） 耳を傾けてきくこと ○放笑（はうせう） おほわらひ

二〇 筆（ふで）の歌（うた）

○めづる 愛玩する ○みやび男（を） 風流人 ○繪（ゑ）だくみ 畫工。ゑかき ○壯心（さうしん） さかんなる心 ○鬱勃（うつぼつ） 意氣のおこりあがるさま ○落筆（らくひつ） 筆をとりて詩文をつくること ○雲煙（うんえん） 雲と煙。山水の名畫などにいふ ○慷（かう）慨淋漓（がいりんり） 意氣ふるひおこりて、甚しくなげく貌 ○志士（しし） 社會又は國家の爲めに身命をぬけ出してつくす人 ○かひな 腕 ○片言隻句（へんげんせきく） かたこと、ひとつの句 ○哀音（あいおん） かなしみのことば

二一 蜀山人（しよくさんじん）の盆燈籠（ぼんとうろう）

○日傭（ひやとひ）　食物を得ざるをいふ　○行燈（あんどん）燈籠（とうろう）　○冗書（ぜうしよ）　ざれがき　○神樂阪（かぐらざか）　牛込區に在り　○資手（もとで）　○かこつ　なげきつぶやく　○寢惚様（ねぼけさま）　○頤の下（あごのした）　○先見（せんけん）　先きの事をみとほすこと　云々　○醉餘（すゐよ）　酒にゑひたるあと

二二　讀書（どくしよ）

○寂し（さびし）　○滋味（じみ）　滋養分　○順境（じゆんきやう）　一切の事、身分の意の如く都合よき境遇。之に反するを逆境といふ　○庇護（ひご）　かばひ保護すること　○名士（めいし）　名高き人。すぐれたる人　○經驗（けいけん）　實際のためし　○苟も（いやしくも）　かりそめにも　○眞の相（しんのさう）　實際のありさま　○碩學（せきがく）　大學者　○觀察（くわんさつ）　物事をよく注意してみあきらめること　○思索（しさく）　理由又は方法などを發見せんと思想をめぐらすこと　○肉眼（にくがん）　眼鏡に對して、人類の具有する常の眼　○恃まば（たのまば）　○一斑（いつぱん）　一部分。かたはし　○偉業（ゐげふ）　すぐれて大なるわざ　○啓發（けいはつ）　智識を開くこと　○誨導（かいだう）　をしへみちびく　○鼓舞（こぶ）　ふるひおこす　○傑出（けつしゆつ）　ぬけ出でたること　○媒介（ばいかい）　なかだち　○俊傑（しゆんけつ）　器量すぐれたる人　○吐露す（とろす）　はきあらはす　○保存踏襲（ほぞんたふしふ）　たもちのこして、あとをうけつぐこと　○識見（しきけん）　見識におなじ　○歎ず（たんず）　感心する　○私淑（ししゆく）　其の人に親しまずしてひそかにそれを模範として學ぶこと　○倣はん（ならはん）　○力め行ふ（つとめおこなふ）　實行を勉むる

二三　洋學の由來（やうがくのゆらい）

○洋學（やうがく）　西洋の學問　○由來（ゆらい）　○譯官（やくくわん）　外國の語を我國の語になほす役人　○杉田鷧齋（すぎたいさい）　○切磋（せつさ）　切りみがく。勉強　○質し（たゞし）　○偶々（たま〳〵）　○英邁（えいまい）　すぐるること　○只管（ひたすら）　一向　○草創（さうさう）　はじめ　○研精（けんせい）　勉強　○輩出（はいしゆつ）　人物の引きつゞきて出づること　○翻譯（ほんやく）　外國の語を國語になほすこと　○醫籍（いせき）　醫學の書物

○窮理　理をきはむること。專ら物理學をいふ。　○通商　外國との商業　○來舶の地　ふねの來りとゞまる處　○西陲　西のはて　○形勢　ありさま　○士君子　紳士などと同じく、上流社會の人　○百般　もろもろ　○先達の士　先輩にして師となるべき人　○顧ふに　○漸次　次第　○樓閣　たかどの　○階級　だんだん　○初階　階段のはじめ　○方今　いま　○隆盛　さかん

二四　樺太談判（上）

○幕使の一行　竹内下野守等の一行　○英・蘭・孛　英吉利、和蘭、普魯西亞　○往年　むかし　○フーチヤチン　Fontchatin 露國公使として一八五九年、清國と天津條約を結びし人　○ムラビヨフ　Muravievf 露國の將軍、黒龍江沿岸の經營に從ひ清國に境界改定を要求し、一八五九年、清國と愛琿條約を結べり　○派遣　命令して出張させること　○主張　いひはること　○肯んぜず　承知せぬ

○枉げて　强ひて　○ゴルチヤコフ　Gortchakov 露國有名の外交家、一八六六年普墺戰爭の時中立を守り一八七〇年の普佛戰爭に關する巴里條約締結の爲めに使したることあり　○イグナチエフ　露國の將軍にして外交家、英佛同盟軍の北京に攻入りし時露國公使として清國のために調停の任に當り其の報酬として、沿海州を清國より得たり　○嘲り笑つて　あざわらひして　○唐人の轉訛　唐人（カラヒト）の音がなまりて唐太（カラフト）となりしともいふ　○定說　きまつたかんがへ　○貴說　あなたのおかんがへ　○御所望　おのぞみ　○貴覽に供す　お目にかける　○迂遠　まわりどほきこと　○劃する　わける　○釀して　できて　○紛議を招き　ごたごたの論をひきおこし　○共領の姿　日露の兩國にて支配するさま　○畫然　キツパリと堺の分るる形容　○十全　完全といふに同じ　○好意　しんせつ　○演べ

二五　樺太談判（下）

○實況（じつきやう） 實地のもやう
○詳知（しやうち） よくしりぬくこと
○慧眼（けいがん） さかしい眼。眼力
○經歷（けいれき） ためし
○組頭（くみがしら） 幕府の職名。一組の長たる職
○隨從（ずゐじゆう）の諸員（しよゐん） ともにつれたる人々
○所存（しよぞん） かんがへ
○辯論（べんろん） のべとくこと
○讓與（じやうよ） ゆづること
○發議（はつぎ） 評議にて或る意見を唱へだすこと
○葛藤（かつとう） もつれ
○安穩（あんをん）に維持（ゐぢ）す おだやかにもちつゞける
○內訓（ないくん） ない〳〵のおしへの命令
○恢復（くわいふく）し難（がた）き とりかへしのつかぬ
○國損（こくそん） 國のそん
○慨然（がいぜん） いたみなげく貌
○閣老（かくらう） 老中の異稱
○申譯（まうしわけ）
○憤然（ふんぜん） いきどほる貌
○瘦腹（やせばら） つまらぬ
はら
○御目付（おめつけ） 徳川幕府の職名。老中の耳目となりて諸大名を監察するを大目付、若年寄の耳となりて旗下の諸士を監察するを目付をいふ
○職權（しよくけん） 職務上の權利
○記名調印（きめいてういん） 名をかき、印をおすこと
○組頭（くみがしら） 徳川幕府の一職名。一組又は一團體の長たるもの
○勘考（かんかう） かんがへ
○區區（くく）の評論（へうろん） まち〳〵のぎろん
○老練實著（らうれんじつちやく） ことになれて落付きたること
○俗吏（ぞくり）の輩（はい） 俗物なる役人ども
○說（せつ）に同（どう）じ 自分にはしつかりしたる說なくたゞ他人の說に贊成するをいふ
○口頭（こうとう） くちさき
○斷行（だんかう） きつぱりときめる

○顧問（こもん）に備（そな）はり 相談役となり
○壓伏（あつぷく）する術（じゆつ） 押しつけるてだて
○持說（ちせつ） 自分のかんがへ
○異議（いぎ） 反對の論
○拔群（ばつぐん）の績（せき） 世にすぐれたるてがら
○幕末（ばくまつ） 幕府の末
○千載（せんさい）の遺憾（ゐかん） いつまでものうらみ

二六 バクテリヤ

○細微（さいび） こまかい
○菌類（きんるゐ） キノコのたぐひ
○廓大（くわくだい） 大きくひろげる
○容積（ようせき） かさ
○生存（せいぞん） 生きて居る
○塵埃（ちんあい） ちり、ほこり
○汚水（をすゐ） きたなき水
○腐敗物（ふはいぶつ） くさつたもの
○球狀（きうじやう） たまの形
○螺旋狀（らせんじやう） ねぢの形
○自體（じたい） 自分のからだ
○分裂（ぶんれつ） さけること
○繁殖（はんしよく） ふゑる
○原形（げんけい） もとの形
○神速（しんそく） はやい
○外界（ぐわいかい） そと
○巨數（きよすう） 澤山のがす
○大洋（たいやう） 大なる海
○充實（じうじつ） みたす

○營養分（えいやうぶん）やしなひになるところ　○寄生（きせい）寄りついて生活すること　○結核（けつかく）桿狀にして大さ血球に類す　○勁敵（けいてき）つよき敵　○豫防（よばう）前以てふせぐ　○消毒劑（せうどくざい）毒を消すくすり　○撒布（さんぷ）まきちらす　○煮沸（しやふつ）煮たてる　○健全（けんぜん）丈夫　○死滅（しめつ）死にたえる　○虛弱（きよじやく）かよわい　○暴威（ばうゐ）を逞（たくま）しうす　十分にはびこる　○生育（せいいく）そだち　○堆積（たいせき）うづたかく重なりあふ　○慘憺（さんたん）むごたらしきこと

二七　太古（たいこ）の洪水（こうずゐ）（上）

○太古（たいこ）おほむかし　○傳說（でんせつ）いひつたい　○舊約全書（きうやくぜんしよ）基督以前に完成したる猶太（ユダヤ）民族の經典。凡て三十九卷。法律部歷史部、詩歌部及豫言部あり　○星辰（せいしん）ほし　○全智全能（ぜんちぜんのう）完全無缺なる智能　○創造（さうざう）つくりはじめ　○象（かたど）つて　○誘惑（いうわく）さそはれだまされる　○繁殖（はんしよく）ふえる　○現世（げんせ）現在の世　○蔓（はびこ）つて　○墮落（だらく）品行のをさまらぬこと

○豫（あらかじ）め　前以て　○同胞（どうはう）はらから。同一國民　○間斷（かんだん）たえま　○周章（あは）て　○容赦（ようしや）ひかへめにすること　○漠漠（ばくばく）ぼうとしてとりとめもなき貌　○漫漫（まんまん）ひろく流るる貌　○濁浪（だくらう）にごれる浪　○拜壇（はいだん）神を拜する壇　○誓約（せいやく）ちかひ　○苗裔（べうえい）子孫

二八　太古（たいこ）の洪水（こうずゐ）（下）

○罪惡（ざいあく）つみ　○年年歲歲（ねんねんさいさい）每年每年　○神通力（じんつうりき）靈妙にして物事を自在になし得る力　○一擧（きよ）一度にする事をいふ　○絕滅（ぜつめつ）たやす　○謎（なぞ）　○石塊（せきくわい）石ころ　○首長（しゆちやう）かしら　○被害（ひがい）害をうけること　○鯀（こん）　○經營（けいえい）もくろみはかる　○奔走（ほんそう）とびまはる。盡力すること　○氾濫（はんらん）水のみなぎりあふるゝこと　○海嘯（かいせう）つなみ　○地文（ちもん）　○大厄（だいやく）大さいなん　○頻繁（ひんぱん）しげくはげしきこと

新撰國語讀本詳解　巻三終

○

ふみ讀めば
やまと、もろこし昔いま
萬のことを知るぞ嬉しき

本居宣長

新撰國語讀本詳解　巻四

一　紅葉(もみぢ)の名所(めいしよ)

○關東(くわんとう)　古は近江國逢坂關より東方の國々を總稱せしが、後世は關東八州をいふ　○栂尾(とがのを)　○櫨(はじ)の樹(き)　○勝地(しようち)　景色のすぐれたる地　○規模(きぼ)　しくみ　○大谷川(だいやがは)　○大平(おほだいら)　○盛觀(せいくわん)　盛んなみもの　○許(ばかり)　○一入(ひとしほ)　一層　○初旬(しよじゆん)　十日を旬といふ。月の初めの十日間　○嶮(けは)し　○奇絶(きぜつ)　極めてよきこと　○優美(いうび)　品よく美くしい　○雄大(ゆうだい)　雄雄しく大きい　○景觀(けいくわん)　けしき。ながめ　○勝區(しようく)　けしきよき地　○晩秋(ばんしう)　秋のくれ　○美觀(びくわん)　美しきながめ

二 碓氷（うすひ）の汽車（きしや）

○幾多（いくた） 多くの ○觀客（くわんかく） 見物人 ○色（いろ）めかしき 色めいて見ゆる ○頓（やが）て ○所謂（いはゆる） 世間でいふ

○巒（らん） するどき山 ○仔細（しさい） いはれ ○榛（はんのき） ○櫟（くぬぎ） ○淡紅（たんこう） うすべに ○茜（あかね）

○褐色（かつしよく） 茶色 ○滿山（まんざん） やまぢう ○宛（さな）がら ○錯綜（さくそう） 入りまじること ○錦綉（きんとう） にしき

○過客（くわかく） 通る人 ○徒歩（とほ） かち ○勾配（こうばい） かたむきの度合 ○隧道（とんねる） ○黒暗暗（こくあんあん） 暗きを强めたる語

○喘（あへ）ぎ ○小春（こはる） ○錦繡（きんしう） 錦のぬひとり ○颯（さつ）と ○匆匆不宣（さうさうふせん） いそがはしくかき了りて、皆のべつくさざる意。手紙の終にかく挨拶

三 麥藁帽子（むぎわらぼうし）の傳（でん）

○虚心（きよしん） 心むなしきこと ○眞率（しんそつ） まじめ ○下司（げす）の僧（そう） いやしき僧 ○思（おも）ひひがめて 思ひちがへて

○打物（うちもの） うち切るための武器。太刀、劍の類 ○南風競（なんぷうきそ）はず 南風は南方の詩なり。其の聲調盛ならず、以て南方の國の衰ふるに比す

○顯位追褒（けんゐつひほう） 高き位をあとより贈ること ○庇陰（ひいん） かばふ ○卒然（そつぜん） にはかなる貌 ○華奢（くわしや） おごりぜいたく

○敝衣（へいえ） やぶれごろも ○シガレット 紙巻煙草 ○喞（ふく）む ○慷慨（かうがい） いきどほりなげく

壯（さう）ん さかん ○韜（くら）まし ○孰（いづ）れ ○信（しん） まこと

四 朝（あさ）の村（むら）

○どよめく 鳴りひゞく。さわがしきをいふ ○筬（をさ） ○朝燒（あさやけ） 日の出づる前、東の空の赤くみゆるもの ○鎚（つち） ○黍（きび）

五　家の紋

○饗應　馳走　○由來　いはれ　○問訊され　○起源　おこり　○先哲　むかしの賢者

○素袍・直垂・小袖　服装の名　○徽號　しるし　○冠　男子、十五歳になりて元服せし禮　○紋章　紋じるし

○燕尾服　通常禮服。上衣の下服あたりより前をかきおとし、後は割れて燕の尾の如き故に此名あり　○禮装　禮式のみじたく

○發達　ひらけすすむこと　○家系　家のすぢ　○事蹟　事のあとかた。いさを　○家祿の制　ちぎやうのおきて家祿は、家に傳はれる知行をいふ

六　歐米人の氣風

○自重心　自己の品位をたもちて卑下せぬこと　○品格　ひん・ひとがら　○觀念　心に考へおもふこと　○將來　こののち。ゆくさき

○彩色　いろどり　○海事思想　海に關することのかんがへ　○鼓吹　太鼓をたたき笛を吹く事にて議論を主張するにいふ

○軍港　鎭守府のあるみなと　○經營　もくろみ造る　○苦心　心をくるしむると　○誇稱す　ほこりていふ

○有數　數へたつる程少しといふ意　○宏壯　大きくしてりつぱなること　○瞠若　おどろきて目を見はる貌

○自負心　自らたのむ所ありて誇る心　○堅實　てがたい　○性格　品性。個人のもとよりもつてをる性質のすべてのとなへ

○自由貿易主義　國家の干渉を受けず自由に貿易すること　○輻輳　あつまる　○長所　すぐれてをるところ　○血色　かほいろ

○信賴　信用してたのむ　○秩序　じゅんじよ　○開拓者　きりひらきたる人　○向上心　うへにむかつてすすむこゝろ

○坑夫　かねほり　○小成に安んず　小事をなし遂げたるを以て安心する意　○修養　をさめやしなふ

○品性の下劣　しながら、せいしつの下等におとること　○紳士　氣風高くして禮儀あつきひと　○寧　いつそ

○自營獨立　自ら事業を營みて、ひとりだつ　○影響　さしひびき　○レコード破り　レコードは記

錄と譯す。世界に於て定まりたる記錄を打破して、記錄以上に出で、新記錄をつくる意

○橫溢（わうえつ） さかんにあふれる
○宏大（くわうだい） ひろく大きい
○櫓形（ろけい） ろのかたち
○突飛（とつぴ） だしぬけ
○特色（とくしよく） 他にすぐれたるところ
○行動（かうどう） はたらき
○大統領（だいとうりやう） 共和政體の主權の代表者
○猛虎（まうこ） たけきとら
○進取敢爲の氣象（しんしゆかんゐ きしやう） 進んでとり、おもひきつてするきしやう
○鬱勃（うつぼつ） 思ひのむねにふさがる貌
○振興（しんこう） ふるひおこす
○國運の發展（こくうん はつてん） 一國の運命の展びひろがること
○自信（じしん） 自から自身のねうちを見とめること
○瀦水（ちよすゐ） たまりみづ
○進歩主義（しんぽしゆぎ） 進むことをとり守る一定の方針
○要訣（えうけつ） かんじんの奥儀。おくのて

七 晩秋（ばんしう）

○野路（のぢ） のみち
○收納（しうなふ） とりをさめ
○甘藷（かんしよ） さつまいも
○百舌（もず）
○蓼（たで）
○すだく

あつまる

○螽斯（いなご）
○囁く（さゝやく）
○しとど 甚だしきこと
○朝來（てうらい） 朝から
○靜味（せいみ） しづかさ
○無花果（いちじゆく）
○寂然（せきぜん） さびしき貌
○檐滴（えんてき） のきのしたゝり
○私語（しご） さゝやき
○秋郊（しうかう） あきの野
○黄茅（わうばう） かれたるかや
○蕭蕭（せうせう） ものさびしき貌
○龍膽（りんだう）
○棘實（きよくじつ） ばらの實
○逕（けい） こみち
○啞啞（ああ） 烏の鳴き聲
○怒號（どがう） いかりさけぶこと
○玲瓏（れいろう） 美はしく輝く貌
○絶頂（ぜつちやう） 山の最頂上
○笹緣（さゝべり）
○點塵（てんじん） すこしのちり
○晩秋（ばんしう） 秋のくれ
○俯瞰（ふかん） うつむきてみること
○秀麗（しうれい） 秀でゝうるはしきこと
○皎潔（かうけつ） 白くいさぎよきこと
○神威（しんゐ） からがうしきすがた
○神采（しんさい） 神神しき貌
○眼睛（がんせい） ひとみ。まなこ

八 九重の山水（こゝのへ さんすゐ）

○赤坂の御所（あかさか ごしよ） 東京市赤坂區の東北に在り。赤坂離宮
○天高く、氣澄み（てんたか きす） 秋の空よく晴れて、心はれ〲すること

○風光(ふうくわう)　けしき
○衛士(ゑじ)　御所の庭内を守る役人。こゝは、東宮警手をいふ
○御料局(ごれうきよく)　宮内大臣の統轄の下に屬し、皇室世傳の御料及び主管に屬する財産會計を掌理するところ
○東宮職(とうぐうしよく)　宮内省に屬し、皇太子のことを掌る役所
○茂樹(もじゆ)　樹のしげみ
○栞(しをり)　枝折　枝を折りかけて、道しるべとするもの
○菊圃(きくほ)　菊ばたけ
○紅楓(こうふう)　紅葉したるかへで
○ささやか　小さき
○葭簀(よしず)　葦にてあみたるすだれ
○神仙(しんせん)　仙人
○ちよろちよろ流(ながれ)　小さき川
○寂(さ)びたる　ふるびたる
○狩衣(かりぎぬ)　昔の衣服。絹にて作り、形布衣に似て、領丸く、帶にて腹をしめ、さしぬきの袴をつけ、烏帽子を被る
○颯颯(さつさつ)　風の音の形容
○透蛇(ゐだ)　うねうねしたるさま
○あしらふ　取りそへて、體裁をつくらふ
○殿上人(てんじやうびと)　五位以上の昇殿を許されたる人
○蔦(つた)の細道(ほそみち)の圖(づ)　蔦の細道は、駿州安倍郡なる宇津山に在り。在原業平の事跡によりて稱せらる
○醮(ひた)して
○小徑(こみち)
○植込(うゑこみ)　庭園に草木をしげく植ゑたる處
○亭(ちん)　あづまや
○笠松(かさまつ)　松の枝の四方へ廣がり垂れて、笠の形をなせるもの
○眺望(てうばう)　ながめ
○立食(りつしよく)　西洋風の饗宴の一種。飲食物を卓上に供へおきて、衆客の來り食ふに任すること
○玉座(ぎよくざ)　天皇陛下の御座
○ふさはしき　相應したる

○西の國の人(にしのくにのひと)　西洋人
○陪觀(ばいくわん)　陛下に侍りてみること
○月卿雲客(げつけいうんかく)　月卿は、三大臣（太政大臣、右大臣、左大臣）大中納言をいひ、雲客は、四位五位の官人をいふ。されどこゝは、高位高官の人をいふ
○燦爛(さんらん)　光りかゞやく貌
○齡草(よはひぐさ)　菊の異名
○鬱蓊(うつおう)　木の茂れる貌
○莊嚴(さうごん)　いかめしく立派
○畔(ほとり)
○俤(おもかげ)
○渡月橋(とげつけう)　嵐山の麓を流るゝ大堰川に渡せる橋の名
○千古(せんこ)の苔(こけ)　苔の古きをいふ
○谿間(たにま)
○長閑(のどか)
○仙境(せんきやう)　俗界をはなれたる勝地
○一里塚(いちりづか)　昔、街道の一里毎に、土を高く積みて榎を植ゑ、目標として旅人に便したるもの
○人工(じんこう)　人手の細工
○憾(うら)むらくは　惜しいことには
○題(だい)する　かきつける
○容(かたち)
○態(さま)
○微塵(みぢん)　少し
○幽靜(いうせい)　しづかにして奥深きこと
○ベンチ　腰掛椅子
○反橋(そりはし)　弓の如くそれる橋
○楓林(ふうりん)の晩(ばん)を愛(あい)し　楓が夕日にうつりて、一層紅をますさまのよきをいふ
○塒(ねぐら)
○清興(せいきよう)　清きたのしみ

九　瀬戸内海(せとないかい)

○内海(ないかい)　瀬戸内海の略、外海即ち大海に對していふ

○山系(さんけい)　山脈。山のつながり

○劃す(くわく)　くぎる

○花崗岩(くわかうがん)　みかげ石

○麥浪(ばくらう)　麥の穗の畑一面に出揃ひたるが、風に靡くありさまを海の浪たつにたとへていふ

○島嶼(たうしよ)　島の大なるを島、小なるを嶼といふ

○蜿蜒(ゑんえん)　蛇のうねうねと行くさま、轉じて物の曲りくねれるにいふ

○聯絡(れんらく)　ひきつゞき間の絶えざること

○地下(ちか)の變遷(へんせん)　地震等をいふ

○罩(こ)むる

○一望(ばう)　一ながめ

○東南風(とうなんふう)の季節(きせつ)　夏の時候

○大觀(たいくわん)　大なる景色。立派なるながめ

○點綴(てんてい)　散在して、絲にて綴りたる如き貌

○連綿(れんめん)　物の長く連りて絶えざる貌

○海水(かいすゐ)の浸蝕(しんしよく)　海水が陸地を浸して次第に蟲が作物をくひへらす如く、缺きへらし行くをいふ

○陷落(かんらく)　おちこむ

○淡(あは)く　うすく

○漁屋(ぎよをく)　れふしの家

○細紋(さいもん)　さざなみ

○將(はた)　又

○化成(くわせい)　かへつくる

○島裡(たうり)　島の中

○隱見(いんけん)　見えつかくれつする貌。ほのかに見ゆる貌

○氷(こほり)の如(ごと)き月輪(げつりん)　氷の色の如くさえわたれる月

○秋氣(しうき)　秋の景色

○長空(ちやうくう)に連(つら)なり　空高く見えわたり

○風烟(ふうえん)　景色

○圍繞(ゐねう)　とりまく

○楓樹(ふうじゆ)　かへでの木。最もよくもみぢする木なり

○小豆島(せうどじま)

○宜(うべ)　尤も

○嚴冬(げんとう)　寒さきびしき冬

○激賞(げきしやう)　甚しくほめはやすこと

○溪谷(けいこく)に

○風趣(ふうしゆ)　おもむき。おもしろみ。風景

○絶勝(ぜつしよう)　すぐれたる景色

○島際(たうさい)　島ぎは

○風光(ふうくわう)　景色

一〇　道話(だうわ)一則(そく)

○婚禮振舞(こんれいぶるまひ)　御祝儀の御馳走

○下戸(げこ)　酒量の少なき人。上戸に對する語

○ひらに　なにとぞの意

○無理無體(むりむたい)　強ひてむりやり、

○町役(まちやく)　町家の役人

○亭主方(ていしゆかた)　御馳走する方の人

○きしむ　軋るに同じく、通るに滑かならざること

○美保谷(みほのや)

○笹(さゝ)の露(つゆ)　一滴の酒といふほどの意。ササ(笹)は酒の異名なり

○大(だい)りん　大つぶ

○撮(つか)み

○錏曳(しころび)き　錏はシコロなり。かぶとのうしろに垂れて、首筋をおほふもの

○金米糖(こんぺいたう)

○眞顔(まがほ)　まじめなかほ

○骨接ぎ（ほねつぎ）　○醒め（さ）　○五人組（にんぐみ）　徳川時代の制に、人家五戸づつ組合せて互に取締をなすこと　○手頃の石（てごろ）（いし）　己が力の程にかなひたる石　○御難澁（ごなんじふ）　おこまり　○しかつべらしく　容體ぶつて　○煙管（きせる）　○片意地（かたいぢ）　己が意地をかたく守りて、移さぬこと　○器量（きりやう）　物の用にたつべき才能。又轉じてみめ　○家柄（いへがら）　貴き家筋　○癪氣（しやくき）　しやくのやまひ　○紛らす（まぎ）

二　鼠の淨土（ねずみ）（じやうど）

○淨土（じやうど）　佛の居所といふ清淨の世界。極樂　○迷想（めいさう）　迷へるかんがへ　○稱呼（しようこ）　となへ　○排斥（はいせき）　おしのける　○壬子（みのとね）　○繁殖力（はんしよくりよく）　ふえるちから　○若水（わかみづ）　元日に汲む水をいふ。之れを飲めは其の年の邪氣を除くといふ　○嫗ば（おうな）　○四つ這（よ）（ばひ）　○壁代（かべしろ）　壁の代りにかけたる幔　○檀那（だんな）　梵語。施主　○大福長者（だいふくちやうじや）　おほがねもち　○闇黒（あん）（こく）　まつくら　○膝下（ひざもと）　○貧慾（とんよく）　慾深きこと。あき足ることを知らぬこと　○うづくまり居る（を）　しやがみて居る　○土鼠（もぐら）

三　眞田大助（さなだ）（だいすけ）

○譽田口（ほんだぐち）　○待詫び（まちわ）　待ちわづらひ　○參向（さんかう）　まゐること　○かまへて　心にかけて　○父御（ちちご）　他人の父の尊稱　○眼蓋（まぶた）　○礑と睨み（はた）（にら）　○未練（みれん）　思ひきりかぬること　○繰言（くりごと）　くりかへしいふこと　○少時（しばし）　○見參（けんさん）　面會の敬語　○暗涙（あんるゐ）　人しれぬなみだ　○郎黨（らうたう）　家來　○矢倉（やぐら）　昔時、城壁上に築きたるたかどの　○先途（せんど）　結局の處　○生害（しやうがい）　自殺。自害　○心許なく（こころもと）　氣がかり。心配　○太刀打（たちうち）　太刀を使用して戰ふこと　○和談（わだん）　和諧の相談　○いらへ　答へ　○殉ず（じゆん）　死したる人のあとを追ひて自殺すること

○天晴(あつぱれ)

一三　蘇武(そぶ)

○蘇武(そぶ)　支那漢の代の人なり。匈奴に使して忠節を枉げざりしを以て名あり
○颯颯(さつさつ)　秋風の枯葉を吹き落す音
○あきふけて　秋がおしつまつて
○おもき君命(くんめい)いたゞきて　大切なる君主の命令をうけたまはりて
○夷(えびす)　匈奴を指していふ
○故郷(こきやう)は、母あり、鴈鳴(かりな)きて、老(おい)の寝覺(ねざめ)やいかならん　故郷には年老いたる母がある。夜、雁の鳴き渡る聲に、母親が目を覺まして、どんなに寝覺惡しくせぬかと、胸をいたむるをいふ
○よしや　たとへ
○草枕(くさまくら)　旅の枕詞。旅には、昔山野に露宿することありしこと、之によりても知り得べし
○かうと　かくと
○つぶさに　ことこまかに
○面接(めんせつ)　まのあたりあふこと
○國書(こくしよ)　國王より他の國王へ遣す書面
○非道(ひだう)　道にはづれたる行ひ
○旨意(しい)　心がら
○單身(たんしん)　ひとり身

○しかあらば　さうすれば
○荒山(あらやま)　奥山
○幽閉(いうへい)　とぢこめる
○頃しも　丁度その時
○料(れう)　しろ
○放免(はうめん)　ゆるすこと
○無念(むねん)　殘念
○最中(もなか)　まつ盛り
○かくて在(あ)ることをと　この語の下に「故郷の人に知らせばや」との意を加へて解すべし
○忠節(ちうせつ)　忠義の眞心
○鴈(かり)の使(つかひ)　雁に手紙をことづけしより、手紙のことをいふ
○鴈(かり)に託(たく)せし筆(ふで)のあと　雁にことづけた手紙

一四　氷(こほり)の諏訪湖(すはこ)

○簇簇(ぞくぞく)　むらがる貌
○純白(じゆんぱく)　まつしろ
○細徑(さいけい)　こみち
○欅(けやき)
○絶壁(ぜつぺき)　きりぎし
○鍍金(メツキ)
○靜寂(せいじやく)　さびしき
○篝火(かがりび)
○點(てん)ずる　ともす
○鮒(ふな)
○客舎(かくしや)　はたごや
○叫喚(けふくわん)　わめき
○龜裂(きれつ)　ひび
○洶洶(きようきよう)　わきあがる貌
○奔騰(ほんとう)　はしりあがる
○零(こぼ)れる

一五　アルプ山越（上）

○故山　ふるさと
○戎衣　軍服
○征旗　軍旗
○滿目　みわたすかぎり
○鐵衣　よろひ
○難關　こんなんなる場所
○天嶮　天然のけはしき處
○横絶　横はること
○冒險　危險をおかすこと
○峻岳　けはしき山
○天を摩す　天をする。極めて高きをいふ
○そゝり立つ　聳え立つ
○劃す　くぎる
○仙鶴　仙人ののる鶴
○猿猴　さる
○暴鷲　あらわし
○擧　しわざ
○懸命　いのちがけ
○壯圖　さかんなるもくろみ
○懸軍萬里　萬里の遠き地に、深く兵をすゝむること
○遠征　遠き地方を征伐すること
○掌握　にぎる
○對岸　向ふ岸
○行路　みち
○雌雄　かちまけ
○趑趄　ためらふこと。しりごみすること
○逡巡　ためらふ。ぐづぐづすること
○莞爾　につこり
○堂堂　いかめしく立派なる貌
○意氣　こころぐみ
○概
○一崖　一つのがけ
○蠻民　野蠻の人民
○亂下　やたらに下す

○辟易　勢におさるること
○妙案　ふしぎなるはかりごと
○撤す　去る

一六　アルプ山越（中）

○暗澹　ものすごきこと
○深夜　まよなか
○皚皚　雪の白き貌
○蜿蜒　うねる貌
○轟轟　とゞろく音の形容
○天柱　天を支ふると想像よりいふ柱
○轉轉　ころころ
○地維　大地を維持するもの
○千仭　仭は八尺をいふ
○唐紅　うるはしき鮮紅の染色
○慘たる　いたましき貌
○光景　ありさま
○征路の露　遠征の途中に死することをいふ
○同胞　同一國民
○精靈　たましひ
○妄執　まよへる執念
○鏖
○猶豫　ためらふこと
○頑強　かたいぢ
○險難　けはしくなんぎ
○快哉　氣もちよきこと
○瞰下　みおろす

一七 アルプ山越(さんごえ)(下)

○士氣(しき) 兵士の意氣込み ○都門(ともん) みやこ ○城下の盟(じやうかのちかひ) 敵國の首府に攻入りて、降伏のちかひをなさしむること

○贔屓(ひいき) ○咆哮(はうかう) たけりくるふ ○萬事休す(ばんじきうす) すべてのことがとゞまる ○斷崖(だんがい) きりぎし ○悲壯(ひさう)

悲みて心のふるひおこること ○難境(なんきやう) 困難なる場所 ○慘憺(さんたん) いたましきこと ○壯擧(さうきよ) さかんなるしわざ ○餓鬼(がき)

うゑたる鬼 ○突如(とつぢよ) だしぬけなる貌 ○河頭(かとう) 河のほとり ○着着(ちやくちやく) すすみ捗るさま

一八 學藝(がくげい)に志(こゝろざ)すものの誡(いましめ)

○終日(しうじつ) 一日中 ○奧義(おうぎ) おくの手 ○乃至(ないし) 上下の數を擧げて中を略するに用ふる語 ○匡山(きやうざん) ○本朝(ほんてう)

我が國 ○能書(のうしよ) てかき ○躊躇(ちうちよ) ためらふ ○三思(さんし) 幾度となく考ふること

一九 辛抱(しんぼう)くらべ

○肝腎(かんじん) ○百事(ひやくじ) すべての事 ○較べ(くらべ) ○偉人(ゐじん) すぐれたる人 ○南北戰爭(なんぼくせんさう) 米國にて奴隷廢止を不可とせる南部十州が、北部諸州に分立して獨立聯合を結び、遂に戰を開くに至りしものにて、一八六〇年に始まり一八六五年終る ○豪の者(がうのもの) すぐれてつよきもの

○自敍傳(じじよでん) 自分にてのべたる自分の傳 ○繙いて(ひもといて) ○初陣(うひぢん) はじめて戰に臨むこと ○旌旗(せいき) はた ○正(せい)

正堂堂(せいだうだう) 勢の盛んなる貌 ○慄然(りつぜん) ふるひおそるる貌 ○接近(せつきん) ちかよる ○依然(いぜん) もとのまゝなる貌 ○恐(きよう)

怖(ふ) おそれ ○渾身(こんしん) 全身に同じ ○偶然(ぐうぜん) 思ひもよらぬこと ○怖氣(おぢけ) ○浮足(うきあし) にげあし ○諧(かい)

謔(ぎやく) おどけ ○腹藏なく(ふくざうなく) はらのうちにかくしおくことなく ○千軍萬馬(せんぐんばんば) 多くの戰士と多くの戰馬 ○畢竟(ひつきやう)

つまり ○極意(ごくい) おくの手 ○祕訣(ひけつ) おくのて

二〇　鬼作左（上）

○鬼作左衛門　作左衛門は重次の通稱。鬼といふは、其性質の勇猛なると、面貌の荒く逞ましきとを形容していへる也　○小牧に陣し給ふ　小牧は小牧山を指す。即ち小牧の陣　○蟹江の城　尾張國海東郡に在り　○信雄に就いて　信雄を仲立として　○於義丸殿　家康の第二子。徳川秀康の幼名。秀忠の庶兄なり　○故　事情　○うへ　うはべにおなじ。世間態　○譜代のおとな　代々其の家に仕ふる臣の一人前の人間　○上洛　都へ上ること　○三河守殿　秀康　○風聞　うはさ　○三河守殿の御母　長勝院永見氏をいふ。名は菊子、萬の方と稱す。家康の侍女にして、秀康の母なり　○不便　かはゆさう　○いたはり　病氣　○二心　思ふ心の二樣なること。君子の義、男女の情などにいふ

二一　鬼作左（下）

○妹君　朝日の姫君。秀吉の異父妹。初め佐治日向に嫁し、後家康に再嫁し、南明院と稱す　○北の方　貴人の妻を呼ぶに用ふ　○大政所　攝關の母の尊稱。こゝには關白秀吉の母を指す　○下知　命令。指圖　○女房　禁中に宮仕へする女の稱　貴族にても侍女にいふ　○はした女　下女。下婢　○心能くとりて　機嫌をとつて　○都上﨟　美しき都の貴婦人の意　○無慙　こゝにては慘酷なることにいふ　○承りなんず　承りなんとす。承りませう　○殿下　昔より定まれる條文もなく、たゞ貴人に對して用ひたり　○三奉行　高力清長、天野康景、本多重次　○物越し　物をぢかに見ずして、間に簾、障子などをへだつるをいふ　○御沙汰　御しらせ、御申出で　○消息　進退。來往等の意　○いぶせさ　氣のふさぐこと　○家人　家來　○御座　すはらせたる席をいふ

二二　水の力

○轟(とゞろ)に　○たぎり落(お)つる　わき上がっておちる　○絶壁(ぜつぺき)　きりぎし　○山靈(さんれい)　山の神　○惜(をし)めど　○積礫(せきれき)　こいし。いしころ　○磐石(ばんじやく)　大なるいは　○くやす　崩しおとす。こはす　○吶喊(とつかん)　○怒號(どがう)　波のはげしく音すること

二三　水岩(みづいは)を造(つく)る

○劇烈(げきれつ)　はげしく、にはかなること　○徐徐(じよじよ)　極めてゆるやかなること　○堆積(たいせき)　うづたかくつもること　○夥(おびただ)し　○粗(あら)い　○沙粒(さりふ)　すなつぶ　○壓力(あつりよく)　おさへる力　○堅牢(けんらう)　かたく丈夫なること　○昇降(しやうかう)　のぼりくだり　○漸漸(ぜんぜん)　次第次第　○往往(わうわう)　まま　○單位(たんゐ)　基本となる位。基點　○微細(びさい)　こまかなること　○硅酸(けいさん)　硅素と酸素と水との化合物。硝子、磁器の製造に用ふ　○鮫石(さめいし)

二四　森林(しんりん)の功用(こうよう)

○吾人(ごじん)　われら。われ〳〵　○諸造作(しよざうさく)　もと、天井、床の間、戸棚等をつくるをいひしが、今は疊、建具等をもいふ　○纖維(せんゐ)　すぢ　○書齋(しよさい)　勉強する室　○埋沒(まいぼつ)　うもれかくれる　○調理(てうり)　料理　○森林に負(お)ふ所(ところ)　森林の爲めに利益を受くること　○清淨(せいじやう)　きよらか　○放散(はうさん)　ちらす　○緩和(くわんわ)　やはらぐる　○養成(やうせい)　養ひそだつる　○徐徐(ちよちよ)　しづかなる貌　○伐仆(きりたふ)す　○一朝(てう)　一旦　○策(さく)　はかりごと　○講(かう)す　はかる　○缺乏(けつぼふ)　不足　○濫伐(らんばつ)　みだりに伐る　○點點滴滴(てんてんてきてき)　ぽたぽたと地におつる貌　○谿流(けいりう)　たにがは　○氾濫(はんらん)　流れあふれる　○禿山(はげやま)　○奔下(ほんか)　はしり下る　○災害(さいがい)　わざはひ

二五　公子(こうし)の躾方(しつけかた)を申(まを)し遣(つか)はす

○餘寒　寒あけて後の寒さ　○障りなし　無事なること　○一段の事　一層よろこばしきこと　○未明　あけがた　○薄著　○もつての外　おもひのほか　○成長　大きくなること　○公家　公卿　○町人　商家をいふ　○出家　僧　○文武　學問武術　○柔弱　氣のよわきこと　○外聞　よそのきこえ　○勝る　○表の附きの者　おもてむきにつきそひて、もりをするもの　○稽古　○竹刀打　竹刀にて打ち爭ふこと　○如才なく　ぬけめなく　○序にまかせ　ついでによつて　○毎朝の水　冷水浴を公子達に勵行せしむる水戸家の教育思ひやるべき也　○さるかはり　そのかはり

二六　運命（上）

○運命　運といふに同じ。天命のまはり合せ　○左右す　とやかくする。動かす　○暗暗裡の出來事　暗々裡は、暗

裏を強めたるにて、不明のうちの意。裏は内なり。すべて、吾人の目に入らず、耳に入らず、其の表面にあらはれず、結果を生ぜざるが爲めに、知らずして過ぐるものを指す　○無邊　かぎりなきこと　○ダビッド　假托の名　○既往　過ぎ去れる方　○ボストン府　米國マサチウセッツ州の首府　○手代　手がはりの者　○渠　○教育　をしへ育つること　○疲勞　つかれ　○決意　決心に同じ　○鬱葱　樹木の盛んに茂れる貌　○喬木　高く直立する木。灌木に對す　○絶好　極めてよきこと　○褥　○沸沸　水の湧く貌　○微搖　かすかにゆれる　○恍惚　うつとり　○うまい　旨寢。熟睡すること　○點點　ちらばり在る貌　○傍目　○寓目　目をつけて見ること　○無邪氣　心にわだかまりのなきこと　○非難、稱美、一讃、一譏　非難は、缺點過誤などをそしること。稱美はたゝへうらやむ。一讃は一たびほめ、一譏はそしること。樣々の批評の、ダビットの上にかかれるを、かくつらねいへり　○輌　車を數ふる語　○輕車　輕き車。走りのよき車　○轔轔　車の音　○突然　だしぬけ。うちつけ　○轄　○ためつ眇めつ　とみかうみること。物をいろ〳〵の方向より、つく〴〵と見る貌

○凝視(ぎようし) みつめる ○低語(ていご) 聲をひそめて語ること ○容與(ようよ) ゆつたりとしたる貌 ○所行(しよぎやう) おこなひ ○邂逅(かいこう) 不意の出合ひ ○面(おも)ざし かほつき。顔だち。面相 ○肖(に)たる ○素性(すじやう) 身分の系統

二七 運命(うんめい)(下)

○莫大(ばくだい) 大なること、此上莫(ナ)しといふ義 ○巨萬(きよまん) 大數をいふ ○想像(さうぞう) 心におもひかたどること ○忽焉(こつえん) 速かなる ○鴝鴝然(くくぜん) いびきの聲 ○頭巾(づきん) ○粗野(そや) 粗末にして、禮文なきこと ○汚點(しみ) ○徘徊(はいくわい) 進まざる貌。たちもどほること ○山賊(やまだち) ○贓物(ざうもつ) 盜品のかくせるもの ○匕首(ひしゆ) あいくち ○惡魔(あくま) 善事に障碍をなす鬼類 ○ブランデー 火酒。葡萄酒を蒸溜して得たるもの ○迭(かた)み 五 ○黎面(れいめん) 黒きかほ ○興(きやう)じ なぐさみ ○醫(い)す いやす ○半殘(なかば)の夢(こんゆめ)を語(かた)れり ダビッドのなほ半醒半夢の間に在りて、口の中にて、無意識に何かささやきつゝあるをいふ ○殷殷(いんいん) 音の盛んなる貌 ○轟轟(くわうくわう) はげしき車の響 ○轢轆(れきろく) 車の聲 ○尺寸(せきすん) 僅少の義 ○上層(じやうそう)に席(せき)あり 御者の答。西洋の乘合馬車は、皆二層になり居りて、上層は、車の屋根の上にあり ○前途(ぜんと) ゆくさき ○顧眄(こへん) ふりかへりてみること ○照射(せうしや) てらしつける ○生涯(しやうがい)

雜詩

陶淵明

人生無二根蔕一、飄如二陌上塵一、分散逐レ風轉、
此已非二常身一、落レ地爲二兄弟一、何必骨肉親、
得レ歡當レ作レ樂、斗酒聚二比鄰一、盛年不二重來一
一日難二再長一、及レ時當二勉勵一、歲月不レ待レ人

新撰國語讀本詳解　卷四終

新撰國語讀本詳解　卷五

一　春の曲

○濃染（こぞめ）　色を濃く染むること

○かすみの幕（まく）　春の霞の、天地を籠めてたな引けるを、幕を引きまはせるに譬へていふ

○花（はな）と花とをぬふ絲（いと）は云々　花の咲き亂れたる中に、青の新枝の交りたるを形容していふなり。柳の新枝は細長き故、柳の絲といふより花と花とを縫ふ絲といへるなり。この節、濃染、幕、ぬふ、絲等すべて布の縁語を用ひたり

○春（はる）の臺（うてな）　臺は、屋根なき高殿にして、四方を見晴すべき所なるが、こゝは春を人間に譬へて、春は霞を幕とし、花の蔭を臺とせる意をいへるなり

○羽袖（はそで）　蝶の羽根を人の袖にたとへていへるなり。夢舞ふ、醉ふ、羽袖等すべて蝶の縁語を以ていへり

○綠（みどり）のはね　鶯の羽根は、綠色なればかくいへり

○梅（うめ）の花笠（はながさ）　古今集の歌。青柳をかたいとによりて鶯のぬふてふ笠は梅の花笠

○しらべ　調子

二　月雪花

○煌煌 光明の貌　○玲瓏 麗はしく輝く貌　○峻烈 きびしくはげしきこと　○赫赫 きらめく貌　○羣陰皆影を伏して すべての暗き處が、明るくなること　○有象有象 象は現象の意。世に現象となつて現はるゝもの、多くは形あり、色あり、香あり、これ即ち有象のものなり。此の形、色、香味を具へざるは無象なり　○萬象 萬物に同じ　○慰安 なぐさめ　○炎熱 あつさ　○皎潔 きよきこと。潔白なること　○崇美 美をあがめる　○慰藉 なぐさめたすくること　○詩的情緒 現實をはなれて感想に入るおもひ　○油然 ものゝわく貌　○胷懷 こゝろ　○ちぢの思ひ さまざまのおもひ　○嗟歎 感じなげく　○吟咏 詩歌をつくりよむこと　○衞星 遊星の周圍を回轉しつゝ、其遊星と共に太陽をめぐるもの　○冷塊 つめたきかたまり　○古往今來 古より今まで　○乾坤 天地　○三千世界 俗語。三千大世界の略あらゆる世界をいふ　○十二樓臺 崑崙の仙宮に在りといふ　○廣寒宮 月の都　○霏霏 雪のふる貌

○紛紛 みだるる貌　○一條 ひとすぢ　○瓊玉 たま　○莊嚴 うるはしくおごそか　○冬枯 冬、山野の草木枯れつくして、みわたすかぎり荒涼たる有樣をいふ　○對照 てらしあはせ　○蓮の花の開いて居る極樂淨土 極樂淨土は、西方十萬億土を經過したる處に在りて、阿彌陀佛の居所といふ世界なり。蓮華を以て世界となし、諸事具足圓滿にして、安樂ならずといふことなし　○百花爛漫 種々の花の咲き亂れたるをいふ　○詩趣 詩にのべあらはすべきおもむき　○寂寞 さびしみ　○閑寂 ものしづかにしてさびしきこと　○棺槨 ひつぎ　○供養 死人の靈、又佛にものなど供へて回向すること　○豔麗華美 つや／＼しくはでやかにして、うるはしきこと　○山櫻の歌 一首の大意は、山櫻の落花の地を覆へるを、風吹きて、高き處は地面あらはれ、低き處は落花に埋み、一樹一樹の下は、さながら雪の村消えを見るが如しとの意　○雪のむらぎえ 雪の消えてあちこちに殘れる如く落花の木の下に散亂せるをいふ　○吳山 下の楚地と共に、支那の地名　○檐頭 のきさき　○不夜城 夜も晝の如く明かなる城の義燈燭の光晝を欺く如き繁華の市街をいふ　○感興 おもしろみ　○追慕 あとをしたふ

三　誠

○妄語（まうご）　うそをいふこと　○虚言（きよげん）　うそ　○夫人（ふじん）　貴人の妻　○闕下（けつか）　宮門の下　○蘧伯玉（きよはくぎよく）

○下ニ公門ニ式ニ路馬ー（こうもんにくだりろばにしきす）　禮記にあり。公門は君門なり。君の門前を馬車にて通るは無禮なり、故に馬車を下りて歩行するなり。路は大なり。路馬は君の馬車を尊敬していふ。式とは車上にての敬禮也　○昭昭（せうせう）　明るき貌　○信べず（の）　○冥冥（めいめい）　くらき貌　○帚灑（さうさい）　はきさうぢ　○蜘蛛のい（くものい）　くものいと　○見まがふ（み）　みちがへる　○文る（かざ）　○なき名ぞとの歌（な）　實事のなき評判であると、人にむかつてはいひつくろつても、それでもすむのであらうしかし自分の心がきいたならば何とこたへようか、じつに何ともいひわけのないことであるとの意

○額（ひたひ）　○起請（きしやう）　誓約のことをしたためたる證書　○いみじく　いちじるしく

四　三種の神器（しゆ、じんき）

○高皇産靈尊（たかみむすびのみこと）　○八百萬の神（やほよろづのかみ）　おほくの神神　○諸神の上首（しよしん、じやうしゆ）　諸神を率ゐて仕へ奉るべき重立ちたる神神

○五部の神（ぶ、かみ）　五つの群神を統領する神といふ義　○天鈿女命（あまのうづめのみこと）　○石凝姥命（いしこりどめのみこと）　○むねと　宗と。むねは、主要、本體の意　○就而（ゆきて）　○寶祚（ほうそ）　天皇の位　○隆（さかん）　○天壤（てんちやう）　天地　○寶鏡（ほうきやう）　八咫鏡なり

○齋鏡（さいきやう）　齋き祭る御鏡といふ義にて、大御神の御神體とするをいふ　○曲妙（きよくめう）　行渡らぬ所あることなく、和かに穩かに妙なるをいふ　○まつろはざるもの　從はぬもの　○萬象（ばんしやう）　萬物に同じ　○感應（かんおう）　變化自在に相應ずること　○剛利（がうり）　剛健にして、さときこと　○約か（つゞまやか）　○剰へ（あまつさへ）　○宗廟（そうべう）　伊勢大神宮

五　人臣の道（じんしん、みち）

○王土（わうど）　帝王の領地　○きほひ　きそひ　○前車の轍云々（ぜんしや、てつ）　前人の過ちを見て、わが身はこれを再びせざる様心が

くるは、世に難きことと見ゆとなり。　○さのみ　これほど　○豪強　甚だつよきこと　○制符　禁止の法令　○宣旨　おほせ。みことのり　○かたらはるるやから　語らひ坂らるゝ族の意にて、武人の家人となりたるものをいふ　○家の子　武門の庶子、及び分家、一族等をいふ　○郎従　家來　○樞機　樞は戸樞にて、戸のくるゝ。機は物の動くもとゝなるところ　○堅き冰は霜を履むよりいたる習　易經に「履霜堅氷至。」とあるより出でたる語　霜堅き氷は、急にかくなりいづるにあらず、霜を踏むと思ひし頃より形ち造らるゝものなりとの意　○亂臣・賊子　國家を亂し、君父を賊ふ者　○末世　すゑの世

六　源實朝の歌

○朝け　あさあけ。夜あけをいふ　○とどろに　とどろくほどに　○山は裂け、海はあせなむ世　甚だしき天變地異をいふ　○矢なみつくらふ　脊に負ひたる衣服のやならびをなほす

七　浮島原の對面

○浮島原　駿河國駿東郡愛鷹山の裾なる須戸沼附近の原野　○見參　人の前に參りて對面すること　○御曹司　未だ家督に居らぬ部屋住みの人をいふ　○頭の殿　○配所　流されたる場所　○伊東、北條　伊藤祐親北條時政　○八箇國　相模、武藏、安房、上總、下總、常陸、上野、下野　○東國　京畿の東の諸國の總稱　○御邊　同輩に用ふる對稱の代名詞　○魚と水との如し　魚は水ありて生き、一時も水を缺くべからず。即ち親密にして大に親しむべきにいふ　○大名小名　德川時代に、一萬石以上の封土あるを大名といひ一萬石以下なるを小名といへり　○山科　山城國宇治郡の北部に在り　○方便をつくる　手だてをめぐらす

八　うれしさ

○狗　○辛し　○浴み　○念じ　ねがひ　○むくつけき人　そひよりわるき人　○自ら

克（か）つ　己れの私心にかつ
○一顆（くわ）　ひとつぶ

九 巨船（きよせん）の沈沒（ちんぼつ）

○巨船（きよせん）　大なる船
○柩（ひつぎ）　死者のかばねを入れて葬むる匣
○悲慘（ひさん）　あはれなること
○一葉（えふ）　小舟のこと
○扁（へん）舟（しう）　小舟
○蒼波渺茫（さうはべうばう）　青き波のかぎりなく廣き貌
○痕跡（こんせき）　あと
○生靈（せいれい）　人民
○忽如（こつちよ）　たちまち
○飛電（ひでん）　到來せる電報
○霹靂（へきれき）　いかづち
○宸襟（しんきん）　天皇の御心
○内帑（ないど）　君主の所持せらるる財貨
○慰（ゐ）撫（ぶ）　いたはる
○首相（しゆしやう）　總理大臣
○沈痛（ちんつう）　いふことなすことの急所にあたりて、適切なること
○語調（ごてう）　言葉の調子
○精華（せいくわ）　きつする
○肅然（しゆくぜん）　つゝしむ貌
○排水噸數（はいすゐとんすう）　艦船の排水量を噸數に見積りたるもの
○幅員（ふくゐん）　はゞ
○收容（しうよう）　一定の場所にとりをさめること
○船員（せんゐん）　船に乘組める人
○華美（くわび）　はなやか
○艶麗（えんれい）　つや／＼しくうるはしきこと

○瀟洒（せうしや）　こざつぱり
○豪奢（がうしや）　甚しきおごり
○佳麗（かれい）　うるはしきこと
○瞠若（だうじやく）　おどろきて目を見はる貌
○發動機（はつどうき）　物をうごかす機械
○裝置（さうち）　しかけ
○嚴然（げんぜん）　いかめしき貌
○雄姿（ゆうし）　勇しきすがた
○歡呼（くわんこ）の聲（こゑ）　よろこびさけぶ聲
○威風堂堂（ゐふうだうだう）　威光ある貌。いかめしき貌
○處女航海（しよぢよかうかい）　初めての航海
○熟知（じゆくち）　よく知る
○捷徑（せうけい）　ちかみち
○慘劇（さんげき）　いたましきこと
○遭難（さうなん）　困難に出逢ふ
○吹鳴（すゐめい）　ふきならす
○犧（ぎ）牲（せい）　或る目的のために投げ出して用ふる物事

一〇 文（もん）字（じ）

○篆書（てんしよ）
○奇古（きこ）　めづらしく古きこと
○凩（こがらし）・凪（なぎ）・躾（しつけ）・軈（やがて）
○抔（など）・桙（ほこ）・詫（わび）・溶（とかす）
○吋（インチ）、糎（センチメートル）、瓩（キログラム）、
○簡易（かんい）　てがる
○看經（かんきん）
○輸入（ゆによ）　正しくはシュニフと訓ず。外國より

内國に物品をおくり込むこと　○判定（はんてい）　判斷して定める　○訛（なま）つて　○訓讀（くんどく）　漢字に日本語をあててよむこと　○流石（さすが）に　○五月蠅（うるさ）し

二一　俳句評釋（はいくひやうしやく）

○解說（かいせつ）　ときあかし　○羣集（ぐんしふ）　ひとのあつまり　○譬喩（ひゆ）　たとへ　○輕妙（けいめう）　かろらかにして妙なること　○模（も）倣（はう）　まねる　○斬新（ざんしん）　きはだちて新奇なること。斬は其の新なる形容なり　○根芹（ねぜり）　根を食用とする芹　○擬人（ぎじん）　情なきものを人類の如くいひならすこと　○獨擅（ひとりぶたい）　獨占の壇の義　○格調（かくてう）　詩歌の字句の組織又は調子　○菊（きく）の香（か）やの句　菊の色を見ずして、香のみを賞したるなり

二二　十國峠（こくたうげ）の眺望（てうばう）

○登臨（とうりん）　高き處に登りて、見わたすこと　○函嶺（かんれい）　函根山　○小餘綾（こゆるぎ）　○遠巒（ゑんらん）　遠き山　○類（たぐ）ふべき　たぐひする　○天津少女（あまつをとめ）　天人　○膚寸（ふすん）　わづかの大さ　○驀然（ばくぜん）　まつしぐら　○劍拔萬丈（けんばつばんちやう）　山の峯のそぎたる如く高くそびゆること　○濛濛（もうもう）　もやもや　○咫尺（しせき）　咫は八寸、尺は一尺。最も近きをいふ　○衣襟（えきん）　きもののえり　○凝視（ぎようし）　みつめる　○嘲風（てうふう）　姉崎正治氏の號。東京帝國大學文科大學教授、文學博士にして樗牛を友とし善し　○崔嵬（さいくわい）　山のそばだつ貌　○芙岳（ふがく）　富士山　○涕涙（ているゐ）　なみだ

二三　阿新殿（くまわかどの）の事（こと）（上）

○一途（いちづ）　一すぢ　○下知（げぢ）　命令。指圖。　○囚人（めしうど）　○存（なが）らふ　○思（おも）ひわびて　思ひつめて

○中間(ちうげん)　侍と小者との間に使はるゝもの　○かうと　「かくと」の音便　○館(やかた)　貴人の邸宅　○持佛堂(ぢぶつだう)　祖先の位牌をおく所　○よみ路(ぢ)　冥途　○東(あづま)氏　北條氏　○鄙(ひな)の住居(すまひ)　田舍のすまひ　○禁牢(きんらう)　牢にとぢこもること　○辭世(じせい)　死にぎはにのこす詩歌等　○うたてしき事(こと)　あまりなること。いとはしきこと　○氣色(きしよく)　かほいろ　○顯密(けんみつ)　顯教と秘教と　○頌(しよう)　盛德をのべる詞　○五蘊(うん)　佛教の語。人身をいふ　○四大(だい)　佛教の語。四大種の略。四大元素即ち地、水、火、風をいふ　○將レ首(くびをもつて)　○截斷(せつだん)　たちきる　○閣(お)き　○法談(はふだん)　佛教のはなし

一四　阿新殿(くまわかどの)の事(こと)(下)

○奧(おく)の院(ゐん)　本堂より奥に、佛など安置しある所　○勞(いたは)ること　○鬱憤(うつぷん)　つもりつもりたるうらみ　○宿直(とのゐ)　○郎等(らうどう)　家來　○遠侍(とほざむらひ)　昔、武家の邸内の中門のきはに設けたる番侍の詰所　○憑(たの)み　○明障子(あかりしやうじ)　今の普通の障子を

いふ　○究竟(くつきやう)　極めて勝れたる意。又、つまるところ　○胷元(むなもと)　○番衆共(ばんしうども)　番人共　○松明(たいまつ)　○素意(そい)　もとよりの心　○呉竹(くれたけ)　竹の一種。葉細くして節多し　○陸(くが)　○擁護(えうご)　まもり　○かはゆき目(め)　いとはしきめ　○たゆむ　ゆるみつかれる　○便船(びんせん)　幸便の船　○澳(おき)　○順風(じゆんぷう)　おひかぜ　○篷(とま)　○勤行(ごんぎやう)　つとめ　○肝膽(かんたん)　きも。こゝろ　○御房(ごばう)　○屋形(やかた)　舟の上に屋根あるもの

一五　寺門政次郎(てらかどせいじらう)に答(こた)ふ

○貴翰(きかん)　御手紙　○眷顧(けんこ)　ひいき　○汗顏(かんがん)　はづかしきことにいふ　○貴答(きたふ)　御こたへ　○幽厄(いうやく)　謹慎を命ぜられたるさい難　○一書(しよ)を裁(さい)し　一通の手紙をさし出し　○境界(きやうがい)　境遇。此の世に在る身分の程合　○太白(たいはく)を傾(かたむ)く　酒をのむをいふ。太白は杯のこと　○閑隙(かんげき)　すき。ひま　○嶄然頭角(ざんぜんとうかく)　頭を高くそびやかすことにて幼少にして衆人にすぐるゝを

いふ　○宛然　恰も、さながら　○研精　勉强　○寥寥　稀少なる貌　○棄人　天の棄つる所の人　○籍戸籍。姓名錄　○君臣　君臣の關係をいふ　○至情　まごころ　○不レ岐　○不レ殊　別でない　○文弱　徒に文事のみに耽りて、尙武の風の衰へて惰弱なること　○白面の書生　血の氣なく、顏色の青白き柔弱の學生　○毛唐人　西洋人のこと　○尙武　武をたつとぶこと　○頒白　頭の黒白相半ばすること　○明倫　人たる道を明かにすること　○妙齡　年わか　○眼光紙背に透る　書を讀むにたゞ文字の上のみを見ず、共の中に含蓄せる高等精神をみぬくと　○兵機　戰爭の機會　○文辭　詩歌文章　○勘考　かんがへ　○慶元　慶長、元和　○名分　名によりてあらはされたる人倫上の分際　○東都を張り立て　東都即ち江戸なる徳川幕府を押立つるをいふ　○和唐人　日本の支那人。日本に住む丈けありて、其の思想は支那人なるをいふ　○切磋　切りみがくにて、智識道德をねりみがくことをいふ　○閣筆　筆をさしおきて筆をおさめること

一六　讀書の選擇

○さらぬ　つまらぬ　○涉獵　あれもこれもあさりよむこと　○徒費　むだづかひ　○覓むる　○煥發　明かに發する　○神餒ゑ　精神がうゑる　○氣阻みて　氣疲れて　○頽然　すたれて振はざる貌　○生氣　物のそだついきほひ　○秀麗　すぐれて美しきこと　○偉大　すぐれて大なること　○審美　美の思索をいふ　○靈光　ふしぎなる光　○庶幾はくは　どうぞして　○大作　大文章　○親炙　親しみ近づくこと　○警醒　さますこと　○啓發　敎導して其のくらきをひらくこと　○斬新　きはだちてめあたらしき　○涵養　いれそだつること　○急務　主としてなすべき務　○源語　源氏物語の略語　○偏狹　せまくるしい　○固陋　かたくなにして、見識のせばきこと　○反故　○淘汰　のぞき去ること　○賭して　かけて。費して　○虛名　其の實なき名　○博す　英名をとること　○蟻集　蟻の甘きにつく如くに、集まること　○散佚　ちりばふ　○癡　おろか　○玩味

いろ／＼と味ふこと ○嗜好（しかう） たしなみこのむ ○範圍（はんゐ） かこひ。かぎり ○敷演（ふえん） しきのばす ○推敲（すゐかう） 詩句をねること ○沒趣味（ぼつしゆみ） 趣味なきをいふ ○時弊（じへい） 當時の弊害 ○最好手段（さいかうしゆだん） もつともよきしかた

一七　馬琴日記鈔（ばきんにつきせう）

○著述（ちよじゆつ） 書物を著はしのぶること ○就寐（しうび） 床につくこと ○八犬傳（けんでん） 南總里見八犬傳の略稱。百〇六卷 ○慘憺（さんたん） 心をいため動かす ○經營（けいえい） もくろみいとなむ ○浩瀚（かうかん） 廣大なる貌 ○午睡（ごすゐ） ひるね ○矮屋（わいをく） せまき家 ○陋居（ろうきよ） いやしきすまひ ○砌（みぎり） 時折。 ○六つ時（とき） 今の午前六時 ○五つ時（いつとき） 今の午后八時 ○四つ時（とき） 今の午后十時 ○一向（かう） ひたぶる。ひとむき ○手簡（しゆかん） てがみ ○戲作者（げさくしや） 小說家 ○伍（ご）せず 仲間ず入りせ ○古哲（こてつ） 古への、理に通じ智明らかなる人 ○三昧（まい） 心を一事に集注して動かさず、心機を靜肅にして亂さゞること

○愜（かな）へり ○敗家（はいか） 家をつぶすこと

一八　德川家康遺訓（とくがはいへやすゐくん）

○困窮（こんきう） くるしみ窮すること ○勘忍（かんにん）は無事（ぶじ）長久（ちやうきう）の基（もとゐ） 事の中途にて破るゝは、堪忍の德の足らざるをいふ ○怒（いかり）は敵（てき）と思（おも）へ 短氣は損氣といふが如し

一九　佐渡（さど）が島（しま）

○渺渺（べうべう） 水の極めて廣き貌 ○雲（くも）に一鳥（てう）を帶（お）びす 空に雲のみありて、翔くる鳥なきをいふ ○千萬頃（せんまんけい） 非常に廣き田地。頃とは、支那古代の制にて、四畝をいふ ○浩蕩（かうたう） 廣大の貌 ○瑠璃（るり） 七寶の一にて紺色なるもの ○煙（けむ）る うすく煙の如

く見ゆること ○此の美人を天の一方に望んだ 佐渡が島を己の慕ふ美人として、文をあやなしたるなり ○温

泉水滑洗凝脂 凝脂はかたまりたるあぶらをいふ ○風情 ありさま。けしき ○況へん

○鹽たれ唄 海人などの、袖を潮水に濡らしつゝ歌ふによりて、この名あるならんか ○恍惚 うつとりしたる貌 ○雄渾 雄大にし

てかどなきこと ○秀麗 すぐれて美麗なること ○薩埵峠 ○髣髴 さも似たるさま ○皮相 表がは。うはべ

○氣魄 氣力 ○突兀 高くそびえたる貌 ○蹲る しやがむ ○崖と壅がり とは「となりて」

の意 ○佛に逢へば云云 道に當りて、其の進行の害となるものは、快力を以て物を斫る如く、必ず之れを除きてまつしぐらに進むをいふ

○長汀逶迤 長きなぎさのながくうねる貌 ○五月蠅なす 蠅の如く群りてうるさく騷ぐこと ○大剛の者

大勇士 ○撫斬 切ることの容易なるをいふ ○逃るゝ路も荒磯の 逃るゝ道もあらぬを荒磯といひかけて、句をなせり

○鞺鞳 浪の音 ○峨峨 山のかど／＼しくそびゆる貌

二〇 思ひ出

○はゆま路 宿場の路。はゆまは早馬の約 ○轍 ○難波あきうど 大阪商人 ○欠伸 ○後へ ○せゝらぎ 小さきながれ ○咽び ○まろうど 稀人。客をいふ ○とことは とこしへ。永久。

二一 揚子江溯航

○溯航 川をさかのぼり航すること ○歸航 船にてかへること ○小閑 少しのひま ○略報 あらましをしらせること ○極目 みわたすかぎり ○一霎後 しばしの後 ○精鋭 よきことにいふ ○仔細 様子

○叢生 むらがり生える ○高粱 たかきび ○民舍 人民の家 ○撈る ○河童 ○指顧

の閒指さし顧みる間。 間近きをいふ ○應接 あひしらひ ○渺渺 ひろびろとして、はてなき貌 ○沙禽なす

どり ○虚構 いつはり ○霏霏 細雨のふる貌 ○夢寐 ねむること ○模糊の裡 ぼんやりとせる間

○閑を消す ひまつぶし ○肯綮に中る 肯は骨に着く肉。綮は物の結び目。肝要なる箇所に適中せる意 ○縦令

○洪濤 おほなみ ○滾滾 水の流るる貌 ○小渦 小さきうづ ○雄鎮 おもきしづめ ○誘引 さそ

ひ ○氾濫 みなぎりあふれる ○横流 順序に依らず流るゝこと ○淼茫 大水のひろくたたへたる貌 ○驅使

おひつかふ ○狗兒 いぬころ ○隨處 いたるところ ○爽快 さはやか

三 禁庭の野分(皇太后陛下御作)

○禁庭 宮中の御庭 ○野分 野草をふきわくる風をいふ。秋冬の際に吹く疾風 ○さしもなかりし さ程にもはげ

しくなかりし ○かきくらし くらくする意。「かき」は接頭語 ○ほとり近く あたり近く ○鳴りは

ためき はたと鳴る意。雷の殷殷と鳴るをいふ ○手枕 腕を枕とすること。てまくら。假寢のありさまなどにいふ ○をやみ

やむといふにおなじ。「を」は接頭語なり ○ゆるぐばかり ゆるぐはゆらゆらと動くこと。ばかりはほどの意 ○上 至尊を申す語

○遠き境 當時、陛下には東北地方へ御巡幸中なりければ、かくのたまふなり ○行宮 行在所。天子の京の外にまします時の居處をいふ

○皇太后の宮 皇后にて次の天皇の母となり給ひし御方の尊稱。こゝは故英照皇太后を指し奉るなり ○おろし籠めたる

暴風のために、宮中の戸、簾などを垂れて籠り居たまふさまをいふ ○ものむづかし 鬱陶しきさま ○御階 宮殿のきざはし

○筒井 圓く掘りなしたる井戸 ○眞萩 萩におなじ。萩を美稱していふなり ○すゞろに 何となくの意 ○千

町田 町は田の中の區域の謂。千町もあらんかと思はるるほど廣き田面 ○科戸の神 志那都彦、志那都姫の二神をいふ。風の神の稱

○よきて吹かなん よけて吹いてほしいの意 ○おちゐて おちつきて、心のしづまること

二三 笠置山（かさぎやま）

○類火（るゐくわ） ともやけの火事 ○餘煙（よえん） のこりの烟 ○卿相（けいしやう） 太政大臣、左右大臣及び大中納言をいふ ○雲客（うんかく） 四位五位の官人。即ち高位高官の人 ○歩跣（かちはだし） ○十善（ぜん）の天子（てんし） 天子を申上ぐる佛教の語 ○夜（よ）のうちに 九月二十八日の夜なり ○玉體（ぎよくたい） 御からだ ○田天（てんぷ） 農夫 ○野人（やじん） 田舍者。共に禮を知らぬものにいふ ○赤阪（あかさか）の城（しろ） 正成の籠れる城 ○青塚（せいちやう） 青く苔むせる塚 ○寒草（かんさう） やせくさ ○羅縠（らこく）の御袖（おんそで） うすもの、あやおりの御衣 ○幽谷（いうこく） おく深き谷 ○さしてゆく 指して行くに、下の笠置の山の笠とあるより、傘をさして行くとかけたり ○あめが下（した） 上に傘とある故に、天と雨とをかけたり ○かくれが 隱るべき家 ○憑（たの）む ○天恩（てんおん） 天皇の御めぐみ ○所存（しよぞん） かんがへ ○もだしける 口をつぐみてものいはぬこと ○網代（あじろ）の輿（こし） 青竹のあじろにて張りたる輿 ○張輿（はりごし） 疊表にて張り廻らしたる輿 ○怪（あや）しげなる 粗末なる ○夏臺（かだい） 地名 ○昔（むかし）の夢（ゆめ） すべての人事のはかなきを夢にたとへていへるなり

二四 近江路（あふみぢ）

○駒（こま）ひきわたる 望月（陰暦十五夜の月）の序にいへり。望月は、古、八月の駒牽に信州北佐久郡本牧村望月の牧より京に引き入れ、禁中へ駒を奉れるよりいふ ○木綿付鳥（ゆふつけどり） 雞の異名 ○遊子（いうし）猶殘月（なほざんげつ）に行（ゆ）きけん函谷（かんこく）の有様（ありさま） 遊子は、旅客。殘月は、夜明けて後まで殘れる月をいふ。函谷は、支那戰國時代孟嘗君の雞鳴の故事なり ○蟬丸（せみまる） 宇多天皇の第八皇子敦實親王の雜色にして、兩目物を見ず、和歌をよくし、又琵琶に巧みなり。博雅の三位に名曲流泉啄木を傳へしを以て名あり ○さだか 明らか ○この程（ほど） このあたり ○さざ波（なみ）や 大津へかかる枕詞 ○渡（わた）す わたる ○よそへ なぞらへ ○ところせし 處の狹くして置き場なき意。袖の雫の多くして、おき處なきなり ○松（まつ）のむらだち 松の林 ○滉瀁（くわうやう） 水の淨き貌 ○洲崎（すさき） 川中又は海中などに砂の高

く堆積したるを洲といひ、その川の長く遠く亙れるを洲崎といふ　○かつみ　眞菰「まこも」の古名　○葦手　文字をくづして草の生えたるやうにかきなす一種の書體　○野路のしのはら　荒れのみまさる野原の「野」に地名野路といひかけたり。しのはらは篠の生出でたる原なり

二五　岩倉公の逸事（上）

○逸事　ちらばりて、世によく知られてゐぬこと　○月日の小車　月日はまはり進むにより、車の速きになぞらへていへるなり。小車の小はやさしくいへる接頭語なり　○故右府公　故は死したる人にいひ、右府公は右大臣、岩倉公をいふ　○十年　○大詔のままに　おほみことにより　○富嶽　富士山　○互り　○さはみなき　限りなき　○史人の料　歷史をかく人の材料。史料　○神武の古に復る　神武天皇の御親政當時の狀にかへり。攝關等をおかず、天皇御躬親ら萬機を統べたまふこと　○大義　最も重大なる義理　○補翼　たすける　○碩學　大學者　○搢紳　搢は挿む、紳は大帶なり。笏を腰の帶に挿む

義にして、朝廷に立つ官位貴き人をいふ　○御覺えもめでたかりし　御寵愛の深かりし　○所見　かんがへ　○延喜天暦の跡　醍醐・村上兩帝の御治蹟　○公家　皇室をいひ、轉じて朝廷につかへる人人をいふ　○隙を生ぜし　ひまを作るにて、仲惡しくなりしをいふ　○有職　古の儀式作法を則らるる學問、又之れを研究する人人をもいふ　○達觀　物の表面のみならず裏までみとほすこと　○公武　朝廷と武家　○中興　一旦すたれたるを興すこと　○百揆　揆はハカルと訓ず。即ち天下の百事を度るなり。即ち國政をいふ　○庶政　もろ〱のまつりごと　○原動力　根本の力　○盤根錯節　わだかまりたる根、いりまじりたる節。世事の艱難にたとへていふ　○破竹の勢　勢に乘じて、力を入れずして容易に事の成るをいふ　○思ふらめど　思ふかもしれぬが　○心ある人　歷史に通じて世の成敗をわきまへたる人　○溯りて　○天平以來の宿弊　天平は聖武天皇の年號なり。當時藤原氏外戚の親を恃みて威權漸く盛也。即ち天平以來釀し來りたる惡弊にして、人臣天子に代りて政を攝行することなどを指す　○譴を蒙りて　おしかりをうけて　○蟄居　つゝしみて引き籠もり居ること　○參內　宮中へまゐること　○文書　かきもの　○起草

したがき

○經綸（けいりん） 天下の大事を經營すること

○策案（さくあん） はかりごとの下がき

○物論紛紛（ぶつろんぷんぷん） 議論のやかましくして、まとまりのつかぬをいふ

○躬（み）

○從容應答（しようようおうたふ） ゆつたりとおちつきて、あわてずさわがず、受け答へすること

○雄藩の主（ゆうはんのしゆ） 大諸侯をいふ

○大令（たいれい） 王政復古の大勅

○攝關（せつくわん） 攝政と關白とをいふ

○議奏（ぎそう） 武家時代に、幕府の奏聞を傳奏より聞きとりて、天皇に直接に御取次申す役

○傳奏（てんそう） 朝廷に居て、武家よりの奏聞を傳達する職、又單に奏上の詞を傳ふる人をもいふ

○洪圖（こうと） 大計に同じ。洪は大なる意圖ははかりごとの意

○旬日（じゆんじつ） 十日間

○就中（なかんづく） とりわけ

○禁闈（きんこん） 宮中

○達文（たつぶん） 布達の文

○女房の請謁を納ること（にようぼうのせいえつをいるること） 宮中の女官が臣下の願出でを取入れて、畏き邊りへ申し上ぐること

○宿弊（しゆくへい） 年來の惡しきならはし

○美事（びじ） よきこと

○晩年（ばんねん） 死する前の數年間をいふ

○扇の要（あふぎのかなめ） 大切なることをいふ

○偉丈夫（ゐじやうふ） すぐれて立派なる男子

○偶偶（たまたま） をりよく

○畫策（くわくさく） 策略をめぐらすこと

○功を推して（こうをおして） 功をあげて

○薨去（かうきよ） 三位以上の人の死をいふ

○一夕（いつせき） 或る晩

○功績（こうせき） いさをし

○開國の國是（かいこくのこくぜ） 一國を開きて、外國に交易通商を營むといふ主義。國是は一國の是として取るところの方針

○姦雄（かんゆう） 惡智慧にたけたる英雄

○賞を頒つ（しやうをわかつ） 賞與を授ける

○隱戸（かくれど） よそ目よりは見えぬやうにつくれる入口

○名士（めいし） 名高き人

○内外（ないぐわい） 日本と外國

○非（ひ） 惡しきこと

二六　岩倉公（いはくらこう）の逸事（いつじ）（下）

○剛膽（がうたん） きもふときこと

○要德（えうとく） 肝要の德

○長袖の人（ちやうしうのひと） 武人に對して公卿のことをいふ

○蕭牆の内（せうしやうのうち） 蕭牆は垣塀のこと。一家又は一國内のうちわ同志をいふ

○武勇のきこえある一人（ぶゆうのきこえあるいちにん） 暗に桐野利秋を指す

○謁見（えつけん） おめみえ

○枉げ（まげ） 改め

○動ずる色（どうずるいろ） さわぎやうす

○畏きあたり（かしこきあたり） 陛下

○君臣水魚（くんしんすゐぎよ） 君臣の間の情好のしんみつなるをいふ

○雲の上（くものうへ） 最も高き處なれば、宮中をいふ

○心交（しんかう） 極めて親しき交り

○心もとなし（こゝろもとなし） 心配なり

○夜な夜な（よなよな） 毎晩

○契り給ふ事（ちぎりたまふこと） 固く約束せられたること

○創業（さうげふ） 事をはじむること

○撥亂（はつらん） 亂れたる世を治むること
○皇祖皇宗（くわうそくわうそう） 皇祖は、天照大神を申し、皇宗は、天皇御代々の御先祖を申す
○輔弼（ほひつ） たすけること。臣下の君を助くるをいふ
○公達（きんだち） 身分高き男子を指していふ
○遊惰（いうだ） なまけおこたり
○旨（むね）を授（さづ）けて 極意をいひきかせて
○一門（もん） 一族
○家範（かはん） 一家の則り守るべき事項
○案文（あんぶん） したがき
○調印（てういん） 印をおすこと
○準（なぞら）へよ 從へよ
○公（おほやけ）の事（こと） 國家のこと
○寸時（すんじ） しばらく
○侍（さむらひ）やある だれぞゐるか
○あらざらん後（のち）の世（よ） 死したる後
○節節（ふしぶし） かどかど
○さりともと 何の甲斐もなく、役には立たざるべしとは思へども
○藻鹽草（もしほぐさ） もしほを採るに用ふる海藻にて、詩歌文章を集めたる書物をいふ
○誰（た）がおりたちてかづきあぐらん 藻鹽草を、誰が此浦におり立ちてかづき上げて役に立たせるものであらう。已にかはりて其の任に當るものは誰ならんといへる意
○節操（せつさう）を二つにす みさをを守りおほせざるをいふ
○晩節（ばんせつ）を云々 前原一誠、江藤新平、西郷隆盛等を指す
○斟（く）ませ
○衾（しとね）
○杯（さかづき）まゐれ 酒をのめ
○夢・現（ゆめうつゝ）
○序（によ） はしがき
○いや いよいよ

○丈夫（ますらを）の伴（とも） 丈夫は男子といふに同じ
○地下（ちか）の靈（れい） 人は死して地下の黄泉に赴くをいふによりていふ
○百載（ひやくさい） 百年

二七　一萬（まん）と箱王（はこわう）

○新玉（あらたま）の 年、春などの枕詞
○母御前（ははごぜん） 母様におなじ。御前は昔人を呼ぶ敬語
○いざさせ給（たま）へ さア〳〵知らせて下され
○遙（はる）かに忘（わす）れたる方（かた） 其の昔、赤澤山の狩獵に、先夫祐泰の工藤一郎に討たれたるときの悲しみをいふ
○消（き）え入（い）るばかりなり 深く感じて、たえ入るばかりなること。哀しみの切なるをいふ
○曾我殿（そがどの） 祐泰害せられたる後、其の妻、十郎、五郎の兩兒を携へて祐信に嫁したり。故に兩兒は曾我の姓をおかせるなり
○心強（こゝろづよ）く 氣づよく、人情にひかれざるにいふ
○工藤一﨟（くどういちらふ） 工藤祐經の通稱
○きり者（もの） 切り者。權力ある家來。寵臣
○女房（にようばう） 貴族の家の侍女
○秋（あき）も闌（た）け 秋もふけて
○雁（かり）がね 雁の音。轉じてたゞ雁にいふ
○飛（と）ぶ翼（つばさ） 飛ぶ鳥
○人倫（じんりん） 人のなかま
○和殿（わどの） お前。對稱の人代名詞

○河津殿 河津三郎祐泰 ○さめざめと 涙を流して泣き入ること ○こざかしく 利口ぶるをいふ ○乳母の女房ばら ○人もこそ聞け 人も聞かん ○和上﨟たち 若様たち ○竹の小弓 おもちやの弓をいふ ○薄矧 うすく矧ぎたる矢。矧は矢竹に羽をはめて矢をつくること ○遠侍 古、武家の家にて中門の際の廊番の武士のつめし所 ○明り障子 今の普通の障子をいふ ○仰天 おどろくこと。びつくりする意 ○謀叛 ○千鶴御前 頼朝と祐親の女との間に生れたる男子 ○芳恩 ありがたきめぐみ ○生生世世 此の世も後の世も未來永劫の義。

新撰國語讀本詳解 巻五終

新撰國語讀本詳解 巻六

一 朝見式勅語

○朝見式 天子に拝謁する式 ○踐祚 帝王の御位につき給ふこと ○罔シ ○顧フニ ○睿明ノ資 事にさとくかしこき御うまれつき ○膺リ ○振刷 志をはげまして悪をのぞく ○大憲 憲法 ○祖訓 皇祖の遺訓 ○昭 ○典禮 定まりたる儀式 ○須テ ○蒼生ヲ撫ス 人民をいたはる。蒼生はあをひとぐさにして、民のことをいふ ○庶績 もろ〳〵のいさを ○咸熈リ ○維揚ル ○鴻業 大なる事業 ○前古 むかし。いにしへ ○繼承 うけつぎ ○祖宗 皇祖皇宗 ○宏謨 大なるはかりごと ○條章 箇條 ○愆ル ○失墜 おとし失ふ ○有司 つかさ人。官吏のこと ○須ラク ○和衷協同 衷心より

和合して、共に力を合すること　○體シ　心にとゞめ持ち　○奬順　勸めつとめ從ひ行ふ

二　奉答文

○誠惶誠恐　おそれみつつしむこと　○大行天皇　大行は大逝の義。天皇の崩御ましまして、未だ謚號を奉らざる間の尊稱　○奄に　○登遐　主上の崩御を申す語　○叡聖文武　主上の德にすぐれさせ給ふを申す語　○聖猷　天皇のはかりごと　○睿圖　天皇のはかりごと　○億兆　人民。數の多きよりいふ　○和協　心をあはせて、力を一にすること　○忠誠　あつき忠義　○至情　まごころ　○輸さしめ　○休光　美しき光　○宇内　天下。世界　○臣庶　もろもろの人民　○感激　感じて心のふるひたつこと　○匪躬の節　帝王の爲めに、身命をかへりみずしてつくすみさを　○效し　○夙夜　朝晩　○淬礪　刀劍を鍛えとぐこと。轉じて己れの心をみがくこと　○扶翊　たすける

三　韓國併合詔書

○平和　やはらぎ。安なること　○維持　つなぎて保持する意　○成績　成就したるいさを　○堵ニ安セス　堵は牆なり。かきの中に安んずる意　○公共　一人の私有にあらざる意　○保障　ハシヤウと讀むを正しとす。租稅を輕くして、人民を保護するをいふ　○禍亂　わざはひ。みだれ　○淵源　事の本源　○協定　協議して決定すること　○杜絶　ふさぎ絕つこと　○銳意　心をはげましふるふこと　○安寧　やすらか　○民衆　おほくの民　○瞭然　分明にして疑ひなき貌　○優遇　ねんごろなるもてなし　○綏撫　安んじてなでいつくしむ　○康福　さいはひ。康は美稱　○鞏固　たしかなること　○總轄　すべくくること　○百官　もろもろの官吏　○有司　官吏

四　伊藤公を誄ぶ

○兇徒 わるもの ○狙撃 ねらひうち ○國歩 一國のいきほひ、又は運命 ○渝ル ○交友ノ誼 友情のよしみ ○垂死 死にかゝること ○回憶 おもひめぐらすこと ○倡へ 唱へにおなじ ○內訌 うちはもめ ○要撃 まちぶせしてうつこと ○徵士 朝廷に召し出されし人 ○宏謨 大なるはかりごと ○勳業 いさをし ○首メ 始めにおなじ ○淬礪 刀劍を鍛へ磨くこと。轉じて己の心をみがく意に用ふ ○王臣匪躬 易經の語を引けるなり。帝王のために身命をかへりみずして忠義をつくすみさを ○宗と もと ○寧處 安安とおちつき居ること ○見學 其の地に行き、實地に見聞して學ぶこと ○暴ニ ○訃 死去のしらせ ○電聞 聞くことの敬語 ○震悼 天子の心をいたふたまふこと ○白叟 白髮の老人をいふ ○稱贊 ほめはやす ○振古 前古におなじ。振は古昔の義 ○紹グ ○瞑セシムル 眼を閉ぢさせる。死せしむるをいふ

五 秋の歌

○さやかに はつきりと ○ぬさもとりあへず 神にさゝぐる幣（ヌサ）も持合せず ○神のまにまに 神の心にまかせて、紅葉の錦をささぐる意 ○千千 さまざま ○久方の 天文に關するものの枕詞 ○月の桂 月の中に在りて想像せらるゝ木 ○わが身ひとつの秋 我身のみに訪ひ來れる秋 ○うちかはし 互にならべて

六 秋の夜

○めでたき けつこうなる ○團團 まるまると。まん丸き貌 ○海原 海のひろきを以ていへり ○甍 屋根の瓦 ○目ざましく めにたつ ○わが魂 己が心 ○靈氣 くしくたへなる氣 ○浸み入る ○中の秋 陰暦八月の異稱 ○雜木 様々の木 ○かすけく呟く かすかにささやく ○素月 白く

さえたる月
○畫趣　畫のあぢはひ
○輝を揚げ
○闊葉・纎葉　ひろき葉とほそき葉と
○おのがじし　めいめい
○詩情　詩の興味
○爽涼、清澄　さはやかに涼しく、きよきこと
○釀し　つくり
○廊　廊下
○天心　天の中央
○光華　ひかり。光氣
○六合　國。世界。上下東西南北をいふ
○頓に　にはかに。急に

七　西郷隆盛に與ふ

○幕下　大將の旗下。轉じて大將の尊稱
○故山　故郷
○謦咳に接する　おめにかかる
○舊雨の感　蘇軾黄州に赴く時、弟轍と別れに臨みて贈答せし詩の故事により、故人を追懷する情をいふ
○滄桑の變　滄海が桑田に變ずるをいふ。もののかはるにいふ
○旗鼓の間　戰爭中
○巨魁　おやだま
○謀主　主となりて計を立つるもの
○素志　平素の志
○異圖を懷く　むほんの心を持つ

○公布　一般にふれ示すこと
○佐賀の賊　明治七年江藤新平の謀反をいふ
○熊本・山口の叛徒　明治九年、熊本に神風黨起り、次で前原一誠等山口に反せるをいふ
○自省　自らを思ふこと
○山林に韜晦す　山林をかくれてあとをくらます。愚のまねをするをいふ
○奇貨　珍らしきもの
○僥倖せんとす　萬一を得んとす。もつけの幸を得ようとする
○讒誣　あざけりわるくいふ
○蒼生　萬民
○靡然　なびく貌
○卓識　すぐれたる智識
○洞察　みぬく
○浸潤　しみこむこと
○衆口金を爍す　萬人讒言すれば遂に金鐵の如く考の堅固なる人を惑亂せしむるに至るをいふ
○輦下　帝都の下。鳳輦の駐まる都
○履踐　ふみおこなふ
○敎唆　そそのかすこと
○不遇　ふしあはせ。相當の立身をなし得ざるをいふ
○故舊　むかしよしの知りあひ。ふるきなじみ
○毀譽　そしりほまれ
○度外　よそごと
○後世　後に學ぶもの
○骨肉相食む　父子兄弟のごとき血をわけたるもののいさかひ
○寸毫　少し
○麾下　部下におなじ
○國憲　國の法律
○公論　天下の人、悉く當然とする議論
○情懷　こころ

八 城山の曲

○城山 鹿兒島市の西北なる山丘にして、鶴丸城址なれば、かく名づく ○達人 道理に通達する士 ○拔山蓋世の勇 力は山を拔き、氣は世を蓋ふといふほどの勇あること ○榮枯は夢か幻か 人の榮枯のはかなきをいふ ○大隅山の狩くら 狩くらは、狩場をいふ。隆盛は、大隅國の狩場に心をすが〳〵しくして何も思はずに居るならん ○眞如の月 眞如は佛語。眞は眞實、如は如常にして變ぜざること。不變不易の本體を指す。煩惱の雲の失せたるすが〳〵しき心をいふ ○無念無想 心、人生の慾念を離れて眞如の妙境に入るをいふ ○いかり猪の 怒りたる猪の如く ○騎虎の勢 止まんとして止みがたき勢をいふ。虎に遇ふて已むを得ず虎に飛び乘れる人が、虎背より下れば虎に食はるゝを以て、何處までも虎背に取りつきて行く喩 ○一徹に ひとすぢに ○諸手の軍 諸軍。諸手は、左右の手なり ○若殿ばら 若者共 ○紅の血汐 霜ふる時の紅葉の紅なるが如き、赤き血しほ ○をたけび 勇しくさけぶこと ○木だま 木靈。山彦。反響をもいふ ○ほくそ笑み ほゝと輕く笑ふこと ○寵遇 御寵愛

○あへなく はかなく ○岩崎 城山の一凹地にして、岩崎谷といふ。隆盛、殘兵を以て據守すること二十餘日、九月二十四日戰死せし所 ○悄然 しよんぼり ○非情 無心といふに同じ ○戎衣 軍服

九 伊太利の海岸

○一行 仲間 ○纜 ともづな ○杳茫 ひろびろとして遠き貌 ○屹立 そびえ立つ ○漁人 れふし ○舷下 ふなべりの下 ○濃か こまやか ○紋理 あやすぢ ○蒼 天 ○仰臥 あふのけに臥す ○小嶼 小じま ○偃し ○羣狗 多くの犬 ○不毛 あれ地。草木など生ぜぬ地 ○灣頭 灣のほとり ○舟人 船頭 ○一叢の藻 ○歷歷 ありありと見ゆる貌 ○玲瓏透徹 光りかゞやきて、すきとほること ○斷崖 きりぎし ○漕手 ○巖壁 きりぎし ○罅隙 すきま ○蘆薈 あしのくさむら

十○　○果物の

○清清し　心氣さはやかに、心地よきをいふ。　○涼趣　すずしみ　○詩史　詩を以て事件の經過、又は故人の傳記等を書きしるしたるもの

○津津　あふるる貌　○詩趣　詩にいひあらはすべき趣　○拂底　底をはらひても殘りなきこと　○風貌　なりすがた

○堂堂　いかめしく、りつぱなる貌　○夏橙　なつみかん　○這般　この。是等の　○鳳梨　アナナス

○舊套　ふるき物事の範圍　○道破　いひやぶること　○秋晩　秋のくれ　○寥天　さびしき空　○凋落　しぼみ枯るること

○玻璃皿　ガラスのさら　○曉雪　あさのゆき　○月の雫　甲州に産する葡萄の實の砂糖漬　○神往　心の或る方に向ふこと

○柘榴　○仙味　俗ぬけたる味

第十一　鎭守の森

○滿目　み渡すかぎり　○蕭條　ものさびしき貌　○鬱葱　樹木の盛んに茂れる貌　○一陣の涼風　としきりふくすずしき風

○殿角　やしろのすみ　○圓か　おだやかなること　○花信　花のたより　○蔦蘿　つたかづら

○瑞籬　神のやしろのゐがき垣。　○神さび　かうがうしきこと　○神々し　たふとくおごそかなること　○涼を趁ふ　すずみすること

○婆娑　亂れ動く貌　○祠頭　社のほとり　○旗幟　はたのぼり　○翩翻　ひるがへる貌

○滿村　むらぢう　○旱　ひでり　○神聖　けがれなきこと　○氏族　うぢ、やから　○部民　部曲の民

○鎭座　神靈の其地に鎭りますこと　○太しき高き　宮の大きく立派なるをいふ　○前賢の靜魂　むかしの賢人のたましひ

○天祐　天のたすけ。天のめぐみ　○鼓舞　ふるひおこすこと　○權道　はかりごと。てだては正しからざれども、目的の正しきこと

○方便　てだて　○發揮　あらはし示す　○興奮劑　感じて心をふるひ起こさせるくすり

○窟宅　しづまるところ　○草萊　草や、つる草　○戀戀　こひしたふさま　○風化　上たるものゝ德に、下たるもの

の化せらるること

一二 白河殿の夜討

○白河殿 崇徳上皇の御所なり。一に白河院とも稱す。山城國愛宕郡二條通の北に在り ○左大臣殿 藤原頼長のこと ○武者所 院武者所の略。院の御所を警衛する武士の伺候する所 ○除目 前官を除き新官を目する義。諸臣任官の式をいふ ○藏人 一にクランドともいふ。唐名を侍中といふ。藏人所の職員をいふ ○物騷 物さはがしきこと ○安藝守清盛 平清盛なり ○郎等 けらい、從者の事なり。又郎黨とも書く ○伊藤武者景綱 武者所の職に在るを以ていふ ○合はぬ敵 昔は敵味方家格を重んじたればかくいふ ○九代 淸和天皇、貞純親王、經基、滿仲、頼信、頼義、義家、義親、爲義、爲朝、 ○八幡殿 義家をいふ ○判官 檢非違使の判官なり、罪人を糺明し、交案を署理す ○胸板 鎧の胴の一部の名稱。化粧坂の上にあり ○かけず射通し 全く射貫くこと

○射向の袖 鎧の一部の名稱。鎧の袖の左方なり ○御曹司 堂上諸家中の子息をいふ ○金澤の城 一に孔雀柵とも厨川館ともいふ ○直垂 ここにいふは鎧直垂の事なり ○澤瀉縅の鎧 二色の絲を以て、一は地色、一は澤瀉の葉の如く三岐の形即ち四の如くに袖及び草摺に縅したるもの ○黄河原毛 黄ばみ多き河原毛なり。河原毛とは白く黒ばみたるをいふ ○剛の者 勝れて強き者 ○かたかは破りの野猪武者 剛情にして前後を辨へず猪の如く突進する武者をいふ ○矢目 矢の觸れ又は徹りたる痕なり ○毛 札(さね)を綴りたる絲 ○鹿毛なる馬 鹿の毛に似て茶褐色なる馬をいふ ○公家 朝廷をいふ。轉じて朝廷の吏員をいふ ○金覆輪の鞍 鞍の山形の端に金の薄き薄金をふせたるなり。大將之を用ふ ○かせられて 支へられての意なり

一三 白峯の陵

○相阪(あふさか) 近江國逢坂の關 ○關守(せきもり) 關の番人 ○和(な)ぎたる 風おだやかになりたる ○象潟(きさかた) 羽後國に在り

○蜑(あま)が苫屋(とまや) ○佐野(さの) 上野國に在り ○歌枕(うたまくら) 歌をよむ材料 ○葭(よし)がちる 難波の枕詞 ○筇(つゑ)

○兒(ちご)が嶽(たけ) ○うばら ばらに同じ ○うら 心 ○紫宸(ししん) 京都禁中の正殿なり。大禮を行はるゝ所にして、南に向ふを以て南殿とも稱せらるゝ殿階の左に梅右に橘を植ゑたり ○清涼(せいりやう) 天皇平生御住居したまへる處 ○御言(みこと)かしこみて おほせを謹み守りて

○思(おも)ひきや 思ひがけぬことである ○麋鹿(びろく) 麋は鹿の大なるもの。なれしか ○おどろの下(した)、 草木(いばら)の生ひ茂れる所

○神(かみ)がくれ しづまる ○宿世(すくせ)の業(げふ) 前世の惡業 ○供養(くやう) とむらひゐるから

○松山(まつやま)の歌 松山の浪のけしきは、昔も變りはなけれども、上皇のかたなく御かくれなされたるはいたましと也。かたなくとは、あとかたなくと潟とをかけたり

○牀(とこ) ○衾(ふすま) ○神清(しんす)み 心がすみ ○物(もの)とはなしに 何となく ○すさまじき ものすごき心もち

一四 我(わ)が家(いへ)の富(とみ)

○陋(ろう) みにくきこと ○碧空(へきくう) あをぞら ○雪霰(せつさん) ゆきあられ ○秋蛩(しうきよう) こほろぎ ○觀(くわん)ず 心に深く考ふること

○宇宙(うちう) 天下といふに同じ ○老李(らうり) 年經たるすもも ○須臾(しゆゆ) たちまち ○紅雨(こうう) あかきあめ。桃の花のはげしく散る貌

○霏霏(ひひ) あめなどの盛にふる貌 ○白雪(はくせつ) 李の花のはげしく散るさまをいふ ○紛紛(ふんぷん) 入りまじりて亂るゝさまにいふ

○滿庭(まんてい) にはいつぱい ○仔細(しさい) こまか ○椿(つばき)の花瓣(くわべん) 椿のはなびら ○山梔(くちなし) ○五月闇(さつきやみ) さみだれのふる頃のやみの夜

○鬱陶(うつたう)し ○香(かぐは)し ○無口(むくち) ものいはぬこと ○宜(むべ)も 最も ○碧梧(へきご) あをぎり

○亭亭(ていてい) 木のたけ高くますぐにのびたる貌 ○些(さ)の邪(じや) すこしのよこしま ○手水鉢(てうづばち) ○琥珀玉(こはくだま) 李の實をたとへていふ

○滾滾(こんこん) ぼた〳〵と地に落つる貌 ○つく〳〵ぼふし 蟬の一種 ○紅(くれなゐ) あか ○名(めい) 苑(えん) 有名なる花ぞの

○閑寂(かんせき)の趣(しゆ) あたりものしづかにしてさびしきおもむき ○蛻巖(ぜいがん) 播州明石藩の儒臣 ○荊扉(けいひ) しばの戸

○木枯(こがらし)の風(かぜ) 秋の終りより冬の始めにかけて吹く風 ○翩翩(へんぺん) ひらひら ○金色(こんじき) 金の色、黄色 ○庇(ひさし)
○寸金(すんきん) 一寸四方を寸何といひて、人に貴ばるる程の錦 ○流石(さすが)

一五 練馬(ねりま)の一夜(や)（上）

○雨痕(うこん) 雨のあと ○泥濘(でいねい) ぬかるみ ○甥(をひ) ○姪(めひ) ○嫂(そう) ○頑是(ぐわんぜ)なき ○小母(をば)さ
ん ○なりまさりて 次第にふえゆく意 ○爾來(じらい) それより後 ○身世(しんしやう) 財産 ○早世(さうせい) わかじに
○送葬(さうさう) とむらひ

一六 練馬(ねりま)の一夜(や)（下）

○はにかむ はづかしがる ○零落(れいらく) おちぶれ ○鯰(なまづ) ○誇張(こちやう) 事實より仰山らしくいふこと ○虚言(うそ)
○噓(うそ) ○素樸(そぼく) 飾りけなくして、ありのままなること ○饗(きやう)す 馳走する ○和氣藹藹(わきあいあい) やはらぎたる氣のみちたる貌
○熟睡(じゆくすゐ) よくねむること ○朝餐(てうさん) あさめし ○堆(うづたか)し ○下戸(げこ) 酒量の少なき人

一七 修辭上(しうじじやう)の轉義(てんぎ)

○修辭(しうじ) ことばをさめとゝのへて、意義を明らかならしむること ○怒濤(どたう) 怒れるおほなみ ○秀頭(はげ) ○綿密(めんみつ) こまか
○比喩(ひゆ) たとへ ○當面(たうめん) まのあたり ○具體的(ぐたいてき) 形をそなへたるもの ○梓弓(あづさゆみ) 春の枕詞 ○集注(しふちう)
一所にあつめること ○一括(くわつ) ひとくくり ○僻遠(へきえん) かたゐなか ○平凡(へいぼん) なみなみなること ○刺擊(しげき) さしはげま
す ○抽象的(ちうしやうてき) 共通なるものをぬき出して綜合したるものにいふ ○蒼穹(さうきう) おほぞら ○舊套(きうたう) ふるくさき範圍 ○斬(ざん)

新 めあたらしきこと ○隱微 かくれてかすか ○遒勁 つよきこと ○虛飾 うはべのかざり ○天眞 うまれつきのまゝ ○纖弱 よわい ○終生 一生 ○充實 みちみつる ○內容 形式に對して、内部に含まれたる實質的材料 ○天眞爛漫 つゝみ飾りなく心のまゝの言動にあらはるること ○叫喚 わめき ○大慈大悲 慈悲の太なるをいふ ○凡夫 なみなみなる人 ○惻隱 あはれに思ふこと ○傾聽 耳を傾けてよく聞くこと

一八 今樣と朗詠

○今樣 平家朝時代の語にていふ當世の意。從來行はれたる和歌に對していふ。通常七五の句を以て成る ○朗詠 詩歌又は文章中の佳作妙句を、面白く節をつけて歌ふこと ○萬劫 年久しきこと。劫は佛語にして、極めて永き時間をいふ ○淺茅が原 淺茅（みじかくして繁茂せざる茅）の生えたる原 ○早春 春のはじめ ○氣霽レテハ 天氣のはれたる時は ○風新柳ノ髮ヲ梳リ 風の柳を吹き靡かしたるは、髮をくしけづるに似たる意 ○浪舊苔ノ鬚ヲ洗フ 苔生えたる岩に、浪のかゝる樣の髮を洗ふに似たるをいふなり ○子日 子の日に野外に出でて小松を引きて祝ふこと ○摩腰 松は衆木の中、獨り風霜に萎まずして常磐なる故に、子日之れに觸れ、腰を摩で祝する也 ○千年之翠 松の常磐なることをいふ ○二月之雪 二月は梅の散る頃なるより、落梅にたとへていふ ○十八公 松のこと ○一千年色 松の常磐の色の、幾世を經ても更らざるをいふ ○瓢簞屢空 顏淵が身貧しくして、わづか一瓢の酒、一簞の食より外に得ること能はざる境に處して、晏如として道を樂めるをいふ ○滋 しげし ○藜藋 あかざ ○銷 とざせり ○樞 とぼそ ○泰山 支那の名山。山東省にあり ○細流 小川 ○碧潭之色 綠の淵の色 ○嘉辰令月 めでたくよろこばしき時節 ○樂未央 歡樂の盡きざる意 ○長生殿 寢殿のこと ○春秋富 人の生ひ先長きをいふ。春秋は人の年齡をいふ ○不老門前日月遲 不老は萬歲を祝して名づけたる名目なれば、老いの來ることもなかるべしとの意

一九　俚諺論

○俚諺　ことわざ　○羅馬　Rome 今の以太利羅馬を中心として、其の近傍に誇りたる古代の國　○蟄　○恰當　てきたう。丁度よくあてはまること　○寸鐵人を刺す　警語を以て相手の急所をつくこと　○人口に膾炙す　あまねく人の口のはにかかり、稱賛せらるる意　○律語　調子のことば　○律呂　音樂の調子。律は陽調、呂は陰調　○弱り目に祟り目　泣きつらに蜂といふに似たり　○抽象　多くの物體中より一二の性質を抽き出せるもの　○具體的　形を具有するもの　○誇張　實際より仰山らしくいふこと　○三度目が定の目　事を回數を重ねて演じても、結果の同一なるときは、其の事確實なりとの意　○三人よれば人中　人三人集まれば、衆人の中に在りといふもよろしとの意　○黒犬にくはれて灰の和滓におそれる　前に懲りることあれば、後には何でもなき事に恐るゝをいふ。灰の和滓は黒き色のものなれば、之を道路にすてゝおけば恰も黒犬の臥したるかとあやしまるるなり　○實しやか　まことらしい　○パラドックス　Paradox表面上道理に合はざる如く見えて、其實よく道理を穿ちたるを

いふ　○深邃　おくふかきこと。智慧の深き形容に用ふ　○方便　てだて　○對照　てらしあらせ　○長者の萬燈より貧者の一燈　長者とは富人をいふ。佛說に、或る國王の佛に供へたる萬燈は油盡きて消えしに、或る貧女の信心を凝らして捧げたる一燈は宵通し輝きたりといふより出づ　○比照　照しあはせて、比べ見るをいふ　○比喩　たとへ　○趣味の津津　おもしろみの滿ちあふるる貌　○詩心　詩を解する心　○道心　義理より發する心　○高雅幽玄　けだかくおくふかきこと　○暗喩　相似たる他の事柄を借り來りて暗にたとへていふこと　○寓言　事實をかりに設けたることば　○商賣は牛の涎　商賣は、牛の涎のねばきが如く、しつこくねばからざるべからずとの意　○常恆　つねづね。時の古今に關係なく、永久變化なき意

二〇　「ヴェニスの商人」法廷の場（上）

○法廷　裁判所　○頑石　かたくなることをにたとへていふ石　○執念　思ひこみて動かぬ一心　○不慮　思ひがけ

なきこと　○損亡 そん　○體たらく 有様　○殘忍 人情なすに忍びざる無慈悲の所業　○百八煩惱 百八種の煩惱。煩惱は愛、慾、希望などの如き、衆生の心をまよはすもの　○意趣返し うらみを返すこと　○蝮　○詰り

○代物 商品　○反古同然 ほごがみと同じく無用のもの　○政道 まつりごと　○取裁かす

二一「ヴェニスの商人」法廷の場（中）

○斥く　○毛頭 少し　○德澤 めぐみ　○畢竟 つまり　○偉德 大なる德　○寶冠 寶玉にて飾りたる天子の冠　○法度 おきて　○誨　○承引 承知　○所爲 なすところ　○曲事 間違つたこと　○底意 心底　○傭 かた　○禍根 わざはひのもと　○判官 裁判官　○偉い　○異議 他の意見　○依估贔負　○露す　○自辨 費用を自分にて支拂ふこと　○宣告 いひわたし

二二「ヴェニスの商人」法廷の場（下）

○血汐　○鮮血 なま血　○國庫 國家の收支をなす本源　○沒收 とりあげる　○條文 法律の箇條にある文　○科料 罰金　○秤皿　○家財 家の財産　○躊躇 ためらひ　○論判 論じて其の理否を判ずること　○自儘 我がまま　○直接 ちよくせつぢか。之に反するを間接といふ　○露見 あらはること　○犯人 罪人　○仁恕 なさけいつくしみ　○悔悟 くいさとり　○制規 きまり　○赦免 ゆるし　○只管 一向　○紳士 英語Gentlemanの譯。上流社會の人をいふ　○履行 ふみ行ふ　○調印 印をおすこと

二三　風雅論

○風雅 正しくみやびやか　○專有 ひとりじめ　○幽棲 獨りかくれて、靜かにくらすこと　○骨董 古道具

○鑑識 めきゝ・みわけ・鑑定に同じ ○特權 別段の權利 ○境遇 めぐりあはせ ○多寡 多少に同じ

○優美 ひんよくうつくしい ○感得 心に感じ得る ○田夫 農夫 ○刹那 時間の少數を數ふる稱呼 ○大宮人 大宮に仕ふる人。大宮は、禁中の尊稱 ○一朶 朶は花枝なり ○眞醇 極めてまじりけなきこと。純粹に同じ ○名器 すぐれたるうつは ○技藝 てわざ ○俗物 卑俗なる人物 ○箙 矢をさして負ふもの ○普及 あまねく及ぼす

○改善 よき方に改むる ○餘裕 ゆつたりとして迫らざる義 ○暗黑 まつくら ○齷齪 普通アクセクと訛りていふ。いそがしくこせつく義

○吸收 すひこむ ○呪ふ ○嚴冬 寒さはげしき冬 ○洒然 心のさつぱりした貌

○購ひ 買ふこと ○營營 いそがはしく往來勞作すること ○玩物喪志 耳目の好む物に役せられ、珍奇の物を愛玩して、自己の志を喪失するをいふ ○今戸燒 東京市淺草區今戸町にて製する粗朴なる土器

二四 芭蕉と蕪村の句

○やすらふ 「やすむ」の延語 ○終日 一日中 ○平安城 京都をいふ ○三徑 三つのこみち

○蓼の花 ○時雨

二五 成敗と是非

○不遇の歎 時に合はずして、不仕合を歎く義 ○雪冤 無實の罪をはらすこと ○陋見 あさはかなるみかた

○史氏 歷史をかく人 ○關東 徳川氏をいふ ○囘護 かばふこと ○曲筆 理を非に曲げたる議をかくこと

○史筆の精神 歷史論述の精神 ○天鑒 天のみそなはすこと ○大人 大德の人 ○知己 善く己れの心を知る人

入る

二六　如意輪堂

○霜月　十一月　○渡邊の橋　今の大阪市天神橋邊に在りしといふ　○堰き　○小袖　袖を小くして袖下を丸くぬひたるもの

○馬を引き　馬を與へ　○物の具　よろひ　○色代　あいさつ　○むげに　非常に

○蜂起　蜂の如くむらがり起ること　○周章　あはつること　○催勢　うながし集めた兵　○舍弟　自分の弟　○帶刀　帶刀舍人の略稱。兵仗を帶して東宮を守りたるもの　○尩弱の身　かよわきからだ　○先朝　後醍醐天皇　○宸襟　おほみこころ

○逆臣　尊氏　○武略　いくさのはかりごと　○謗　そしり　○有待の身　後來、事をなさんと、時機を待つ身

○早世　はやく死に　○雄雌　かちまけ　○龍顔　天子の御顔の相　○傳奏　取次ぎて奏聞する役目の人

○直衣　昔の官人の服　○主上　後村上天皇　○南殿　紫宸殿　○照臨　ごらん　○叡慮　天皇の御心

○累代　代々　○神妙　奇特なること　○機に應ずる　をりにしたがふ　○股肱　手足の如くたのみにすることをいふ

○とかく　かれこれ　○新發意　○過去帳　死人の法名を記しおく帳面　○いる　入るに弓を射るをかけたり

○逆修　死せざる前に、前以て自分のために佛事を修めて冥福を祈ること

二七　日蓮上人

○依然　もとのさま　○溢美　賞美すること實際よりも大なること。ほめすぎること　○極致　その道の奧底を盡しきはめたること

○證悟　實際に經驗してさとること　○法敵　宗教上の敵　○眞言亡國　眞言宗は、國を亡ぼすとの義　○律國賊　律宗は國賊なり　○念佛無間　念佛宗を奉ずるものは無間地獄におつとの義　○禪天魔　禪宗を奉ずるものは天魔なりとの義

○喝破　いひのけること　○迫害　せまりさまたげること。苦しめなやますこと　○要擊　待ちぶせして擊つこと　○檀越　檀家のこと

○打僕刀劍　うちきず、かたなきず　○弘通　あまねく世にひろめること　○龜鑑　手本　○大

義　大なるすぢみち　○衆生（しゆじやう）　佛語。おほくの人人　○威武（ゐぶ）　いきほひ　○豪邁なる膽氣（がうまいなるたんき）　心のたけく勝れてきもだまのすはりたること　○恩誼（おんぎ）　めぐみ、あはれみ　○妙法（めうほふ）　不思議なる道。蓮華法をいふ　○歸依（きえ）　信仰して我が生命を其のものに托すること　○慟哭　聲を立てゝなきさけぶ　○刑場（けいぢやう）　しおき場　○消息文（せうそくぶん）　手紙　○就中（なかんづく）　とりわけ　○釋尊（しやくそん）　釋迦をいふ　○十方の諸佛（じつぱうのしよぶつ）　十方は、四方四隅上下にてなほ世界中といふが如し　○淨土（じやうど）　極樂淨土の略。佛教にて、佛果を得たる亡者の行く世界とす。西方十萬億土にありといふ　○煙波（えんぱ）　もやと波　○檀越（だんをつ）　旦那におなじ。布施又は施主の義　○舍人（とねり）　牛車の牛飼又は馬の口取をいふ　○こよなく　此の上なく　○融會（ゆうくわい）　とけて互にまじり合ふこと　○全人格（ぜんじんかく）　全き人がら

新撰國語讀本詳解　卷六終

大正二年五月二十日印刷

大正二年五月二十五日發行

複製不許

編纂者　中等教育國語研究會

發行者　東京市日本橋區數寄屋町六　木田吉太郎

印刷者　東京市牛込區水道町二十六　福山福太郎

發行所　東京市日本橋區數寄屋町六　書肆　集文館

電話局本局三二一二

振替一三九八三

定價金卅錢

274
130

終

PUBLISHER
TOKYO